ウィリアムズの太平洋戦争

南の島から大戦下の日本へ

名 倉 有 一

表紙写真

池田徳真さんと電話で話すウィリアムズさん
撮影場所：英国デボン州のウィリアムズ宅
撮影時期：一九九二年七月二〇日
筆者撮影

ウィリアムズの太平洋戦争

―　南の島から大戦下の日本へ　―

名倉有一

はじめに

太平洋戦争中、日本が米国に向けて行った謀略放送を記録した『日の丸アワー』という中公新書があった。国立国会図書館デジタルコレクションで公開されていて、自宅から閲覧できる。著者の池田徳真（のりざね）さんは外務省の嘱託をしていた人で、参謀本部の依頼を受けてこの放送を担当した。

本の中に、彼が一生忘れられないという場面がある。一九四三年一二月、東京駿河台の文化学院中庭に、放送のために選抜された一〇人余りの捕虜が整列していた。参謀本部の宣伝担当、恒石重嗣（つねいししげつぐ）少佐が彼らの前に立ち、ひとりずつ協力意思を確認していった。すると、軍人ではなく、英植民地省の行政官だったひとりの英国人が進み出て協力を拒否した。再度の説得にも頑として応じず、ついに少佐が腰の軍刀に手をかけ、周囲の部下が慌てて制止する騒ぎとなった。その英国人は東京憲兵隊本部に連行され、文化学院に残った捕虜たちは、彼が殺害されたと信じた。

池田さんは、二階の事務室に引き揚げたときの様子をこう記している。

> みんな考えもしなかった事態に興奮していた。「どうだい、俺たち、ああいう場合にあの態度が取れるかい。」と、私が言った。誰も、それに答えることができず黙っていた。勝負はなんと言っても、われわれの負である。先日「協力を拒みたる者は、その生命を保証せず。」という命令を受けているのに、対敵協力を公然と拒絶するとは、イギリス人とは驚きいった人間である。戦後ウィリアムズは、この勇敢な行為のために英国政府から勲章をもらった。

それまで命令と上下関係を当然視して生きてきた私は、この展開に衝撃を受けた。なぜウィリアムズさんはただひとり命がけで拒否し、なぜ終戦まで生き延びることができたのだろうか。興味を覚え、余暇に調べ始めた。

紆余曲折はあったが、ウィリアムズさんと連絡がついたきっかけは、彼がマキン島（現・キリバス共和国）で捕虜になったという『日の丸アワー』の記述だった。日本海軍が島を占領した際に作成した捕虜名簿が防衛研究所で見つかり、ケンブリッジ大学の卒業生だと分かった。同大学の親切な仲介で本人から長い手紙が届き、英国の自宅を訪ねることができた。彼はマキン島から横浜、香川県善通寺、東京を経て長野県満島（みつしま）（現・天龍村）で終戦を迎えていた。池田さん、恒石さんはじめ内外の関係者からも話を伺うことができ、戦後生まれの私には知らない世界が広がっていった。

本書は、こうして集まった資料に基づくウィリアムズさんの捕虜生活と、彼が巻き込まれかけた謀略放送の記録である（以下敬称略）。

目　次

はじめに i
目　次 ii
凡　例 v
第一章　ケンブリッジから太平洋へ 1
†植民地省 1
†開戦と志願 2
†ギルバート・エリス諸島植民地 3
†行政官の仕事 4
†タラワ赴任と日本商社 5
†島を包む不安 6
†マキン島派遣 7
†沿岸監視員 9
†ビカチ島の無線施設 11
第二章　太平洋で迎えた開戦 13
†ラジオ 13
†日本軍上陸 13
†周辺の島々 15
†日本への航海 16
†横須賀・横浜 17
第三章　最初の捕虜収容所 19
†捕虜収容所の開設 19
†最初の捕虜たち 20
†多度津港の上陸遅延 20
†捕虜収容後の混乱 21
†俸給の支給 22
†米海軍の看護婦 23
†海軍と捕虜 24
†将校待遇を受ける 25
†講習会 26
†署名拒否事件 27
†演芸会 29

第四章　世界を驚かせたラジオ番組.....31
†日本の短波放送.....31
†恒石重嗣.....32
†宣伝担当.....33
†カズンス少佐移送.....35
†西課長の帰国.....36
†『ゼロ・アワー』放送開始.....37
†米兵を魅了した新番組.....38
第五章　対米謀略放送とウィリアムズの拒否.....40
†『ラジオ・トウキョウ』の論調抑制.....40
†対米謀略放送に着手.....41
†池田徳真.....42
†山王ホテル.....44
†捕虜との面接開始.....45
†駿河台・文化学院.....45
†開所式.....46
†ウィリアムズの東京移送.....48
†遅れた捕虜収容.....50
†到着と混乱.....51
†命令とリハーサル.....52
†対米放送開始.....53
†捕虜棟の生活.....55
†ウィリアムズの拒否事件.....56
†東京憲兵隊.....57
第六章　山奥の収容所へ.....60
†戦時下のダム建設.....60
†おおらかな班長.....61
†満島駅の作業.....63
†食事の分配.....64
†クリスマス.....65
†終戦まで.....66
第七章　戦争を越えて.....68
†終戦と混乱.....68
†満島出発.....69
†遠州灘の米艦隊.....70
†新居町駅.....72

†帰国 73
†米軍の追及 75
†ニューヨークの再会 76
参考資料 79
表紙・本文掲載写真 87
補足写真 88
第一章 91
第二章 93
第三章 96
第四章 111
第五章 116
第六章 125
第七章 132
あとがき 141
調査の経緯 142
索引 157
Table of Contents 167

凡　例

- 引用に際し、一部を現代表記に改め、句読点を補い、ルビを付し、段落を改めた箇所がある。
- 引用中の［ ］は筆者の補足を示す。
- 現在では使われない言葉もあるが、書かれた時代を考慮しそのまま収録した。

第一章　ケンブリッジから太平洋へ

ウィリアムズは英植民地省勤務を選んだ。

†植民地省

チャールズ・ウィリアムズ（Henry Charles Ralph Fulford Williams、一九一六〜九四年）は、父親の任地インドで生まれた。

一〇歳になると本国の全寮制のパブリック・スクールへ送られ、卒業後二年間新聞記者をした後、一九三六年一〇月にケンブリッジ大学へ進学した。歴史と人類学で優等の成績を収める一方、カレッジ対抗戦ではハードル競技の選手として活躍した。

入学後間もなく植民地省へ願書を出し、面接を重ねた。志望の理由は、英国国教会に勤める父親が実業界と縁が薄かったことと、ノーベル賞作家キップリングが唱えた「白人の責務」――当時の大英帝国で広く共有されていた、白人が植民地社会の統治と改良を担うべきだとする考え方――の影響を、幼いころから受けたことにあった。

植民地省の社会的な評価は高かったが、赴任地での任務は重く、生活環境も厳しかった。短編作家として知られ、映画『007 は二度死ぬ』の脚本を手掛けたロアルド・ダール（一九一六〜九〇年）は、英シェル石油に勤務していたころ、アフリカ奥地で出会った植民地省行政官の姿を描いている。

> タンガニイカの地方長官[1]たちはわたしが尊敬するタイプの人々だった。当然のことながら彼らも日焼けして逞しかったが、いわゆるセールスマンではなかった。みなりっぱな学位をもった大学卒で、辺境の任地ではあらゆる人々のためにあらゆる役目をこなさなければならなかった。たとえば部族間と個人間の両方の紛争を調停する判事であり、部族の酋長たちへの助言者であり、しばしば医者、病人の救済者であった。彼らはきわめて困難な状況のもとで法と秩序を維持することによって、広大な担当地域を管理していた。そして地方長官のいるところでは、地方まわりのシェル社員はどこでも歓迎され、長官の家に泊るようすすめられた。
>
> タボラの地方長官はロバート・サンフォードという三十代前半の人物で、奥さんのメアリーと三人の小さな子供たち、六歳になる男の子と、四歳の女の子と、女の赤ちゃんと一緒に暮していた。［中略］「つい最近もうちの裏口の近くにドクハキコブラがいたんですよ。」と、メアリー・サンフォードがいった。「ロバートが銃で撃ち殺しましたわ」(『単独飛行』)。

---

[1] 『単独飛行』では *District Officer* を「地方長官」と訳しているが、本書では染木煦『ミクロネシアの風土と民具』で用いられている「(駐在）事務官」とした（本書 p.5,26 参照)。

『英国紳士の植民地統治』の著者・浜渦哲雄は「植民地支配の諸悪を認めた上での話であるが」と断ったうえで、かつての大英帝国の植民地統治は、人格と力量を重視した少数精鋭による支配であったと説明している。これに対し「大陸諸国では植民地は落伍者の行くところと見られがち」であったという。英国では選抜された優秀な人材を派遣する体制が築かれていたことが、戦後フランス、オランダ、ポルトガルに比べ、比較的平和な撤退と政権移譲、さらには旧植民地との間に英連邦のような持続的な関係を築くことを可能にした、としている。

その鍵となる採用は公開試験ではなく、書類選考と専門家による面接によって決められた。この採用制度に三五年間携わったのが「植民地高等文官の父」と称されるR・ファース（Sir Ralph Dolignon Furse、一八八七～一九七三年）で、ウィリアムズも彼の面接を受けた。

なぜ公開試験が採用されなかったのか――この点について浜渦は、ファースの回顧録に記された次の言葉を引用している。

> 筆記試験は単に頭脳の程度と事務処理能力を見るだけである。事務処理は本国公務員にとっては主たる仕事である。ペーパー・テストに合格した人間がそれにこだわり、重要視するのは当然だ。さまざまなことを幅広くあつかう植民地行政――ここでは生身の人間と接触し、忍耐、マナーの良さ、勇気、決断力、洞察力、ユーモア精神、思いやりなどが絶えず要求される――においては、人格とパーソナリティが依然として最も重要であるが、これまでに考案されたどんなペーパー・テストによってもわれわれはそれを評価できない。

一九三九年六月、ウィリアムズはケンブリッジ大学の学位を取得した。ほどなく植民地省から合格通知が届き、赴任地は太平洋の「ギルバート・エリス諸島植民地」とされた。

図１　ウィリアムズ
撮影時期：一九四二年
写真提供：Caroline Tyner

†開戦と志願

ウィリアムズが卒業した直後の一九三九年九月一日、ドイツ軍がポーランドへ侵攻し、第二次世界大戦が始まった。

彼はケンブリッジ大学で軍事教練を受け、将校候補生予備役（Officer Cadet Reserve）として登録されていたので、直ちに陸軍省に志願した。しかし、すでに植民地省への採用が決まっていたため、志願は認められなかった。

植民地省は、一〇月からケンブリッジ大学に戻って植民地学を履修するよう指示した[2]。研修科目は――法律、熱帯衛生学、植民地会計学、さらには産科学の基礎まで多岐にわたり、ギルバート語の聖書と辞書を暗記するように言われた。

英仏両国はドイツに宣戦布告したが、西部戦線では陸上の戦闘がほとんど行われない「奇妙な戦争」が続いていた。しかし、翌一九四〇年四月、ドイツ軍が突然ノルウェーとデンマークを攻撃し、戦局は大きく転換した。研修中のウィリアムズは、ソロモン諸島植民地への赴任が予定されていたヘンリーと連名で、植民地省宛に手紙を送った。

「私たちが植民地で必要とされるなら、直ちに赴任させてください。認められない場合は、偽名を使ってでも入隊する覚悟です。」

植民地省は二人の赴任を手配した。彼らの船が南フランスのマルセイユ港を離れた直後、西部戦線でドイツ軍の奇襲攻撃が始まった。スエズ運河では、前方を参戦目前のイタリアの病院船が航行していた。「自爆して運河を塞ぐのではないか」という噂が流れ、船内で賭けまで行われたが、もちろんそんな事態は起こらず、予定どおりオーストラリアに到着した。ソロモン諸島へ向かうヘンリーを見送った後、ウィリアムズはメルボルンで赴任地行きの船を待った。

†ギルバート・エリス諸島植民地

ウィリアムズが向かう太平洋は、ヨーロッパ列強による分割が最も遅く行われた地域だった。小島が散在し、人口もまばらで、宣教師や捕鯨業者、商人たちが活動していた。

一九世紀半ばになると、ヨーロッパではコプラ（ココヤシの実を干したもの）から採れる植物油や、砂糖きび・綿花といった熱帯産品の需要が高まった。オーストラリアなどのプランテーションでは労働力が不足し、島民の誘拐が横行した。そこで英国政府は、一八七四年に植民地化したフィジーの総督（Governor）に西太平洋地域担当の高等弁務官（High Commissioner）を兼務させ、英海軍とともに誘拐行為の一掃に乗り出した。こうした経緯を経て、ギルバート・エリス諸島は一八九二年に英国の保護領となり、第一次大戦中に直轄植民地となった。そしてソロモン諸島などとともに、フィジー駐在の西太平洋高等弁務官の監督下に置かれた。

ギルバート・エリス諸島植民地は、赤道を挟む二四〇万平方キロメートル――日本の陸地面積の六倍にあたる広大な海域に広がっている。しかし陸地は佐渡島の半分ほど、人口は三万人に過ぎなかった。

植民地行政の総本部は西部のオーシャン島にあり、ウィリアムズは同島へ向かった。

その東には北から「ギルバート諸島」（現・キリバス共和国）、南に「エリス諸島」（現・ツバル）が連なり、前者は一六、後者は九つの島と環礁で構成されている。ギルバート諸島には『宝島』の作者として知られるロバート・ルイス・スティーヴンソンが滞在

---

[2] この研修コースは、ファースの提案により、一九二六年にオックスフォード・ケンブリッジ両大学に開設され、植民地高等文官の養成を目的としていた。

したことがあり、またエリス諸島の後身であるツバルは、近年、地球温暖化による海面上昇の影響が国際的に懸念されている。ここでいう「環礁」とは、礁湖（ラグーン）と呼ばれる内海を部分的に囲むように形成された、珊瑚礁の島々を指す。

ウィリアムズの赴任当時、地区行政本部は、北部ギルバート地区（諸島）がタラワ、南部ギルバート地区がベルー、エリス地区がフナフチに置かれていた。やがて北部ギルバート地区が彼の赴任地となる。

†行政官の仕事

ギルバート・エリス諸島植民地の行政の中心であるオーシャン島には、植民地政府の最高責任者である弁務官（Resident Commissioner）が常駐していた。政庁（島の役所）では、四人の英国人行政官が現地人職員を指揮し、会計・税関・警察・刑務など各部門の本部機能を担っていた。

一九四〇年六月、この島で幹部候補生（Cadet）・ウィリアムズの実地研修が始まった。島は肥料の原料となる燐鉱石の一大産地だった。採掘と販売は英国燐鉱石委員会（British Phosphate Commission、以下 BPC）が管理しており、中国・広東省や植民地内の島々から多くの人々が出稼ぎに来ていた。BPC の船は毎年一度各島を巡回し、三年間の契約期間が満了した島民を帰島させる一方、新たに働きたい者を募集した。その際、政庁の事務官（Administrative Officer）が同行して、契約事に不慣れな島民が不利益を被らないよう確認した。ウィリアムズもこれに加わり、オーシャン島以外の人々の生活に触れることができた。島民の出稼ぎの目的は、現金収入を得てミシンや自転車、防虫作用のあるクスノキ製タンスを買うことだった。それらが手に入れば、彼らはもう出稼ぎには来なかった。

二隻の政庁船が植民地内の島々を結び、定期的に運航していた。いわば海の路線バスのような存在である。この船便を利用し、タラワなど各地区の駐在事務官（District Officer）は管轄の島々を巡回した。ある島に上陸すると、次の船が来るまで数カ月間滞在することもあった。

その間に事務官は、裁判記録を含むすべての行政関連文書を調べた。会計帳簿で島の役人への給与支払い、収入印紙の在庫と販売額、裁判の判決によって科された罰金の納付などを入念に精査した。さらに各学校を訪れて生徒の学習状況を確認し、刑務所や診療所にも足を運んだ。その後開かれる公開討論会では、住民の不満や要望に耳を傾けた。

税の徴収も駐在事務官の重要な職務であった。島では通貨が流通していなかったため、土地を所有する島民は毎年六月、税額相当のコプラを政庁の倉庫まで運んだ。それを政庁船がタラワの中央倉庫へ輸送し、さらに貨物船に積み替えて海外へ輸出した。駐在事務官は納税帳簿と政庁船の受領記録を照合し、数字の一致を確認した。滞納者がいれば呼び出して、理由を聴取した。

島民は税を納める見返りとして、英国の保護と行政サービスを受けていた。英国はギルバート・エリス諸島を植民地とした後、慣習法を尊重しつつ、英国法の考え方を取り入れて成文化を進めた。たとえば姦通が殺人に発展しないよう、不倫の当事者に最長六カ月の禁固刑を科すという法的措置が設けられた。

教育制度の整備が進められ、カソリック・プロテスタント両宣教団の協力のもと初等教育が普及し、タラワには寄宿制の男子中学校が設立された。医療制度も拡充され、ヨーロ

ッパ人と現地人の医師・看護師が勤務するフィジーの中央病院で五年間の研修を受けた医療従事者が、各島の診療所に派遣された。彼らは、サメによるひどい噛み傷から妊婦の難産まで、あらゆる症例に対応していた。

†タラワ赴任と日本商社

ウィリアムズのオーシャン島での研修は一九四〇年一一月に終わり、北部ギルバート諸島の地区行政本部タラワへの赴任が決まった。オーシャン島の東方約三八〇キロに位置するタラワの礁湖は、良港として知られていた。

タラワでは、海事管理者が政庁船の燃料備蓄や標識など航路の管理、医官が管轄する島々の診療所の監督、会計担当者が公的支出に用いる現金や収入印紙の前渡しを担当していた。ウィリアムズの上司はインド陸軍出身の元将校で、職務にあまり熱心でなかったと彼は述懐していた。二人の折り合いはあまりよくなかったようだ。

北部ギルバート諸島の北西には、東西に連なるマーシャル諸島が位置している。かつてはドイツ領であったが第一次世界大戦中に日本が占領し、戦後処理の結果、日本の委任統治領となった。ヤルート環礁がその中心で、日本の商社である「南洋貿易」が活動していた。

南洋貿易は一九一五年、英国の植民地である北部ギルバート諸島の最北端に位置するマキン環礁のマキン（ブタリタリ）島に、ギルバート支店を開設した。主な業務はコプラの買い付けで、支店には売店も併設されていた。

英国植民地政府の規則により、南洋貿易の連絡船がマキンへ行く場合、往復ともタラワに寄港して手続することが義務付けられていた。

染木煦（あつし）（一九〇〇～八八年）は、東京美術学校（現・東京芸術大学）を卒業した洋画家で、民具研究家でもある。彼はヤルートから南洋貿易の五〇〇トン級の船に便乗し、タラワとマキンを訪れた。ウィリアムズが赴任する少し前の一九三四年のことである。著書の一節からは、当時のタラワの風物や英国官吏の姿、ヤルート・タラワ・マキン間の航海日数などがうかがえる。

> ［四月二五日の午後、ヤルートを出港し、タラワへ］二十八日天明とともに入港、早朝にかかわらず英国官憲の出張を得た。タラワはギルバート群島中唯一の官憲駐在地で、ギルバート一四個[3]の群島中［中略］わずかに当島にただ三人の英国官吏あり、土人巡警［警察官］を指揮してこれを統治している。それは駐在事務官、医官、電信技師であるが、事務官は［植民地］政府にあっては同時に警察官、司法官、医官は病人の無いときは教育家となり、電信技師は郵便局長を兼帯する。彼等の家庭にあるや等しく土俗督究家で、動植物採集家、骨董蒐集家でその上に例外なく釣魚狂だ。事務官の如きは若いオックスフォード出の学士で、愛嬌たっぷりに話術たくみに、後で上陸後政府を訪問して見ると彼の机のまわりは、土俗品の逸品、古貝石器、海獣の牙等で飾りまわされている。その細君が画が上手で土俗品の写生を沢山持っている。皆こうした孤島の生活を心から楽しみ、最もよくその任地にある期間を利用している様に

[3] 本文で先に示した島・環礁の数（一六）と、染木の記す「一四個」は、数え方の基準が異なる。

見える。そのくせ寸時も故国流の身だしなみを忘れず[4]、ボートから本船のタラップに乗り移る際と雖も杖を手離さぬ。英国民が何故に今日の強大をなしたかということは、こんな妄(ママ)昧な蛮島に在任している一官吏の人となりを見ても容易に判ることだと思う。

土人巡警はカーキー色に赤い肩章の入ったユニフォームを着ているが下半身は裸で素足だ。ズボンをはくことを極端に嫌う人種だと後で聞いた。九時には早くも上陸した。島の娘達が着飾って香高き熱帯の花を冠り総出で出迎えてくれた。極稀にしか船が来ない所だからもあるけれど彼女等の人なつこいことも一倍だ。

島内は非常に清潔で椰子林はよく除草され、枯葉や椰子玉の落ちたのが放擲されていることがない。島民は各一つの受持区域があり、自分の受持区域内に落ちた枯葉や椰子玉を放置しておくと処罰されるのだ。民家は島内通貫道路から必ず一定の距離奥に引込んだ所に建てられ、相互の間隔も数十メートルの距離が保たれている。樹木、ことにパン樹、タマナ樹等はよく保護され、みだりに伐ることを禁じてあるから全島はよく繁茂し、それ等の大木が実に多い。

島の中央辺に大きな木鼓がすえてある。三種の撥が附属していて音響の相違および数によって島民に時刻を報ずる様になっている。Rari と呼び、ギルバート固有の物ではなく、フィジー地方の物であるが、フィジー総督管轄下は皆この木鼓を以て時を報ずる習慣になっているという話である。また部落の一部に土人マーケットがあり、その家屋は巨大な珊瑚礁を柱とした実に堂々たる構造である。そこで土語シカゥーンと云う丸いパン及び林投樹［タコノキ］製のゴザ（土語ラギエ）を売っていたが法外に高値であった。

入港手続がすんだので午後二時出帆してブタリタリ［マキン］島に向かう。［中略］二十九日早暁目的のブタリタリ島礁外に達したけれども、天なお暗く海流は早く無数の珊瑚礁が潜んでいるので迂闊に入礁は出来ない（『ミクロネシアの風土と民具』、下線は筆者）。

†島を包む不安

ウィリアムズ赴任の直後、南洋貿易の社有船『静海丸』がタラワへ入港した。ギルバート支店の倉庫にあるコプラを集荷するため、マキンへの航海を申請したのである。上司は慎重な検討もなく許可を与え、船は北上していった。しかしウィリアムズは、ヨーロッパでの大戦勃発後に公布された国防規則を熟読しており、コプラは爆発物の原料となるため輸出禁制品に指定されていると指摘した。議論の末、上司は南洋貿易の支店長に至急電を打ち、積込みを中止し、積み終えた分を倉庫に戻すよう命じた。

一二月初め、衝撃的な事件が起きた。中立国の商船に偽装したドイツの巡洋艦が、オーシャン島西方のナウル島沖に出現し、BPC の大型貨物船三隻を撃沈したのである。タラワでも不安が広がったが、ドイツ艦隊はやがて付近の海域を離れた。

---

[4] 染木が南洋貿易ギルバート支店で出会った増淵真吾の妻・ミツは、かつてタラワの礁湖に停泊した際、船上で見た英国の役人について、「その頃の内地日本人には珍しい膝上のズボンをはいて派手な長いソックスを付けとてもスマートないでたち」だったと回想している（『南洋群島協会々報』）。

翌一九四一年一月初め、静海丸が再びタラワに入港し、コプラの積出し許可を求めた。日本側は「倉庫が満杯で、船積みが認められなければこれ以上買い取れない。」と強調した。島民はコプラの換金を楽しみにしていた。その日は家族総出で南洋貿易に集まり、マッチや布、食料品などを買い求めるのである。上司はロンドンの植民地省に許可を求める電報を送り、静海丸にマキンで回答を待つよう指示した。そしてウィリアムズに同行して監視するよう命じた。日本はまだ参戦していなかったがドイツと同盟関係にあり、静海丸の不自然な動きに疑念を抱いたのである。

船はマキンの礁湖に入り、一行は上陸した。ウィリアムズは――政庁施設は整っていたが――ほとんどの時間、南洋貿易の埠頭で神崎長次郎支店長や船長とともに、ビールを前に語らい、穏やかな時間を過ごした。日本語を解しない彼のすぐそばで、神崎と船長は気兼ねなく話し込んでいた。支店長の妻リーナが料理を用意してくれた。ギルバート人とドイツ人の血を引く、すらりとした美しい女性だった。一週間ほど待ったが、結局、ロンドンは輸出許可を保留とし、静海丸は再びタラワを経由してヤルートへ帰ることになった。

このささやかな通商問題の背後に、やがて太平洋全域を覆うことになる大戦の波が静かに迫りつつあった。

†マキン島派遣

一九四一年三月、ニュージーランドの首都ウェリントンで英国、オーストラリア、ニュージーランド三国の協議が行われ、ギルバート・エリス諸島植民地の島々に小規模な沿岸監視所を設置することが決まった。ドイツの偽装巡洋艦の警戒に加え、予想される日本の参戦に備えるためであった。監視網の本部はフィジー島に置かれ、ニュージーランドの陸海軍・郵便電信局が実務を担当することになった。ニュージーランド政府は、未成年の監視員を孤島に駐在させる場合、相談相手として年長の兵士二人を非武装で同行させることにした。植民地政府側は手持ち無沙汰な兵士が島民と問題を起こしかねないと難色を示したが、ニュージーランド軍参謀長が押し切った。

ギルバート諸島最北端のビカチ、リトル・マキンの両島に、監視員一名、兵士二名からなる沿岸監視所の設置が予定された。植民地政府は、両島を管轄するマキン島に行政官の派遣を決め、ウィリアムズに白羽の矢が立った。若く意欲に富んだ彼は、この任命を前向きに受け止めたと思われる。

マキン島は日本の軍事拠点に近かったが、守備隊は駐屯しておらず、万一の場合に退避する手段もなかった。ただし当時、日英間で戦争はまだ始まっていなかった。『戦史叢書』によれば、一九四一年九月の段階で、日本海軍にギルバート方面の占領構想はなかったという。

現地でも、危険は切迫したものとは受け止められていなかった。『Conflict in Kiribati』によれば一九四一年、ニュージーランドの沿岸監視員が配置される少し前、教育や仕事、家庭の事情で香港や中国本土に滞在していた中国系キリバス住民一七人が島々に戻ってきた。日中戦争の拡大により、中国での生活が不安定になったため、ギルバート諸島にいる方が安全だと考えたのである。皮肉なことに、彼らの一部が向かったマキン島は、太平洋戦争で日本軍が最初に占領する島となった。

派遣されたウィリアムズは、制度上はマキン行政区の最高責任者であったが、実態としては大酋長を行政長とする島民の自治に委ねられていた。その大酋長ブレンタラワ（Buren Tarawa, the Island Magistrate）は大柄で精悍な老人で、ウィリアムズの赴任まで英国の国旗と国王の御真影を預かっていた。第一次世界大戦ではニュージーランドのマオリ大隊の一員としてエジプトへ遠征し、生まれて初めて馬という動物を見たと、ウィリアムズに昔話をした。大酋長と各村の酋長は毎月公開の集会を開き、島民はこれを熱心に傍聴し、発言も認められていた。警察署長は三人の警察官を指揮し、大酋長を補佐していた。

事件があれば大酋長が裁判長となり、酋長たちとともに島の法典に基づいて審理した。ウィリアムズは補佐役として立ち会い、公正な証拠と手続に従って審理が進むよう見届けた。重大な事件はオーシャン島の弁務官に報告され、死刑判決はフィジーの高等弁務官の承認が必要とされた。禁固刑の囚人を収容するマキン島の刑務所は、珊瑚石灰を押し固めた四角い建物で、食事は囚人の家族が差し入れた。

政庁の無線室では、島民の通信士がオーシャン島本部と一日二回交信していたが、通信すべきことはほとんどなかった。島に新聞は来なかったから、ウィリアムズは無線機をラジオ代わりにして、毎日 BBC ニュースで欧州の戦況を聴いた。

沿岸監視所の件はまだ極秘だったためか、ウィリアムズの派遣時、マキン島で行うべき具体的な指示や命令は与えられていなかったという。彼は日々の業務を進めるうえで、自らの判断と、オーシャン島の研修で渡された小冊子を参考にした。著者のサー・アーサー・グリンブル（Arthur Grimble、一八八八〜一九五六年）はギルバート・エリス諸島植民地の初代の幹部候補生で、弁務官も務めた人物。冊子にはこう書かれていた。「島の人びとに何かを強制することはできない。もし彼らを助けようとするなら、彼らを導かなければならない。そのための唯一の方法は彼らを知り、彼らに知ってもらうことだ。それには、一軒一軒の家を常に訪問するしかない。」

ウィリアムズはまず現地語を習得して住民の話を聞き、理解することに努めた。リトル・マキンを合わせた管轄地区の戸数は五〇〇、人口二千人ほどであった。月に一度、ブレンタラワと自転車で各島の村々を巡回し、大人の男女だけでなく子供たちとも話をした。彼ら自身のこと、家族のこと、健康や隣人との問題など、話題はたくさんあった。そして彼らもウィリアムズや家族、英国をはじめ彼が住んだことのある土地のことに関心を示した。ウィリアムズは島民の二大娯楽であるダンスとサッカーにも積極的に参加した。間もなくこうした人たちの中に、真の友人ができ「英国の牧師と教区民の関係に似ている」と感じた。視察から戻ると、詳細な報告をオーシャン島へ送った。

マキン島には南洋貿易、中国系の『安昌（オンチョン）公司』[5]とオーストラリア系の三商社があり、それぞれ売店を構えて食料品、衣類、雑貨など似たような商品を扱っていた。

ウィリアムズの毎日の食事は専属の調理人が用意した。島民は鶏や豚を飼育し、周囲の海の魚介類も豊かだった。島内にはオレンジやライム、レモンの木が繁茂していた。ただ野菜は珊瑚礁の島では育たず、野菜の缶詰は不味かったので、ココナッツの実で代用する

---

[5] 戦前、南洋貿易ギルバート支店に勤務した増淵真吾は、「中国系商社とも友好的な関係だった。中国大陸では戦争をしていたが、小さな島だから皆が助け合わないことには生きていけないんです。」と筆者に語った。

ことが多かった。こうした母国とは異なる食生活に慣れていたことが、後に日本で捕虜生活を送る上で助けになる。

一九四一年春、ウィリアムズは私用と公務の両方に用いるため、寝泊まりが可能な小型のヨットを作った。マーシャル諸島出身で日本製の道具を使う腕のいい船大工がいて、資材は売店で購入したり島民から譲り受けたりした。ウィリアムズは少年時代から夏の休暇を水の上で過ごしていたので、操船はお手の物だった。

「沿岸監視員一行が到着するので、住居と無線室、倉庫を準備せよ。」という命令が来た。ビカチには巡回中の事務官の宿泊施設があり、これを解体して建築資材を流用することにした。作業員を雇う予算はなかったが、幸いマキン島で密造酒を飲んだ酔っ払いが大勢逮捕され、刑務所は満杯になっていた。英国の統治以前から飲酒は違法だったが、ココナッツが原料のトデー酒は日本の味醂のように調味料として使われるため、飲酒の禁止は困難だった。ウィリアムズのヨットと大酋長のカヌーに囚人たちを乗せて礁湖を渡り、二〇キロほど離れたビカチへ運んだ[6]。

†沿岸監視員

一九四一年初め、ニュージーランドの郵便局員ジョン・ジョーンズ（John Jones、一九二〇～二〇一七年）は、ウェリントン市内で無線の講習を受けていた。終了後、教官から沿岸監視員にならないかと勧められた。任務は太平洋の小島に設けられる無線施設でドイツの偽装巡洋艦はじめ動くものをすべて監視し、報告することだと説明された。所属は現在の郵便電信局から西太平洋高等弁務官事務所に変更され、年俸は三倍になり、しかも免税だという。血気盛んな彼は、同僚といっしょに志願した。

市内の測候所で気象学、放送局で無線機の保守点検法を習った後、一旦帰省して家族に挨拶するよう指示された。二一歳未満の志願者は、親の同意書をもらう必要もあった。ジョーンズの父親は、太平洋でも早晩戦争が始まると確信していたので反対したが、息子の決心は固く、結局署名した。

図２　ジョーンズ
撮影時期：一九四二年
写真提供：John Jones

[6] ウィリアムズが、マキン島とは外洋で隔てられたリトル・マキン島の施設建設にも関わったかは不明である。

再び集合した志願者たちは、オークランド郊外の海軍基地で熱帯勤務に備えた予防接種を受けた。ひとりは重い副作用が出て離脱し、代わりに加わった男は、後に任地で命を落とすことになる。

オークランドを出港し、夜は光が漏れないよう窓を覆って警戒しながら航海して、三日後、フィジーの首都スバに到着した。

ジョーンズたち気の合った四人組は、陸軍基地内の宿舎に入った。しかし粗末な食事と寝具に加え、自分たち民間人に軍人が命令することへの不快感も重なり、若い中尉の怒声を無視して、市内のホテルに移った。そこからフィジー総督官邸内にある空軍司令部へ通い、暗号などの講習を受けた。

任務を口外することは固く禁じられ、任地の説明もなかったが、市街に出て私物――熱帯用の衣類、帽子、タバコ、蚊よけの薬、ゴム底のズック靴を一年分購入するよう指示された。

七月一九日朝、スバ港に集合したジョーンズたちに、年俸が支払われた。彼らは出港までのわずかな時間に郵便局へ駆け込み、ニュージーランドへ送金したにちがいない。太平洋の島ではお金の使い道がほとんどなかったからである。

港で彼らが見たのは、高等弁務官が太平洋の植民地を視察するための威風堂々とした船だった。香港で建造されたばかりの『ビティ』（フィジーの意）号で、全長四八・五メートル、排水量六七六トンを誇る。船長以下九人の高級船員に加え、フィジー人とインド人の下級船員六～八人が乗り組んでいた。

正午過ぎ、軍人や高等弁務官事務所の職員、郵便電信局員たちに見送られ、ビティは静かに出港した。

その日の夕方、船内の沿岸監視員一五人と、非武装の兵士二二人は集合を命じられた。ペアの組み合わせが告げられ、配置はギルバート諸島とエリス諸島だと初めて明かされ、地図でそれぞれの行先が示された。出発前に提出した書類の宗教欄が、ギルバート諸島に派遣された人々の生死を分けることになる[7]。ジョーンズたちカトリック信者は、同じ宗派の教会や信者が多い最北部に配置された。船内は人であふれ、多くはあちこちに吊られたハンモックで寝ていた。幸いジョーンズたち四人組は――いちばん遠方まで行くためか――客室を与えられた。船内で販売される酒類は免税で、ビールが生ぬるいことを除けば文句はなかった。

ある日、無線当番のジョーンズは、数キロ先の米国船籍とみられる船からの強い電波をとらえた。船長はドイツの偽装巡洋艦ではないかと疑い、大急ぎでその海域を離れた。

たどり着いたエリス諸島の中心地フナフチは、まさにジョーンズが思い描いていた南の島――ココヤシが茂る珊瑚礁の島々が、礁湖と呼ばれる広々とした内海を囲む――だった。許可が出て上陸すると、英植民地省駐在官の邸宅の先に島民の村があった。陽光に温められた礁湖で泳いでから船に戻って夕食を済ませ、招待されて島民の踊りを見物した。

こうした一カ月余の航海を経て、八月三一日、ビティはビカチ島の珊瑚礁近くに停泊し

---

[7] 開戦直後、ジョーンズを含むニュージーランドの沿岸監視員三名と兵士は日本軍の捕虜となり、日本へ送られたが、終戦とともに全員が帰国した。ところが翌一九四二年八～九月、日本軍がギルバート諸島のさらに南の島々を占領した際に捕らえられた九名の監視員たちは、同年一〇月一五日、タラワで処刑された。日本軍はエリス諸島までは南下せず、同諸島にいた監視員たちは全員無事であった。

た。大型ボートが狭い水路を抜け、砂浜に乗り上げた。無線設備と一年分の食料・燃料、私物が山のように積み上がった。砂浜ではウィリアムズが待っていて、流暢なギルバート語で島民に陸揚げした物資の運搬を指示した。日焼けして髪にはゆるいウェーブがかかり、背は高くないが、がっしりとした体格だった。ジョーンズはすぐに打ち解けた。

翌日、ビティはビカチ東方の最終目的地リトル・マキン島で、三人を上陸させた[8]。

†ビカチ島の無線施設

ブーメランの形をしたビカチは、全長が二キロに満たず、幅は狭いところでは二〇〇メートル弱しかなかった。島の西側は外洋に面した珊瑚礁で、東側は礁湖に面したココヤシの密生する砂浜が続く。

島の折れ曲がった付近が無線施設の予定地で、コンクリートの床はすでに完成していた。ウィリアムズの指揮のもと、建物の工事が始まった。彼は二〇〇メートルほど離れた村へ出向き、酋長とココヤシの伐採について交渉した。ビカチの政庁宿舎から取り外した屋根が、砂浜を通って運ばれて来た。ジョーンズには、激しく上下に動く四〇本の足しか見えず、まるで巨大な甲虫がこちらに向かって来るようだった。島民が敷地に頑丈なココヤシの幹を立て、柱とした。倉庫はその日の午後には完成し、持ち込まれた物資が収納された。

四日後、作業が一段落するとウィリアムズはマキンへ戻った。その後たびたびビカチ島を訪れ、ジョーンズたちの相談に乗り、慰労した。彼の役割は沿岸監視員を支援し、島民との連絡役になることだった。ウィリアムズは物事への対応が早く、物資の調達にも長けていた。ジョーンズたちは「海が荒れると波しぶきが井戸に入るので、飲み水に困る。」と相談した。ウィリアムズは倉庫の屋根を草ぶきからトタン板に替え、雨水を水槽に貯める仕組みを作って解決した。

ビティから陸揚げした官給のコーンビーフ缶は、一度の食事には多すぎたが、冷蔵設備がないため、残りは島民に配り喜ばれた。ウィリアムズは料理や掃除をする島民に加え、漁師まで手配してくれた。おかげで単調な缶詰の繰り返しだった食卓に、焼いたココナッツや掘りたてのタロイモ、さらには新鮮な魚や伊勢エビが並ぶようになった。

ウィリアムズは島民の夜のダンスに、古い手回し式の蓄音機をマキン島から持ち込み、レコード音楽を流したこともあった。しかし、太鼓の音で踊る彼らは、あまり関心を示さなかった。

ジョーンズはウィリアムズについてこう記している――「性格は魅力的で、よい教育を受けていた。話しやすく、決して興奮せず、どんな話題にも感じよく応じた。」

赤道に近いマキン環礁では、毎日ほぼ同じ時刻に太陽が昇った。ジョーンズは毎朝六時に起床し、オーシャン島本部へ暗号化した気象通報を送った。休日はなく、毎日計六回の送信と機器の保守点検作業が夜九時まで続いた。

酋長はじめ三〇人ほどの村人とは、すぐに親しくなった。施設に救急箱があったので、

---

[8] 同じころ、京都帝国大学の学術調査隊が、ヤルートなど日本の委任統治下の南洋諸島を訪れており、当時理学部の学生だった梅棹忠夫（一九二〇～二〇一〇年）の姿もあった。また、南洋庁勤務の作家・中島敦（一九〇九～一九四二年）が、妻に宛てた手紙でヤルート到着を知らせている。

朝九時ごろになると切り傷や打撲傷を負った島民が列をつくって手当を受けに来た。母親に頼まれて粉ミルクを分けることもあった。

遠出はできなかったが、ジョーンズは空いた時間に村を訪れ、島民と話しながら言葉を覚えた。その合間に礁湖で泳いだり、魚を釣ったり、干潮のときには隣の島まで歩いて渡ったりした。特に任務のない二人の兵士は退屈し、帆の付いたカヌーを作り、二時間以上かけてウィリアムズのいるマキン島へ出かけるようになった。

マキン島の管轄地区に守備隊はおらず、無線施設のニュージーランド兵は丸腰だった。ウィリアムズは島民による民間防衛隊の編成に精力的に取り組んだ。ジョーンズの施設の近くに小屋が建てられ、隊員が六人ずつ詰め、一週間ごとに交替した。さらに島内各所に見張り台が設けられ、夜間の警戒の大きな助けになった。ウィリアムズは、彼の〈小さな軍隊〉が島民から尊敬されるよう、労力も費用も惜しまなかった。青い腰巻「ラバラバ」を自らデザインして隊員に着用させた。ジョーンズも試してみたが、涼しく快適であった。

一一月初めの夜、興奮した隊員たちが施設に駆け込み「西の岸の沖を、ライトアップした船が通過している。」と伝えた。ジョーンズはその船が南方へ去るまで監視を続け、暗号電文でオーシャン島経由、フィジー島の海軍本部に報告した。一週間後、防衛隊の若者たちは再び騒然となった。北方から飛行機が来ると言う。ジョーンズたちの耳は島民ほど鋭敏でなく、爆音を聞き取るまでに少し時間がかかった。

やがて日本の飛行艇が頭上を通過し、彼は直ちに無線機に向かった。日本機は南へ飛びながら島々の通信を傍受し、沿岸監視施設を特定していることが分かった。

こうした領空侵犯は三週間にわたり続いたが、そのすべてを目視できたわけではない。ジョーンズたち沿岸監視員には双眼鏡が支給されなかった。エジプトに派遣されたニュージーランド軍や沿岸を航行する船舶が大量に使用し、予備がなかったのだろう。それでも彼は冷静に任務をこなし、島での生活を楽しんだ。

図３　ビカチ島の無線施設
（ウィリアムズ画）
写真提供：John Jones

第二章　太平洋で迎えた開戦

開戦直後、日本海軍がマキン島と周辺の二島に上陸した。捕らえられたウィリアムズたちは船を乗り継ぎ、日本へ送られた。ある朝、船の甲板に出ると、雪化粧した富士山が眼前にそびえていた。

†ラジオ

一九四一年一二月八日。ビカチ島のジョーンズにとって、いつもと変わらぬ朝だった。気象通報を終え、ロサンゼルスのラジオ局に周波数を合わせると「真珠湾が攻撃されている！」というアナウンサーの取り乱した声が飛び込んできた。ホノルルのラジオ局は沈黙している。兵士たちは、酋長と防衛隊員たちに警戒態勢をとらせ、厳重に見張らせた。さらに念のためウィリアムズに知らせようと、二人の防衛隊員をカヌーでマキンへ向かわせた。無線で送信するには、あまりにも重大な情報だった。

ウィリアムズは、カヌーが到着する前に BBC のニュースで開戦を知った。彼は警察官を伴って南洋貿易を訪れ、支店長と助手を拘束した。それまで親しくしていた二人を刑務所に入れるのはためらわれた。そこで官舎のベランダにベッドを置いて抑留し、警察官に交代で見張らせた。それから、南洋貿易の事務所から運び出す書類の荷造りに追われた。彼は日本語は読めないが、何か味方にとって有益な情報が含まれていると考えた。こうして開戦初日を過ごした彼は、その晩、日本人の「お客」のそばでぐっすり眠った。

†日本軍上陸

真珠湾奇襲成功の報を受け、一二月八日午後、ヤルートに集結していた日本艦隊はギルバート諸島へ向かった。開戦を知った島民が、日の丸の旗を振って艦隊を見送った。任務は敵施設を破壊し、マキン礁湖に水上機基地を設けることであった。

翌九日、艦隊はジョーンズのいるビカチ島沖で二隊に分かれ、一番隊はマキン島へ、二番隊はタラワへ向け南下を続けた。翌一〇日、日本時間で午前二時、現地マキン時間では午前五時、機雷敷設艦『沖島（おきのしま）』から進発した海軍陸戦隊の一七八人は、マキン島上陸を完了した。

東の空が白むには、まだしばらく間があるころ、ブレンタラワ大酋長が官舎を訪れて眠っているウィリアムズの腕を揺さぶった。島の沖に日本の船がいるという。ウィリアムズは「おそらく日本人抑留者と押収書類を受け取りに来た、連合国の軍艦だろう。」と答えた。そして確認のため、大酋長と警察署長を伴って自転車で礁湖に沿う一本道を西へ向かった。カトリック教会や中国商社の並ぶ地区を走り抜け、島の西端まであと一〇キロほどになったころ、東の空が明るみ始め、前方から一台の自転車が近づいて来た。

見慣れぬ軍服に変わった形の鉄帽、ハンドルには小銃。すれ違いざま男が大声を上げると、ウィリアムズたちは自転車を止め、兵士は銃を水平に構えた。ウィリアムズが歩み寄

り、銃口がほとんど触れそうになった瞬間、彼は警察署長に命じた。
「動き始めたら藪へ逃げ込め。政庁に戻って通信士の暗号表を処分しろ。」
　彼らは日本兵の前に並び、ウィリアムズが先頭になって、西へ走り出す。日本兵の自転車は錆びていて貧弱だったが、ウィリアムズのは新品でスピードが出た。彼は、前方の急な左カーブを曲がると、藪へ通じる小道の先に島民の共同墓地があることを知っていた。そこで突然スピードを上げて逃走を図ったが、カーブを曲がったところで、前から来た日本軍の斥候隊に突っ込んでしまった。ひとりが前輪のスポークに銃剣を突き刺し、ウィリアムズの自転車は急停車した。彼は勢い余って前方へ投げ出された。地面に倒れたまま、侵入者たちの顔を見上げた。
「ミスタア　カンサキハ　ドコダ？」
　将校のひとりがノートを見ながら、たどたどしい英語で問いかけた。ウィリアムズが自分の来た方向を指差すと、案内を命じられた。
　そのころ、通信士は警察署長からウィリアムズの伝言を受け取った。彼はまず、オーシャン島へ日本軍上陸を暗号文で知らせようとしたが、反応はなかった。(日本機の空襲で大損害を受けていた)。ビカチ島で傍受していたジョーンズが割って入り「自分が中継する。」と申し出たため、通信士は彼に託した。そして最後に平文で送信した――「ニホングンジョウリク　ツギハ　キミタチヲ　トラエルタメ　ソチラヘイクゾ」
　ジョーンズは中継分といっしょに、礁湖での日本艦船に関する自分の報告をオーシャン島と南部ギルバート地区本部のベルーへ送信した。しかし、双眼鏡がなかったので、あまり多くの情報は送れなかった。
　政庁に戻ったウィリアムズは、抑留していた南洋貿易の二人を日本の将校に引き合わせた。そのとき彼の時計はすでに午後を指していた。神崎支店長と将校が協議するあいだ、ウィリアムズはベランダの椅子に座っているよう命じられ、彼の調理人が昼食を用意することは許された。この上陸作戦には、戦前南洋貿易ギルバート支店に勤務していた増淵真吾（一九一三〜九四年）も、海軍嘱託として同行していた。彼は「有能で面倒見がいい、神様的存在だった」神崎の無事を確認して安堵し、一方捕らえられたウィリアムズを見て「まだ若いのにひとりで捕虜になって気の毒だ。神崎と立場が逆転したな。」と感じたという。
　午前一一時五〇分（マキン時間午後二時五〇分)、上陸した陸戦隊員の半数は沖島に帰艦した。ウィリアムズは連行され、艦内の一角に隔離された。島で昼食を済ませていたため、配られたコーンビーフは夕食用にしようと、水を張った洗面器を求めて冷やした。それを見た乗組員は、食べ物を粗末にしないことに感心した。
　こうしてウィリアムズは、初めて日本側の公式記録にその名を残すことになる。日本海軍が作成した捕虜名簿には、次のように記されていた。

氏名：ヘンリ・チャールス・レーフ・フールフォード・ウィリアム［Henry Charles Ralph Fulford Williams］
年齢：二五
身分：ケンブリッジ大学出身 文学士
階級：植民地行政事務見習官
本国所属の艦船・官庁：フィジー総督府麾下（アジア歴史資料センター)。

†周辺の島々

翌一一日朝、沖島からビカチとリトル・マキンへ、それぞれ二四人の陸戦隊員が派遣された。ジョーンズのいるビカチ上空に、沖島の複葉機が現れ、フロートの間に爆弾を抱えて低空飛行した。その直後、西の珊瑚礁の向こうからは、内火艇（モーターボート）に牽引されたカッター（大型ボート）が姿を現した。

ジョーンズは、南部ギルバート地区本部のベル―へ報告と別れの通信（“JAPS LANDING NOW GOODBYE ALL”）を終えると、島民の助けを借りてすべての設備を破壊し、暗号書を焼き、ガソリンを地面に流した。食料は前日、日本軍が上陸して自分たちを島に置き去りにする事態を想定し、半分埋めておいた。島民を村へ送り返した後、ジョーンズと兵士は水際に下り、九〇メートル先の珊瑚礁を見つめた。やがて、小銃や機関銃で武装した日本兵が静かに上陸し、無線施設へ近づいた。そしてジョーンズたちを見つけ、甲高い声を上げて突撃してきた。ニュージーランド兵のひとりは、タバコに火を点けた瞬間、いきなり顔を殴られた。

身体検査の後、将校が、日本海軍の太平洋における無敵ぶりを誇示する長広舌をふるい、無線施設まで行進させられた。通信機器も暗号書も処分されたと知ると、日本兵はうろたえ、「なぜ壊したのだ？」と詰問した[9]。

日本軍は島民に、施設の貯蔵物をカッターに積み込むよう指示した。私物の荷造りを終えたジョーンズたちは、砂浜に背中合わせに座らされた。一〇人ほどの陸戦隊員が監視し、機関銃を向け、首を斬るまねをしてからかった。

カッターに乗せられ礁湖を進むと、駆逐艦や輸送船、帆船に加え、四機の飛行艇が見えた。「双眼鏡さえあれば、すべて報告できたのに。」とジョーンズは悔しかった。

午後、沖島に到着すると殺虫剤を吹きかけられ、さまざまな角度から写真を撮られたのち船底に連行された。ジョーンズだけは艦長室に呼び出され、ギルバート・エリス諸島の巨大な地図を示された。艦長は各島の名前を尋ね、付近を航行する日本の船舶を報告したかと問い、ジョーンズは「した。」と答えた。さらに各島にいる兵士や通信士の数を聞かれたが「自分はオーストラリアから、フィジーではなくオーシャン島を経由して来たのでわからない。」とうそをついた。

ジョーンズたちは沖島に短時間留め置かれた後、マキン島へ送られた。日本軍は接収した中国商社に司令部を置き、彼らは商社桟橋近くの建物に抑留された。木の床の上で寝たが、一晩中、蚊と衛兵に悩まされたという。ウィリアムズも沖島からマキン島へ戻され、別の部屋に収容されていた。

一方、リトル・マキンの攻略には南洋貿易の社有船が使われた。向かい風と波に阻まれて上陸は夜となったが、この遅れが幸いし、上陸部隊は暗号表を完全な形で押収した。翌一二日朝、部隊は島を離れ、夕方沖島へ帰艦した。捕虜となった三人はマキン島のジョーンズたちの隣室に連行された。会話は禁止されたが、トイレで言葉を交わすことができ

9　記録では、ビカチ島に上陸した部隊は小銃六丁を鹵獲したとある（アジア歴史資料センター）。しかしジョーンズは、島に武器はなかったと証言している。両者を突き合わせると、この「六丁」は、マキン島の商社か住民から押収した武器を、戦果として計上し直した可能性が高い。

た。

彼らが抑留されたままクリスマスを迎えた時、神崎支店長がウィリアムズの部屋を訪れた。神崎は官舎から赤ワイン二本と食料品を携えており、ウィリアムズはそれを抑留者全員に分けた。沈んでいた空気は少し和らぎ、皆の気分も明るくなった。

†日本への航海

ウィリアムズは、通訳を務めていた神崎支店長から出発すると告げられ、荷物は一個だけ許されると知らされた。宿舎に戻ると、毛布、大学時代にロンドンで買ったオースチン・リードのスーツ、中国の刺繍入りテーブルマット、そして寝袋に衣類を詰められるだけ詰め込んだ。暖かい服はほとんどなかった。

直径一メートルほどに膨らんだ荷を背負い、ウィリアムズは桟橋から二キロほど離れたカトリック教会の間を往復するよう命じられた。日本軍は自らを欧米の植民地支配からの「解放者」と称していた。呪詛の声を予期した日本兵の思惑に反し、道路の両側に並んだ島民の口から洩れたのは、悲しみと送別の言葉だけだった。

マキンの礁湖には、『沖島』と交替した機雷敷設艦『津軽』が停泊していた。一二月二七日の朝、捕虜七人は中国商社の桟橋から内火艇で津軽に運ばれた。ウィリアムズは重い寝袋を背負い、舷側の縄ばしごを登って中甲板へ護送された。機雷投下用レールの上の、帆布で囲った狭い区画に収容されると、津軽はほどなく錨（いかり）を上げ、出航した。

それまでニュージーランドの若者たちは、植民地行政官であるウィリアムズに敬意を払い、どこかよそよそしかった。だがこうして同じ境遇になったので、お互いに苗字ではなく名前で呼ぶことにした。彼らには「チャールズ」という名が気取って感じられ「ジョージでいこう。」と提案した。ウィリアムズは了承した。

翌二八日朝、彼らはヤルートに到着した。礁湖を内火艇で渡ると、ススで黒く汚れた特設砲艦『大同丸』が停泊していた。甲板を急き立てられ、昇降口の金属のはしごを下ると、暗い船底の石炭の上に、沿岸監視員のワラスがいた。マキン南方のアバイアン島に配置されていた彼は、沖島の陸戦隊に捕らえられ、二日前からそこに留め置かれていたという。

大同丸の船長はウィリアムズを呼び出した。通信士を通訳にして、気を付けの姿勢をとらせると、こう言って脅した。

「日本は戦時の捕虜取扱いを定めたジュネーブ条約に署名していない[10]。だから質問に正直に答えなければ、殺すこともできるんだぞ。」

ウィリアムズは「最善を尽くします。」と応じた。船長はするどい目でにらみつけ、指を突きつけて問いただした。

「ルーズベルト大統領をお前はどう思う。」

ウィリアムズは静かに答えた。

「私は英国人です。彼について考えたことはありません。意見も、まったくもち合わせていません。」

すると船長は満足そうにうなずき、尋問はそれで終わった。

---

[10] 正しくは「ジュネーブ条約を批准していない。」

ニュージーランド人たちは寝具を持っていなかったので、ウィリアムズは自分の毛布を分け与えた。

次の寄港地で、彼らは戦前ニューヨーク―南米航路に就航していた『山霧丸』に移された。乗組員は流暢な英語を話し、本物の洋食が供された。開戦後、南洋諸島から日本へ引き揚げる労務者が三百人ほど乗っていて、彼らが自分たちの区画に入り込まないよう、ウィリアムズたちは押し返すのに苦労した。

連合国の勝利を信じるウィリアムズたちは終始快活で、島で覚えた民謡を歌い、ダンスを踊った。船は敵潜水艦の襲撃を警戒しながら日本へ向かい、空気は次第に冷たさを増していった。

†横須賀・横浜

一九四二年一月七日早朝、ウィリアムズたちが甲板に出ると、山霧丸は停泊していた。海の向こうに富士山が見えた。昇る朝日に照らされ、山容の半分以上が雪で覆われて、実に美しかった。ジョーンズは周囲に見える船の種類から、横須賀軍港だと判断した。

午後四時ごろ、逸見（へみ）桟橋（現・ヴェルニー公園）から上陸した。ウィリアムズはオースチン・リードのスーツに母校のネクタイを締め、正装していた。メインラウンジで渡されたのは税関申告書で、漢方薬の原料となる「熊胆（くまのい）」や「犀（さい）の角（つの）」を所持しているかという項目があった。彼は「No」と記入しながら、係官が自分たちを捕虜ではなく訪日客として扱っているのだと感じた。父親がスイス・ローザンヌに赴任していたころ、当時一三歳前後だったウィリアムズは、休暇になるとパスポートと切符を手にひとりで英仏海峡を渡り、家族と合流していた。こうした経験から、彼は入国手続に慣れていた。手元のポンド紙幣を日本円に両替した。

手続を終えた一行は内火艇で夜の横浜港に着き、夏服姿で震えた。パブリック・スクール時代、学校でも寮でも暖房なしの冬を過ごしたウィリアムズはともかく、ジョーンズたちには耐えがたい寒さだった。

囚人護送車の鉄格子越しに見る港町横浜は、灯火管制下に冷たく沈んでいた。

車は根岸競馬場に着き、一等観覧席のレストランに泊まることになった。毛布一組と枕が支給され、寄せ合わせたテーブルの上に寝るよう指示された。凍えそうな寒さで、トイレに行く際には見張りが付いた。開戦後、ここには敵国民五〇人余りが抑留されており、英語の話し声が聞こえてきたが、姿を見ることはなかった。

翌朝、和式の簡素な朝食を終えると、前日と同じく自動車に乗せられた。到着したのは新しい二階建ての西洋館で、開戦までは米国の石油会社の社宅だった[11]。翌日、米海軍通信士グリフィス（A.H. Griffiths）が加わった。彼は、中国・青島（チンタオ）の領事館で拘束されたのに外交官特権が認められない、とひどく腹を立てていた。

横須賀海軍警備隊所属で、英語が流暢な 進藤一（はじめ） 少尉（一九一八〜八三年）が、捕虜の監督を務めた。青いセーラー服の大柄な兵士が、各捕虜ひとりずつに付いた。生活は海軍式で、毎朝六時に起床して整列と点呼の後、体操を行った。命令はすべて日本語でなされ、彼らは理解できないふりを続けた。

---

[11] 戦後この洋館は山手から移設され、「パークシティ本牧管理センター」として現存している。

洋館の設備と調度は見事で、快適なベッドが置かれ、書棚には英国の古典文学などが並んでいた。ジョーンズは書斎で前の住人の名刺を見つけた。

二人の和服姿の家政婦が部屋を掃除し、高級な陶磁器に盛った洋食を給仕した。こうした食事や体操の様子は繰り返し撮影された。捕虜の人道的取扱いを示す宣伝用であることは明らかで、彼らは無表情を装った。しかし、優雅な生活は数日で終わった。高級な家具類はすべて運び出され、鉄製の寝台と軍隊が使うマットレスが代わりに運び込まれた。家政婦の姿は消え、食事はご飯と大根だけになり、兵士の厳しい監視下で家事をさせられるようになった。

一月一四日午後、九名の捕虜は荷物を持って横浜駅へ向かった。乗り込んだ列車は満席だったが、混雑しているというほどではなかった。乗客は海軍の護送兵に連れられた外国人捕虜を見てひどく驚き、囁きあっていたが、やがてざわめきは消えた。横浜のときと同じく、列車の中でも進藤は紳士的で、自分の配給のタバコを勧めた。リトル・マキンで捕虜となった兵士が進藤の似顔絵を描き、お礼に渡した[12]。監視兵は交替で仮眠をとっていた。

ウィリアムズたちは、夜行列車で向かう先がどこなのか、まだ知らなかった。

---

[12]　一九四四年秋、進藤はフィリピン沖の作戦に向かう前、妹の和子にこの絵を託した。終戦後、米軍の進駐を前に、捕虜の描いた絵を持ち続けることに不安を覚えた和子は、迷った末それを焼いた。復員した進藤は大いに落胆したという。

第三章　最初の捕虜収容所

太平洋戦争初の捕虜収容所が四国・善通寺に開設され、横浜から護送された九人が最初の収容者となった。ウィリアムズはここで、抑留生活の半分を過ごすことになる。

†捕虜収容所の開設

一九四二年一月一四日、日本陸軍は香川県仲多度郡善通寺町（現・善通寺市）に捕虜収容所を開設した[13]。捕虜は、ウィリアムズたちのように海軍が捕らえた者を含め、すべて陸軍の管理下に置かれた。

なぜ国内に収容所を設け、はるばる捕虜を前線から日本まで護送する必要があったのだろうか。いくつかの理由が考えられる。

第一に、戦意高揚である。捕虜の姿を身近に見せることで、国民に戦果を実感させる狙いがあった。

第二に、国際世論を意識し、国際赤十字の視察に備える意図があった。軍中央の目の届く国内に模範的な収容所を設け「日本の捕虜取扱いは人道的である。」と国外に示すためである。

第三に、捕虜に関する諸規定の修正が必要だった。第一次世界大戦でのドイツ人捕虜の収容以降、改訂がなされていない諸規定を見直す必要があった。もし国内に収容所がなければ協議のために担当者を海外へ派遣せねばならず、戦時下では非現実的だった。

早急に解決を迫られた問題のひとつに、捕虜への俸給支払いがあった。国際条約により将校捕虜は労務を免除され、日本軍の同階級の将校と同額の俸給を受けることになっていた[14]。そのために「日米陸海軍の階級比較表」を整備する必要があり、実務を担った善通寺収容所は陸軍省や外務省と協議を重ねた。

次に、善通寺が収容所の立地に選ばれた理由を見てみよう。まず、師団の駐屯地であり、警備や管理の面で都合がよかったことが考えられる。次に、四国という地理的条件である。海に囲まれた小さな島のため捕虜の逃亡は難しく、収容地として適していた。そして、四国と捕虜収容の関わりはこれが初めてではない。第一次大戦中には徳島・丸亀・松山にドイツ兵捕虜の収容所が設けられ、中でも徳島県鳴門市の板東収容所は、日本で初めてベートーヴェンの交響曲第九番が全曲演奏されたことで知られている。第二次大戦で善通寺に収容所が置かれたのも、こうした地理的・歴史的な条件が考慮されたとみられる。

---

[13] 太平洋戦争初の善通寺に続き、香港俘虜収容所が一九四二年一月三一日、上海俘虜収容所が同年二月一日に開設された（陸軍省軍事課「編成完結の件」。アジア歴史資料センター）。なお、善通寺市立図書館は、郷土資料として平安時代の僧・空海、陸軍第一一師団の初代師団長・乃木希典に加え、善通寺収容所に関連するものを多く所蔵している。

[14] 一方、下士官・兵の捕虜には俸給は支払われず、労務に従事した場合にのみ賃金が支払われた。ただし、捕虜に支給される食事や日用品、タバコなどの代金は、将校の場合は俸給から差し引かれたが、下士官・兵は無償だった。

†最初の捕虜たち

ウィリアムズたち一行は岡山駅で列車を降り、連絡船で瀬戸内海を渡った。一九四二年一月一五日正午過ぎ、四国の高松港桟橋には、到着を待ち構える新聞各社の記者が集まっていた。記者たちは捕虜と同じ列車に乗り込み、取材した。ウィリアムズは快活に質問に答えながら、逆に「英国艦は何隻撃沈されたか。」「ソ連はどうしているか。」と矢継早に問い返し、新聞記者は「鋭い敵性英国人の片鱗をのぞかせた。」と記している。やがてウィリアムズは「日本はよい国だが寒い。」と身ぶるいしながら口をつぐんだという[15]。

善通寺駅で師団の中尉が出迎え、進藤は捕虜に「ここからは陸軍が君たちの世話をする。」と告げた。捕虜たちは駅前の道を整列して進み、木の塀に囲まれた善通寺収容所に到着した。

門を入ると正面に二階建ての建物が見え、手前の五〇〇人くらいは楽に収容できそうな建物に入れられた。内部はがらんとして人影がなく、畳の寝台の足もとには、毛布とアルミ製の皿や茶椀が整然と並べられていた。

この日は天気が悪く、底冷えのする寒さだった。セーターに着替えたウィリアムズが外に出ると、新聞記者が写真を撮った。

建物の二階から窓の外を眺めると、収容所は神社と兵舎、練兵場に囲まれていた。練兵場では、数百人の若い兵士が教練を受けていた。下士官の怒号が飛び、殴られ蹴られる者もいる。中には失神して地面に倒れる兵士の姿もあった。植民地で異文化に接してきたウィリアムズは、その光景を見てこう考えた――「もしこれが日本軍で権力をもつ者の行動パターンなら、規律を守らせるために捕虜に同じことをしても不思議ではない。」

夕食を終え、自分たちの境遇について言葉を交わすうち「日本軍の戦闘部隊に編入され、中国かどこかの前線に送られるのではないか。」という結論に至った。暗い気持ちで寝床に入ると、やがて部屋の灯りが消された。

†多度津港の上陸遅延

ウィリアムズたちが到着した日、善通寺収容所は朝から騒然としていた。前日は開所式[16]で所長以下の任命は済んでいたが、構内では作業員による電話線や屋外電灯工事が続いていた。間もなく到着する予定のグアム島の捕虜と抑留者（以下「捕虜ら」）は四八〇人と当初の連絡より約七〇人多くなり、所員たちは食糧・寝具の追加手配に追われた。午後になると、ウィリアムズたちと同じ列車で陸軍省経理局・軍務局、そして俘虜情報局の将校が視察に訪れ、現場はいっそう慌ただしくなった。

午後一時ごろ、グアム島からの捕虜らを乗せた海軍徴用の貨客船は、善通寺から六キロほど北の多度津港沖合に到着していた。「米兵捕虜が来る。」といううわさが広まり、厳寒の港に大勢の見物人が集まった。しかし多度津港には一万トン級の船が横付けできる桟橋がなく、艀（はしけ）に乗り移らねばならなかった。ところが強風と高波で艀が船に近づけない。西

15　横浜で捕虜を監督した進藤一少尉は、妹の和子に「快活に話すが、こちらが聞きたい話題になると話をそらす捕虜がいる。」と語った。おそらくウィリアムズのことであろう。

16　開所式が行われた一月一四日は――多くの捕虜を収容することを見越してか――暦の友引であった。

風はいよいよ強まり、すっかり日が暮れた午後六時ごろには霰も混じる荒天となった。船から夕食の用意がないとの連絡があり、収容所に準備していたパンと砂糖を港へ送った。

多度津町の在郷軍人会の三人が奔走して大型漁船を借り上げ、善通寺師団の係官とともに水先案内を行ない、上陸がやっと完了したのは午後八時半であった。

捕虜らは港の乗客待合所で、パンと付近の住民が差し入れた温かい湯茶を与えられた。善通寺師団の参謀長・依知川庸司（一八九三〜一九七四年）大佐は、海軍から捕虜らの受け渡しを終え、桟橋そばの港務所二階でグアム島総督マクミラン（G. J. McMillin）米海軍大佐と会見した。通訳を務めた細谷雄平（一九〇四〜八七年）中尉は「善通寺師団ではいかん、四国軍参謀長と言うんだぞ。」といった依知川からの細かい注文に頭を悩ませた。当初、依知川は捕虜らを善通寺まで四列縦隊で行進させ、その先頭を細谷が馬で進むという――細谷いわく「趣味の悪い」計画を立てていた。しかし上陸が遅れたため移動は徒歩から電車に変更され、細谷は心底安堵した。

約一時間の休憩を経て、捕虜らは善通寺師団の警戒兵と憲兵に護衛され、約八〇〇メートル離れた琴平電鉄多度津線（参宮電車）停留所へ四列縦隊で向かった。沿道に並んだ学童が「グッドバイ」と声をかけると、捕虜のひとりが覚えたての日本語で「アリガト」と応じ、学童たちはわっと歓声を上げた。

捕虜たちは特別に手配された八両編成の電車に分乗した。再び細谷の回想によれば――「三百人以上の人間が電車に分乗するのだから、警戒のしようもない。われわれと捕虜たちとは、日米合同の金毘羅まいりのような格好になった。」

収容所隣の護国神社前停留所で下車し、雪の積もった正門を抜け、全員が捕虜棟に入ったのは午後一〇時半ごろだった。準備されていた野菜スープで体を温め、一時間後に就寝となった。先に到着していた捕虜の部屋に突然灯りがつき、大勢の足音と米国人の大声が響いてきた。ウィリアムズは飛び起き「上陸作戦だ、助かったぞ！」と喜んだが、それも束の間であった。所員の帰宅は、日付が変わった午前一時ごろになった。

多度津港には各新聞社の記者が集まっていたが、捕虜上陸の写真は締切に間に合わず、翌朝の新聞には、高松港で撮影されたウィリアムズたちの写真が掲載された。依知川参謀長は地元紙上で、捕虜には日本の将兵と同じ待遇を与え、条約の範囲内で労役に服させるとしたうえで「大国民の襟度［心のひろさ］」をもって捕虜に接するよう読者に求めた。さらに善通寺師団では「語学に堪能で、特に人格、教養に秀でた将校若干名を選び、担当官に任命した。」とも述べている。

†捕虜収容後の混乱

当時、外国人を見る機会はほとんどなかったのだろう。多度津港に続き、収容翌日には善通寺収容所の周辺にも大勢の住民が集まり、塀越しに捕虜を見物した。新聞が投げ込まれ、偶然それを拾ったウィリアムズは、自分たちの写真が載っていることに気付いた。野放図な群衆を見かねた収容所長・水原義重（一八八七〜一九六八年）少将は、地元紙上で次のように苦言を呈している。

「護国神社の境内から垣根越しに捕虜を見せ物でも見る様にしている者があるが、これ等は大国民の襟度として面白くないと思う。慎んで貰いたい。」（『香川日日新聞』）

収容所当局は、食料の買出しの際に衛兵付きで捕虜を外出させた。隣の護国神社で捕虜

に参拝させた後、町内の商店で購入した肉類などを運ばせたのである。しかし、食糧事情が厳しくなりつつあった時期で、町民のあいだに不満の声が広がり、こうした外出は間もなく中止された。

多度津港に上陸した捕虜らのうち四人は、収容所ではなく国鉄善通寺駅前の旅館に宿泊した。中立国スペインの宣教師二人と、米兵ヘルマーズ（Helmers）の妻および生後三カ月の女児である。開戦前、米国政府はグアム島在住の軍人・軍属の家族に引き揚げを命じた。しかし出産を控えていた夫人は、病院設備の整った島に残った。新聞で事情を知った近所の主婦が、赤ん坊に防寒用のチャンチャンコを差し入れたという。

一月一八日夜、収容所の所員が旅館を訪れ、宿泊している四人の状況を旅館側から聴取した。そして提供する食事のおおよその基準を示した[17]。

一月二二日、母子は収容所で捕虜ヘルマーズとの面会を許された。その日の夕方、彼女たちを含む抑留者一三四人が捕虜棟前に整列した。水原所長の訓示と抑留者代表の謝辞の後「サヨナラ」を連呼しながら電車で多度津港へ向かった。翌朝、神戸港に到着した一行は、市内二カ所の抑留所に収容された。

この日の『朝日新聞』（香川版）は、収容所の「俘虜の一日」を写真入りで詳報している。翌日には神戸税関の職員が来所し、捕虜の所持品検査を行った。ウィリアムズたちが横須賀港で済ませた入国手続を、多度津港では実施しなかったためである[18]。

†俸給の支給

日本側は、将校捕虜への俸給支給に先立ち、問題点を慎重に検討した。捕虜に多額の現金を持たせてよいかが論点になった。脱走資金に使われたり、日本人を買収して物資を入手したりするおそれがあると警戒したのである。さらに物不足が深刻化するなか、捕虜が収容所内の「酒保（しゅほ）」（日用品などを扱う売店）で自由に買物することが、住民の不満を招かないか、当局は不安を感じた。議論の末、捕虜が所持できる現金の上限は、将校五〇円、下士官三〇円、兵二〇円と定められ、それを超える分は貯金させることになった。郵便局との交渉の結果、貯金の名義は日本側の主計科員とされ、各捕虜には通帳の代わりに貯金授受表が用意された。

こうした検討と準備を経て、一九四二年二月末、将校捕虜に日本円で俸給が支払われた。彼らは支給された額を自国通貨に換算し、そのあまりの低さに驚いた。当時、日本人の俸給は軍人に限らず、英米人と比べてきわめて低かったのである。

例えば、戦前、南洋貿易ギルバート支店に勤務していた増淵真吾によれば、英国植民地省の行政官の年俸は高く、日本円に換算すると六千円にのぼった。彼の郷里である宇都宮市では、年俸が五千円以上だったのは三人――師団長、県知事、宇都宮高等農林学校校長――だけだった。

俸給を酒保での購買に充てたほか、将校捕虜の六割以上が下士官・兵への補助にその一部を回した。収容所当局に対し、自分たちの郵便貯金から毎月一定額を拠出し、病気や高

17　所員の日誌には「相当（　）沢」であったため、と伏字で記されている。時節柄「贅沢」と書くことは控えたらしい。

18　その後、大蔵省主税局長名による通牒で、捕虜については携行品検査を要しないことが定められた（アジア歴史資料センター）。

齢で働けない下士官・兵に渡すよう、連名で依頼したのである。当局はこれを了承したが、慈善の対象が日本人に及ぶと神経質になった。将校捕虜には引率外出が許されていたが、ある日、子供を含む極貧の人々が物乞いをしているのを見かけ、同情してポケットの金を投げ与えた。すると「敵から施しを受けることは好ましくない。」として、外出はしばらく中止された。

一方、捕虜は情報の入手に金と労力を惜しまなかった。日本軍の快進撃が続く間、収容所当局は各戦線の状況を地図まで使って捕虜に説明したが、戦況が不利になると中止され、英字新聞の購読も禁じられた。それでも捕虜たちは独自の情報網を築いた。外へ作業に出る下士官や兵は、新聞を内密に金で買ったり、ときには盗んだりして収容所に持ち込んだ。日本語のできる将校が二階の部屋でそれを翻訳している間、階段上の時計のそばには見張りが立ち、衛兵の接近に備えた。見張りは衛兵が来ると大声で時刻を告げ、その声を聞いた部屋の外に立つ別の見張りがドアを二度蹴る。証拠はすばやく隠され、衛兵が入室するころには、全員が何食わぬ顔でやり過ごした。ニュースは翻訳後、二、三枚に要約されて回覧され、読み終わると慎重に処分された。収容所当局は捕虜が戦況を把握していることを察していたが、その手段を突き止めることはできなかった。ウィリアムズは「日本の新聞は欧州戦線の報道に関しては正確、詳細、かつ最新だった。」と述懐している。

ところで日本人との関係づくりに、金は役立ったようだ。その一端は、善通寺の後で開設された東京俘虜収容所（通称・大森収容所）にいた英国人の将校捕虜ブッシュの次の回想からもうかがえる。

> ある日、日本側の売店［酒保］を預かっている軍属が、ひどく打ちしおれた表情で私のところへやって来た。売上金が帳簿より足りないところへもって来て、会計検査が迫っているので、どうしてよいかわからず、死ぬような心配に責められていると言う。「何とか捕虜の皆さんから融通してもらえませんか。」捕虜たちは日本の同じ階級の軍人と同等の給料が支給されていたが、使うことは余りないので、だぶついている金を一時穴埋めに貸してくれと言うのだ。「そのかわり、できるだけ沢山シガレットを提供しますよ。」私はわけなく金をそろえてやった。この軍属は良い人物で、時々紅茶を分けてくれたり、たまには小瓶入りの酒や菓子までもって来てくれた（『おかわいそうに』）。

†米海軍の看護婦

抑留者が神戸へ移送されるとき、グアム島の米海軍病院の看護婦五人は善通寺に残された。新聞は、彼女たちが日本の習慣とは反対に、男の捕虜より先に入浴していると報じている。収容所は男女をいっしょに収容しているのは風紀上好ましくないとして善処を求めたものの、俘虜情報局の回答は、日本赤十字社と看護婦の身分について交渉中との回答にとどまった。

その後、三月三日には、収容所は彼女たちに日用品としてスキンローション三、コールドクリーム三を支給した。このころ、フィリピンでは、米軍とフィリピン軍からなる米比軍の捕虜が移動の途中で多数死亡する「バターン死の行進」が起きており、内地と戦地の違いが際立つ。

やがて三月一二日、看護婦たちは香川県警察部の係官に伴われ、多度津港へ向かった。彼女たちは――化粧品配給にまで配慮した――所員の夫人に宛てた礼状と記念品を残している。神戸では、顔なじみのヘルマーズ母子と同じ抑留施設だった。

看護婦が去った収容所では、その姿を見ようとして捕虜が集まっていた日曜礼拝の参加者が、大幅に減ったという。ウィリアムズは、グアム海軍基地の大病院から医師、歯科医、看護婦が来たことで収容所の健康管理は非常に行き届いていたと述べたうえで、日本側は看護婦を残したままにして「予期せぬ出産で収容者が増えるのを心配したのだろう。」と冗談めかして回想している。

五月二〇日、ウィリアムズたちと横浜からいっしょだった米海軍下士官グリフィスが、衛兵に伴われて善通寺を出発した。仲間の捕虜から託された手紙でいっぱいのカバンを携え、翌日東京で米国大使館員に引き渡された。彼は善通寺でも、外交官特権が与えられないと、ずっと憤っていたのが功を奏したようだ。

一九四二年六月一七日、日米交換船『浅間丸』が横浜を出港した。船客の中には、神戸で抑留されていたヘルマーズ母子、米海軍病院の看護婦五人、そしてグリフィスの姿があった。その背景には、日本が国際法を遵守する、人道的な国であることを示す意図もあったと考えられる。

†海軍と捕虜

開戦以来日本軍の南方作戦は順調に推移し、捕虜の一部は善通寺に収容された。一月二九日、ウェーク島で捕らえられた約一二〇〇人の米軍捕虜を乗せた船が、上海収容所へ向かう途中横浜に寄港した。その内の一三人はウィリアムズたちのときと同様、進藤一少尉によって善通寺へ護送された。所長の訓示の後、タバコや歯ブラシなど日用品が支給された。

その後も海軍による善通寺収容所への捕虜護送は続いたが、五月には思わぬ騒動が起きた。ある少尉が善通寺での任務を終え、海軍関係者から海上守護・航海安全の神として崇敬される金刀比羅宮を参拝した。ところが琴平町で宿泊中、赤痢の疑いで善通寺陸軍病院に入院したのである。連絡を受けた収容所は、到着した捕虜の隔離・消毒・検査に追われることになった。

海軍側は、善通寺収容所が捕虜から有益な情報を引き出すことを期待していた。一月三〇日、水原所長は三人の中尉に対し、捕虜に対し尋問を行うよう課題を与えた。同日、軍事小説家が来所して捕虜との座談会を開き、通訳は日本人、速記は捕虜が担当した。

二月三日、軍令部[19]第三部長から収容所長宛に、捕虜尋問に関する通牒が届いた。内容は未確認だが、海軍側が善通寺収容所からの捕虜情報に満足していなかったことをうかがわせる。こうした動きの延長として、四月六日には神奈川県大船に「横須賀海軍警備隊植木分遣隊」の名を冠した仮の収容所が設けられ、捕虜を善通寺へ移送する前に海軍側で尋問を行う体制が整えられた。

この仮収容所の運営には、軍令部第三部米国班長・実松譲中佐が深く関わっていた。彼はプリンストン大学大学院で学び、ワシントンの武官室勤務中に開戦を迎えたのち、一九

[19] 軍令部は海軍の作戦・指揮を担う天皇直属の機関で、陸軍の参謀本部に相当する。

四二年八月、日米交換船で帰国した。実松はこう述べている――戦時中の海軍にとって捕虜から得られる情報は貴重だが、陸軍の管理下に移され赤十字国際委員会に通報されると、捕虜は敵を利するようなことは決して言わない。だから大船に仮収容所を設けた。

さらに彼は、尋問者には捕虜に欺かれないだけの技量が求められるとして、次の体験を語っている――台湾で撃墜された米軍捕虜が、日本海軍の尋問に対して「航空母艦『シェーブル』所属」と答え、その情報が全軍に打電された。しかし実松はその捕虜を台湾から大船に送らせ「ミシガン湖の練習空母がはるばる台湾沖まで来るには、ご苦労があっただろう。」と言うと、捕虜は顔色を変え「あなたはだませない、本当のことを言うから、命の保障だけはしてほしい。」と懇願した。そして自分の所属が空母『ハンコック』であったことなどを正直に明かした。実松は「ウソをついた気持ちはよくわかる。」と言って握手し、肩を叩いて慰めたという。

一方、善通寺収容所で尋問に当たった陸軍中尉は召集された予備役将校で、実松のような専門性をもつ職業軍人ではなかったため、限界があったと思われる[20]。

†将校待遇を受ける

日本側は、ウィリアムズとジョーンズたち沿岸監視員三人を、民間人ではなく敵軍の構成員と見なす決定を下した。したがってウィリアムズ――英陸軍の将校候補生予備役であり、植民地省行政官という高い身分にある――には、将校棟に移る権利があった。

しかし彼は日本側にそれを求めず、下士官・兵の収容棟に留まった。その理由は、ジョーンズたちとマキン島以来行動を共にしてきたことに加え、将校棟の居住者の大半が米国人だったためである。米国人将校は、英国人で植民地省行政官という地位にあるウィリアムズをどう扱うべきか判断に迷い、彼が将校待遇を主張すると、露骨な敵意を示した。一方、米国人将校の中にはジョーンズたちニュージーランド人に対して「この戦争で米国が勝てば、英国の圧政から君たちを解放してやる。」と語り、保護者のように振る舞う者もいたという。こうした状況であれば、ウィリアムズがジョーンズたちと行動を共にする方がましだと考えても、不思議ではない。

善通寺収容所の南約三キロに、高さ六百メートルほどの大麻山（おおさやま）がある。この山で農地開発営団が水田造成工事を進めており、収容所は捕虜の下士官・兵を営団に有償で派遣する計画を立てた。そのため捕虜の外出に際して、護国神社から陸軍墓地を経由し、大麻山の工事現場まで歩かせた[21]。

俘虜情報局の許可が下り、一九四二年二月から二四〇人が三交替で作業に出ることになった。ウィリアムズは、将校である自分には労働の義務はないと考えていたが、自発的に参加しようと決めた。朝、弁当を受け取って収容所を出発し、つるはしと鍬で大きな岩を掘り起こし、段々畑の最下段まで転がして落とす作業を夕方まで続けた。

---

[20] 善通寺収容所は陸軍省に送った五月一五日付旬報の中で「捕虜に対する軍事専門的な尋問はすでに軍令部で実施されたものと理解している。」と前置きしたうえで、収容所として改めて尋問を行うべきか否かについての指示を求めている。

[21] 引率する衛兵は、女学生が通りかかると、ウィリアムズたちに教えた日本語――「ムスメ」「コイビト」「トテモスキデス」――を叫ばせ、彼女たちが慌てて逃げる様子を、捕虜とともに楽しんだ。衛兵も捕虜も若かった。

このころ、善通寺収容所には、マラヤ（現・マレーシア）で捕虜となった英空軍のボーデン（William C. Bowden、一九一八〜五一年）大尉がいた。将校棟にいる英国人は彼ひとりで、孤立した不愉快な日々を送っていた。ウィリアムズの経歴を知ると、所長に掛け合い、ぜひ将校棟に来てほしいと頼んだ。ウィリアムズはその境遇に同情した。一方で、ジョーンズたちは収容所内で友人もできており、これ以上自分が行動を共にする必要はないと判断した。

水原所長は、最初の捕虜への訓示で、苦情や苦痛があれば遠慮なく申し出るようにと述べた。制定された収容所業務規定も、捕虜からの請願を認めていた。そこでウィリアムズは所長と面会し、作業は自主的な判断で志願したと説明し、撤回したいと申し出たが却下された。

ボーデンの懇請を受け、ウィリアムズは再度所長と面会した。今度はまず、自分が英国植民地省所属のシビリアンであることを明かし「日本軍の捕虜になったシンガポールや香港の総督は労役に服していますか。」と尋ねた。所長が「ノーだ。」と答えると「では、同じ太平洋の小島にいた自分が、なぜ働かねばならないのですか。」と重ねて質問した。所長は副官と協議した結果、ウィリアムズに少尉待遇を与え、作業に出る必要はなくなった。本人は、駐在事務官に過ぎない自分が「きわめて怪しいマキン総督」の肩書を与えられたと、苦笑している。水原所長については「さほど知的な感じではなく、見た目もぱっとしなかったが、温かみのある人物だった。」と回想している。

ジョーンズは、この待遇変更の背後には通訳・朝吹四郎（一九一五〜八八年）の口添えがあったと考えている。朝吹はウィリアムズと同じケンブリッジ大学出身で、捕虜に同情的な人物だった。

†講習会

収容所が作成した講習会予定表から、将校捕虜の一週間を知ることができる。日曜は讃美歌合唱などの宗教行事以外、特別な予定はなかった。月曜から土曜の午前は一時間半、食用ウサギの世話や、収容所の外に出て餌になる草の採集が行われた。水曜の午後と木曜の午前に一時間ずつ日本語学習があり、木曜の午後、引率つきで二時間の外出が許された。

午後は一時から四時と六時から七時四五分までの間に、四五分間と一時間の科目が組まれていた。すべて座学で、日本語以外の科目は将校捕虜が講師を務めた。上級数学、商業経営、木曜講話など多彩な科目が許可されたが「ラジオ技術」は管理上問題があると禁止になった。会場の会議室には、日本人所員が常に立ち会った。「図画」の時間にウィリアムズが描いたビカチ島の絵は、ジョーンズが譲り受けている（図３）。

やがて非正規のルートでトランプが手に入ると、捕虜のブリッジの名手が講習会を始めた。将校の多くがルールを覚え、参加料をタバコ二本として試合が行われた。物静かでヘビースモーカーだったその名手の手持ちが尽きると、また試合が開かれた。

将校の講習会とは別に、収容所側は夜の点呼後、希望者を対象とした日本語の授業を始めた。しかし米軍将校の中には密告を恐れ、ジョーンズたち下士官・兵が日本語を学ぶことを快く思わない者もいた。

ドイツや米国の捕虜収容所では、監視は監視塔から行われ、捕虜が収容所の柵に近づい

た場合には発砲によって制止した。衛兵は捕虜棟の周囲を巡回するにとどまり、問題が生じないかぎり捕虜棟に立ち入ることはなかった。これに対し、善通寺収容所には監視塔はなく、その気になれば脱走は容易だった。その代わり、衛兵は銃剣の付いた小銃を手に窓から内部をのぞき、捕虜棟内の通路を往復して直接監視した。しばしば日本語で「規則違反だ！」と怒鳴って顔を殴り[22]、すねを蹴ることもあった。近くに通訳がいることはまれで、捕虜は理由も分からないまま苦しんだ。やがて捕虜は、衛兵の叫ぶ日本語を聞き取れるようになったが、その内容は――ボタンが外れていた、灰皿から数歩離れた場所で喫煙していたといった――取るに足らない規則違反であった。

後述する英ゴードン大佐は収容所当局と交渉し、改善に努めた。規則違反を見つけた場合、衛兵が独断で罰するのは誤りで、将校に報告してその指示を受けるべきだと説いた。それまで収容所側にこんな要求をした将校はいなかった。当局もそれに同意したが徹底されず、衛兵が怒ると同じ光景が繰り返された[23]。

†署名拒否事件

一九四二年三月、赤十字国際委員会代表のパラヴィチーニ（Fritz Paravicini、一八七四～一九四四年）が、俘虜情報局の山崎大佐らとともに来所し、大麻山での労役を視察した。収容所側は事前に捕虜へ警告を与えて演技させ、当日はいつもより豪華な食事を出したという。パラヴィチーニは捕虜の訴えに熱心に耳を傾け、ジュネーブの本部へ「善通寺収容所の待遇は良好である」と電報で報告した。

二カ月後、東条英機陸軍大臣（兼首相）は、善通寺収容所隣の護国神社に参拝したのち、師団司令部を訪問した。師団長と収容所長から報告を受けた東条は、捕虜は人道に反しない限り厳正に管理し、無為徒食させず有効に活用するよう求めた。大麻山の開墾地視察は時間の都合で中止された。

赤十字国際委員会と陸軍大臣によるこれらの視察のあと、水原所長は思いがけない「署名拒否事件」により、八月一日付で解任された。

発端は日本と英米との捕虜観の根本的な違いだった。日本軍は「戦陣訓」において、将兵に捕虜となるより自決することを求めていた。一方、英米軍では捕虜が脱走を試みて敵を混乱させることは義務、あるいは名誉ある行為とみなされていた。

一九四二年春、中国の上海捕虜収容所で米軍将兵の脱走事件が起きた。これを受け、陸軍省は各収容所に対し、捕虜に「逃亡せざる宣誓書」へ署名させるよう指示した。善通寺収容所が四五〇人余りの捕虜に署名を求めたところ、一割以上がこれを拒否した。七月十八日、収容所は、拒否した者を将校と下士官・兵に分け、別室に隔離した。そのひとりだったウィリアムズは、当時の状況を次のように回想している。

---

[22] 当時の日本では軍隊でも一般社会でもビンタは軽い罰だが、欧米人にはひどい侮辱だった。

[23] 前述の細谷雄平中尉は、京都帝国大学卒業後、新聞記者をした人だった。終戦前に大尉に昇格し、善通寺収容所の最後の所長を務めた。戦後、細谷は戦犯として追及されたが、捕虜の証言によれば、彼は体罰を禁じ、命令に従わない衛兵がいれば力づくで制止し、処罰したという。英軍将校のゴードン大佐も、彼を庇う証言をしている(『「善通寺俘虜収容所」ハンドブック』)。

日本側は、収容者全員に「脱走を試みない」という誓約書へ署名を求めてきた。脱走が成功する見込みはほとんどなかったから、多くの捕虜は署名に良心の呵責を覚えなかった。収容所を抜け出すことは容易だったが、塀の外に協力者はいそうになく、日本から脱出する手段もなかったからである。一方で、捕虜には脱走のためにあらゆる努力を尽くすべしという規則があり、この誓約書への署名はそれに反すると考えられたため、一部の者は署名を拒否した。

日本側はこれに対し、拒否した者を収容所の隅の部屋に監禁した。彼らには、「要注意者」と漢字で書かれた白布の札を常時身に付けることが命じられ、さらにカタカナで名前を記した木札が配布された。部屋の外には衛兵が一名配置され、外出の際には木札を留めくぎに刺し「洗濯」「礼拝」「事務所訪問」など行先を告げなければならなかった。

われわれのグループには、オランダ潜水艦の将校、米航空母艦『ヨークタウン』のパイロット、オーストラリア空軍の大尉、英空軍のビル・ボーデンたち多国籍の人々がいて、〈国際部屋〉と呼んでいた。やがて〈恐れ知らずのポール〉として収容所中に知られるようになったオーストラリア空軍のポール・メッツェラー（P. M. Metzler）大尉の指導の下、われわれは「日本軍を悩ます」作戦を組織的に始めた。協力せず、口を開かず、尊大に振る舞い、命令や指示はすべて誤解したふりをする。外見上は穏やかで悪意のない態度を装い、日本側を最大限に苛立たせながら、処罰の口実を与えないように計画されたものだった。たとえば朝、衛兵が部屋に入って来て「起床、起床」と叫び、起きないわれわれを小銃の台尻で叩く。しかし濡らした厚手の外套を着て足を引っ込めているので、痛みはほとんど感じなかった。［中略］メッツェラーは連行され、営倉の独房に入れられた。殴打こそされなかったが、居住環境は劣悪で、トイレはバケツがひとつだけ、中身を捨てることは許されなかった[24]。彼はここで一〇日間耐えたのち、われわれ全員の署名を条件に釈放された。逃亡が不可能である以上、これがはかない抵抗に過ぎないことは、当初から明らかだった。それでも、全員が再び合流したとき、先に署名した捕虜たちも、われわれの主張が正しかったことに同意した。善通寺収容所の捕虜の士気はきわめて高かった（筆者宛書簡、筆者訳）。

のちにメッツェラーは「［独房生活は］苦行には違いなかったが、すべて物事は比較の問題だ。俺たちの体験はタイ＝ビルマ鉄道での労働、死に追いやられた経験とは比べようもない。」と語っている[25]。――戦地と国内では、捕虜の扱いをめぐる法規や運用実態が全く異なっていた。

24　食事は半分に減らされ、蚊を防ぐ手段もなかった。

25　タイ＝ビルマ鉄道で建設工事に従事させられた英軍捕虜によると、将校に労務を課すことは国際条約違反であったにもかかわらず、日本軍は作業を命じた。将校たちは殺害の脅しにも屈せず拒否したが、銃を構えた兵士に包囲され、命の危険を感じ、最終的に従わざるを得なかったという（『死の谷をすぎて』）。

一方、善通寺収容所の陸軍省宛旬報には「捕虜に対して所属部隊の編成や装備などの調査を試みているが、英国やオーストラリアの兵士はこれをあからさまに拒否し、一部の米軍将校も収容所内での軍令部将校による調査に対し回答を拒んでいる。収容所としては、こうした場合に罰則を科す法的根

九月二二日、二代目所長・佗美（たくみ）浩少将の初巡視までに全員が宣誓を終え、監禁室は廃止された。事件はこうして幕を閉じた。

†演芸会

将校捕虜の日曜夜の講習会に「一般合唱」の時間があった。おそらくこれがきっかけで、米海軍のヘンショー（George Herbert Henshaw、一九一八〜二〇〇三年）少尉が合唱団を結成した。練習は風呂場の脱衣場で行われ、ジョーンズも誘われて加わった。ヘンショーはのちにこう回想している。

> われわれが風呂場の大きな更衣室で毎晩のように練習していると、ジョージ［ウィリアムズ］はよく見物に来た。にこやかで、ときには道化役を楽しんでいる風だった。他愛のない話から、戦況や乏しい食事、取扱いへの不満に及ぶと、いつの間にか姿を消していた。彼はいつでも楽天的な人物だった（筆者宛書簡、筆者訳）。

ウィリアムズによれば、最初はヘンショーたちの合唱だけだった日曜日の発表会は、やがて独唱や朗読、落ちのある寸劇なども加わり、ミュージック・ホールのバラエティ（多様な演芸を組み合わせた舞台公演）のようになった。

善通寺収容所の「劇場」は風呂場を併設した多目的施設で、酒保が開かれ、散髪や縫製作業が行われた。教会としても使われ、英国国教会、カトリック、メソジストなど各派の従軍牧師が、日曜の礼拝や、葬儀――終戦までに一〇人が病没した――を執り行った。どの宗派も聖歌隊に力を入れ、暗い日々の中で捕虜の慰めになった。日本国内のキリスト教団体は、赤十字社を通じて宗教書や祭礼用具を寄贈した。収容所当局もクリスマスなどには消灯時間を延長し、酒保の利益や、捕虜本人の同意を得た郵便貯金の利息を「俘虜慰安施設の費用」に充てた。

オリバー・ゴードン（Captain Oliver L. Gordon、一八九六〜一九七三年）大佐は英重巡洋艦『エクセター』の艦長であった。一九四二年三月、蘭印（現・インドネシア）スラバヤ沖で日本艦隊と交戦し、同艦は沈没、ゴードンは捕虜となった。大船仮収容所での厳しい尋問を経て、同年九月に善通寺へ移送された。先の署名拒否事件により、米海軍のマクミラン大佐が台湾の収容所へ移送されたため、彼がその後任として捕虜代表に選ばれた。

ゴードンは、何もない収容所で捕虜たちが行った宗教活動やコンサート、さらには演劇公演を高く評価し、とりわけ演劇については、演目を記録に残している。

> 一九四二年のクリスマスに『シンデレラ』が、様々な国籍のキャストで上演された。台本はもちろんまったくの創作だったが、大成功だった。［中略］省略なしで上演された劇には、米国人による『ゴールデン・ボーイ』、オーストラリア人による『グッド・モーニング、ビル』、オランダ人による『ザ・プリンセス・ウイズ・ザ・グラス・ハート』、そして英国人による『ナイト・マスト・フォール』があった。娯楽性が高い

拠がないため、そのままにせざるを得ない。これについて、すでに定められた方針があれば指示を求めたい。」と記されている（下線は筆者）。

創作の歴史小劇『ロンドン・ページェント』は英国人将校の執筆で、とりわけ米国人観客から熱狂的に迎えられた（『Fight It Out』、筆者訳）。

ゴードンの言う英国人将校は、おそらくウィリアムズだろう。米陸軍のカルプフライシュ（Edwin Jr. Kalbfleish、一九一七〜九〇年）中尉は彼を、「才気あふれるケンブリッジ大学卒業生で、筆が立ち、滑稽な詩や物語を尽きることなく暗誦した。」と評している。ウィリアム自身も、「多くの台本を書き、上演された。」と述べている。

演芸会に立ち会った通訳は、ウィリアムズの「特技」を見逃さず、それがやがて彼の運命を大きく変えることになった。

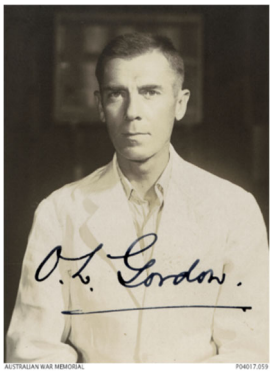


図４　ゴードン
出典：The Australian War Memorial

第四章　世界を驚かせたラジオ番組

南太平洋のガダルカナル島を巡る日米の激戦が続く中、東京から放送されるラジオ番組「ゼロ・アワー」が、突然、世界の注目を集めた。この新番組をプロデュースしたのは、放送の分野とは縁の薄いひとりの軍人だった。その行動が、やがて思わぬかたちでウィリアムズの運命を変えていく。

†日本の短波放送

短波による対外ラジオ放送は、一九二八年に正式に開始したオランダが世界初だった。その後、英国（一九三二年）、日本（一九三五年）、米国（一九三七年）などの国々が続いた。当初、短波放送は自国植民地、もしくは在外同胞に向けられ、日本の一時間の放送も、日系人の多いハワイを含む北米西部向けに行われた。

この放送は、日本放送協会東京中央放送局（現在の NHK。以下「JOAK」）が実施した。当時の担当者によれば、国内放送と違って聴取料が取れない対外放送は〈道楽息子〉扱いされ、予算も限られていた。タイプライターは二台しかなく、英語の辞書を一冊新たに購入するにも、本部の経理部から「字引のいらない人を雇っているはずだ。」と文句をつけられたという。

一方、中国は放送による対外宣伝の効果を早くから認識していた。この差のためか、満州事変に伴う対外宣伝戦では、日本は中国に後れを取った。その反省から政府は対外放送の強化に乗り出し、一九四〇年には JOAK を指導・監督する情報局が発足した。

同局の主宰により、毎週一回（開戦後は毎日）開かれる対外放送連絡会議に、（参謀本部・軍令部を基幹とする）大本営陸海軍部、陸海軍、外務、内務、逓信各省、JOAK、同盟通信社の責任者が集まり、宣伝要領を協議・決定した。

この会議に出席していた参謀本部の宣伝担当・恒石重嗣（つねいししげつぐ）（一九〇九～九六年）は、戦後、新聞社の取材にこう語っている。

> ［大本営陸海軍部の］担当は軍事宣伝で、国としての対外宣伝は内閣情報局や外務省がやってた。しかし、軍だけで軍事宣伝ができるわけではなく、情報局に［中略］朝九時から各自が所管のニュースを持ちより、その取り扱いを決めていた（『昭和史の天皇　三』）。

当時、情報局を「情報の大本営」と呼ぶ人もあったが、筆者が話を伺った恒石元参謀は、次のように語っている。

> けど貧弱でしたよ。結局ドイツなんか宣伝省というのがあって宣伝大臣がおったでしょう。大々的にやってますわね。日本も情報局というものができてやってはおりました。五五〇人ぐらいおったでしょうか。各官庁から出向して内閣情報局を作っとっ

た訳ですけど、ところがこれが寄合所帯で、人事関係以下、給料も各省から出とったんじゃないか……、ま、ともかくとして人事関係は本省が全部握ってるわけです。だからひも付きでしょ、みんな。これではまとまるわけにはなかなかいかないですね。まあ形はできとったけれども、弱かったでしょうねぇ（国立国会図書館蔵「恒石重嗣元陸軍中佐の回想」）。

†恒石重嗣

幕末に活躍した土佐藩は、明治維新後も高位の軍人を多数輩出した。その伝統の中から恒石も生まれた。彼らの多くは、旧藩主・山内家が設立した高知県立中学海南学校[26]から陸軍幼年学校を受験し、陸軍士官学校（陸士）へ無試験で進んだ。太平洋戦争でシンガポール攻略を指揮した山下奉文（一八八五〜一九四六年）大将も、そのひとりである。しかし恒石はこのコースをたどらず、県立高知城東中学校（旧制高知一中、以下「高知一中」）から陸士を受験している。恒石家は学者が出る優秀な家系だが、親族・姻族の間では、重嗣はその中でも際立って聡明だったと伝わる。彼が軍人の道を選んだのは比較的遅く、高知一中在学中のことと推定される[27]。高知一中は総理大臣浜口雄幸や物理学者・随筆家の寺田寅彦、恒石の同級生で漫画家の横山隆一など多彩な人物を輩出したが、軍人の最高位は陸軍中将がひとりだけのようだ。

陸士は全国の中学から秀才が挑む難関で、恒石の第四四期の競争倍率は二七倍だった。合格者二〇六人に加え、無試験の陸軍幼年学校卒業生一四九人が進学し、一九三二年七月の卒業生は三一五人となった。

陸士卒業後、恒石は香川県の丸亀歩兵第一二連隊に配属され、少尉に任官した。その後、連隊長の推薦を受け、東京・青山の陸軍大学校（陸大）に入校する。陸大在学中の一九三九年五月にノモンハン事件が勃発し、同年九月には第二次世界大戦が始まった。恒石は一九四〇年六月、第五三期生四九人のひとりとして陸大を卒業した。陸士第四四期生のうち、太平洋戦争開戦までに陸大を修了した者は約一割、恒石を含めて三九人に過ぎない[28]。

卒業後、満州の第一二師団司令部に配属される。翌年、日ソ中立条約が調印されたが、六月の独ソ戦勃発とともに日本陸軍は関東軍特種演習（関特演）の名の下に、関東軍の兵力を大幅に増強した。恒石は後方主任参謀として、続々と到着する部隊の対応に追われた。だが、極東ソ連軍が西方の独ソ戦線へ転用される動きは予想より少ないと判断され、関特演は八月に中止された。

26　時期により校名が変遷しており、ここでは便宜上、「高知県立中学海南学校」とした。

27　末っ子の恒石が、実の兄弟同様に親しくしていた三歳下の従弟・河村俊平（一九一二〜三五年）は、知性・人格・指導力の三拍子がそろった逸材だった。恒石は、彼が自分と同じ中央官庁志望であることを知り、職業軍人へ進路を変えたのではなかろうか。河村は恒石と同じ高知一中をいわゆる飛び級で卒業し、第一高等学校、東京帝国大学を経て大蔵省に入ったが、間もなく急逝した。

28　参謀本部第二部長を務めた有末精三中将は、戦後、東京帝大（本郷）と陸軍大学校（青山）を比較している。帝大は「詰め込み教育」であり、応用力は卒業後に実社会で培うとする一方、陸大は陸士での「詰め込み」を基盤に、図上・実地の戦術演習や実兵指揮を通じて応用力・判断力を磨き、現場での活用を重視したという。なお、有末は総力戦時代に軍事と政治を切り離した陸大の教育には疑問を呈している（『陸軍大学校』）。

日本軍は南方へ転じ、南部仏印（現・ベトナム）に進駐する。一一月には杉山元（はじめ）参謀総長が、南方軍を構成する第一四軍（フィリピン）・第一五軍（ビルマ）・第一六軍（ジャワ）・第二五軍（マレー）に対し、攻略準備を命じた。

同月、少佐に進級したばかりの恒石は、参謀本部付転任の電令を受けた。南方作戦部隊要員として転補されるものと期待して満州を発ち、一一月一八日、東京飛行場（以下「羽田飛行場」）に着くと直ちに参謀本部へ向かった。そこでは、大戦前夜の緊迫した空気が漂っていた。この日、海軍機動部隊は大分県佐伯湾での演習を終え、開戦と同時に予定されたハワイ真珠湾空襲に備え、千島列島の泊地への移動を開始していた。

図５　恒石重嗣
出典：『心理作戦の回想』

†宣伝担当

参謀本部の花形とされた第一部第二課（作戦課）に、恒石と陸士同期の瀬島龍三（一九一一～二〇〇七年）がいた。瀬島は陸軍幼年学校を出て、陸士を次席、陸大を首席で卒業した俊才である[29]。

恒石は、参謀本部の中でも情報と謀略を担う第二部第八課に配属され、宣伝担当と決まった[30]。秘かに抱いていた出征の期待はここで潰えた。「作戦第一主義」の参謀本部では、第二部第八課は軽視されがちな部署であったが、恒石は腐らなかった。

29　戦後、瀬島龍三は伊藤忠商事の会長を務め、中曽根康弘首相の顧問など数々の要職に就いた。

30　二〇世紀初め、米国では大量生産された製品を販売する必要から、宣伝や販売促進の理論としてマーケティングが学問として発展した。ラジオはその有力な手段で、大学でアナウンサー教育を受けた卒業生が、複数のラジオ局でスポンサー獲得をめぐり激しい競争を繰り広げた。一方、日本の JOAK は商業宣伝を行わなかった。

恒石が後述する対米謀略放送の拠点として一九四三年に開設した駿河台分室に勤務した女子職員は、次のように述べている。――「何事によらずＰＲに明け暮れる現代ならいざ知らず，一般には宣伝と言えば、大売出しの時のチンドン屋位のものであった時代に、謀略宣伝専門業者なんてある訳もないから、こんな商売は誰にとっても初めてであったのだ。要領を得ないのは当然かも知れない。元来、宣伝などは大いに軽蔑していたお国柄だから［以下略］」（『猫のしっぽ』）。

「……宣伝なんて陸大でも教えられず面くらったが、［中略］若かったし、ガムシャラに仕事をした。」と回想している。彼は、外国向け広報誌や、敵兵などに撒く宣伝ビラ（伝単）を製作する民間会社との調整に当たった。

写真雑誌『FRONT』を製作していた東方社社員の多川精一は、次のように記している。「参謀本部第八課から連絡将校として一番よく顔を出していたのは、恒石重嗣という参謀少佐であった。恒石は開戦直前、［中略］参謀本部に転任してきた若手の参謀で、［写真家の］木村伊兵衛にいわせると「魚屋のアンチャン風」の、キビキビした頭の切れる将校だった」(『戦争のグラフィズム』)。

敵に向けた宣伝に一方的な主張は通じないから、相手の心理を読み取る力が欠かせない。恒石の丸亀連隊時代、旧制中学の同級生も徴集されていた。訓練中は教官と初年兵の間に厳然とした差があったが、日曜日には下宿を訪ねてきた彼らと「俺・お前」で昔のように言葉を交わす関係に戻ったという。そうした階級の上下を超えた柔軟なコミュニケーションの感覚こそ、命令で人を動かすことを当然とする陸軍幼年学校出身者にはない恒石の強みであった。

次のエピソードも、いかにも恒石らしい。開戦後、海外の短波放送は主に外務省と逓信省が受信し、同盟通信社が整理・翻訳して関係機関に配布していた。参謀本部も受信していたが、恒石は各国の短波による公式放送だけでは満足せず、米国人が日常聴いている中波の国内放送を傍受できる機器の開発を、メーカーに依頼した。

> 戦争は始まったけれども情報がほとんど入らんのですわ。入るのはもう第三国あるいは枢軸関係――ドイツやイタリー、中立国から多少ありましたけどね、そういうところから外務省に入ってくる公電しかないんですよ。だから宣伝する相手の国内情勢も何も知らずにやっても宙に浮いていかんなあということで、なんとかしてアメリカのことやから、ローカル［国内向け放送］やったらあんまりうそは言えない国だなあというのでね、それを聴けたらいいなあという気持になって、大野［貫二（参謀本部嘱託・国際電気通信株式会社受信課長)］さんに言うたんですよ。「大野さん、ひとつそういうものができませんかね……」(「恒石重嗣元陸軍中佐の回想」)。

大野たち技術者は苦心の末、受信機を完成し、試しに聴いてみると宣伝に利用できる内容が多かった。そこで、開戦後日本に残っていた二世[31]約二〇〇人を徴用して参謀本部嘱託とし、東上線（現・東武東上線）上福岡に本格的な施設を整え、日夜三交代で受信に当たらせた。傍受したのは米国中西部の一〇数カ所の放送局で、聴取しながら速記し、タイプして、英文のまま（英語に弱い役所には訳文を添えて）外務省、情報局、海軍など関係方面へ直ちに送達した[32]。

31　太平洋戦争前、五万人前後の日系米国人二世が来日し、戦時中一万数千人が日本に留まったという推計がある（吉見かおる「ある日系アメリカ人帰米二世画家の口述生活史」)。留学や就職、親族訪問など様々な目的で来日し、何らかの理由で帰国できかった者や、自己判断で日本に留まった者がいた。

32　これらの文書の冒頭には、「本情報を新聞及び放送等に発表せらるる場合は予め参謀本部第八課恒石少佐に御連絡せられ度」という注意書きがある（アジア歴史資料センター)。

†カズンス少佐移送

開戦後、陸軍中枢は、それまであまり重視してこなかった宣伝が戦局を左右し得ることを痛感した。とりわけ、敵兵の心理に働きかける伝単やラジオ放送といった謀略宣伝の効果が注目された。

マレー半島で使用された伝単は「紙の爆弾」と呼ばれ、英国の長年にわたる植民地政策を痛烈に批判し、インド兵に独立を訴えた。英印軍の大半を占めるインド兵は、日本軍が撒いた「安全を保証する」と書かれた投降票入りの伝単を拾い、懐に大切にしまい込んだ。やがて彼らは次々と武器を置き、部隊は事実上崩壊した。日本軍のシンガポール要塞への総攻撃を前に、投降者は数千名に達したという。

ラジオ放送による宣伝も威力を発揮した。南方に派遣されたJOAK職員は、国内とは異なり情報局ではなく現地軍の管理下に置かれ、撤退する際に敵が破壊した放送局の復旧や現地放送の制作・送信に従事した。

とりわけ三月一日、第一六軍が蘭印（現・インドネシア）ジャワ島に上陸した際には、仏印（現・ベトナム）の放送局からジャワ向けに偽のニュースを流した。蘭印の国内放送を装い「日本軍が島の南岸に上陸した。」と報じて蘭印軍を混乱させ、さらにこれを東京で傍受した参謀本部が本物と信じ「なぜ第一六軍は中央の許可なく作戦を変更したのか。」と憤慨する一幕まで生んだ。

当時、日本国内では参謀本部と、情報局が所管するJOAKとの直接の関係は薄かった。一九四二年一月、JOAK職員を善通寺収容所に派遣して捕虜の声を録音し、米国へ放送する企画を進めたのは情報局で、捕虜を管理する陸軍ではなかった[33]。

しかし南方作戦で対外放送の有効性を知った参謀本部は、国内でも放送重視へと転じていく。まず、JOAKの海外放送を改善するため、シンガポールで捕虜となったオーストラリアの人気アナウンサー、チャールズ・カズンス（Charles H. Cousens、一九〇三〜六四年）少佐を東京へ移送し、指導にあたらせることになった。これは、当時一〇数万人に達していた連合国の捕虜を無為徒食させず有効に活用せよという、東条陸相の方針に沿ったものである。それまで日本国内の規則でも将校捕虜の労務は禁じられていたが、一九四二年六月の俘虜管理部長通牒で緩和され、肉体労働のような将校の身分にふさわしくない作業を除けば、自発的に従事させてよいとされた。なお、この通牒の「適当と思料せらるる」労務の例には「宣伝業務」も挙げられている。

恒石少佐から「南方の捕虜を使うことになった。」と知らされた情報局は、自らの所管領域に参謀本部が踏み込むことに反発を覚えたであろう。

だが並河亮情報官によれば、情報局は「『作戦』には一切口出しをしない。またできるものでもない、と決めていた。」という。JOAKから出向していた並河自身も「海外放送の英語アナウンサーの質がいいとはいえず、それがわが海外放送の最大の弱点であった。」と認識していた。

日本に到着したカズンスは八月初め、東京で恒石から放送協力を強く求められたが、祖国への反逆になると拒んだ。そこで恒石は上司の許可を得て、参謀総長名で協力を命じた

---

[33] ウィリアムズたち英国人は、敵の宣伝に利用されるとして録音を拒否したが、ほとんどの捕虜は生存を家族に伝えられるという望みからこれに応じた。ジョーンズは帰国後、そのメッセージが届いていたことを知った。それまで家族は、彼がスパイとして処刑されたのではないかと案じていた。

[34]。放送事業の建前上、これ以上軍が表面に出れば越権になると判断した恒石は、JOAK にカズンスの身柄と職務を委ねた。以後カズンスは真摯に任務にあたったという。恒石によれば、大戦中に謀略放送に参加した二六人の捕虜のうち、命令に基づいて従事したのはカズンスただひとりであった。

JOAK は恒石の「カズンスを捕虜ではなく雇員として扱い、給料を支給して背広を着せ、一般外国人並みの待遇にしてほしい。」という要請に従い、宿舎として当時帝国ホテル、山王ホテルと並ぶ新橋の第一ホテルを用意した。給与も高給が支払われた。恒石は、自分は新参の中佐で月給が一五〇円に満たなかったが、［カズンスの次に JOAK の雇員となった］レイズは七百円だったと苦笑気味に記している。捕虜の優遇がタブー視された当時、きわめて異例の処置であった。

†西課長の帰国

恒石がカズンスと面談していたころ、ガダルカナル島に米海兵隊の一個師団が上陸した。以後、日米両軍は兵力を注ぎ込み、約半年にわたる激戦を繰り広げる。恒石は米軍兵士の望郷心を刺激する伝単の作製を命じたが、東南アジア向けの「植民地解放」や「独立の獲得」といった魅力的な訴求を欠いていた。さらに戦局の不振により、航空機による伝単撒布も次第に困難となり、この方面では電波戦を主体とする宣伝に頼らざるを得なくなった。

こうした中、日米交換船で帰国した西義章（一八九八～一九四三年）大佐が第八課長に就任し、恒石の上司となった。恒石は、西について次のように記している。

> 大佐は海外生活の経験から、日本のラジオ放送は諸外国に比し宣伝技術において一歩の遅れがあるので、これを改善強化する必要を感じていた。そして宣伝に関しては、きわめて熱心で、かつ見識を持っておられた。私はこの新しい課長に教示善導せられた点が少なくなかった（『心理作戦の回想』）。

恒石の回想どおり、西課長は具体的な改革に乗り出した。西は、北米で聴いていた JOAK の海外放送『ラジオ・トウキョウ』を「生硬である」と手厳しく批判し、恒石に改善を命じた。そして、捕虜の中から放送経験者をさらに探し出し、活用するよう求めた。恒石は直ちに手配し、フィリピンから米陸軍のインス（Ted Wallce Ince）大尉と米比軍のレイズ（Norman Reyes）中尉という二人のベテランアナウンサーが、第一ホテルへ到着することになった。

この西の改革により、参謀本部が行う謀略宣伝はラジオが主役となる。以後、恒石は西の指示――海外放送『ラジオ・トウキョウ』の「生硬さ」の改善と、放送への捕虜の活用――を忠実に実践していく。

カズンスたち放送のベテラン捕虜三人は JOAK で国際放送の原稿を添削し、アナウンサ

---

[34] 恒石は、『ラジオ・トウキョウ』の著者・北山節郎の質問に対し、「無論参謀職は司令官とは異り命令する権限はありませんが、上司の命令を伝達することは当然の職務です。」と答えている（『ラジオ・トウキョウ II』）。

ーに助言し、ときには自らマイクに向かった。非常に声がよく、音楽のセンスにも恵まれていたレイズを中心に、日本時間の午後六時から一五分間の音楽番組が始まり、のち三〇分に延長された。炎熱の戦場で一日の死闘に疲れ果てた米軍将兵が、ひと息つく時間帯を狙って懐かしい曲を流したこのディスク・ジョッキー番組は、たちまち人気を博した。

そしてカズンスとインスは、恒石の要請によるものとみられる「日本の対外放送に対する意見」を執筆した[35]。

また恒石は、立教大学の教授を招き、同大学のアメリカ研究所として参謀本部に協力するよう要請した。同研究所を所管していた学長はこれを承諾し、研究所の「昭和十八年予定事業」欄には「米州関係の戦時情報の蒐集分析」や「対米宣伝対策の立案」といった項目が並んだ。その後、恒石は業務を並河情報官に引き継ぐために立教大学を訪れ、やがて同大学の新学長が情報局に呼ばれて、毎月五〇〇円の補助金が下付されることになった。

こうして西と恒石は、海外放送の改善に向け着々と手を打っていった。

†『ゼロ・アワー』放送開始

一九四三年二月、日本軍はガダルカナル島からの撤退を開始し、同じ月、ドイツ軍はソ連の都市スターリングラード攻防戦で敗北した。

このころ恒石は、情報局の了解を得たうえで、JOAK に特別グループの編成を要請した。南太平洋の米軍に、厭戦気分を醸成することを狙った謀略放送を担当させる意向であった。メンバーには二世を中心に、カズンスたち捕虜三人を指名した。

JOAK は選抜した一〇数人で「前線班」を組織し、班長の満潮（みつしお）英雄（一九〇六年ごろ～八八年）は番組名を「ゼロ・アワー」――軍隊用語で「突撃の時間」を意味する――と命名した。番組冒頭の勇壮なマーチで緊張感を高めた直後、軽快な音楽や軽妙なアドリブへと切り替える落差で、聴取する米軍将兵を引き付けようとした。

恒石は現実主義者だった。放送は伝単と違って後に残らないから、聴いてもらえなければ意味はない。だから米軍将兵にダイヤルを合わせてもらうために必要なら、建前や前例にこだわる気はなかった。こうして「勇ましい」JOAK では考えられない新番組が始まった。放送現場の空気を、満潮はのちにこう振り返っている。

> この番組には、［中略］戦況ニュースも入れたが、できるだけ客観的に、日本的色彩を押さえたものを流した。正直なところ、こちらは実際に負け続けているのだから、からいばりしても相手には通じなかったからだ。［中略］ニュースが主だから、どうしてもナマ放送になる。放送開始の二時間ほど前から準備をはじめ「きょうはこんなところでいこうや。」と第五スタジオにはいる。当時のことだから、ほんとうなら原稿はみな事前検閲をうけないといけないが、恒石少佐は「君たちに一切まかせる。ア

35　この意見書について、前述の北山節郎は次のように述べている。「これは、日本の対敵放送に関する最も本質的な批判と、日本人の英語ニュースと解説に対する基本的な技術指導という二面を持ち、今日に於ても通ずるものをもっている。しかし、ラジオ東京が、この二人のアドバイスを生かしたかどうか。［中略］このカズンスの『意見』は、真摯であり、勇気がある。放送のプロとしての経験をもとに、日本の放送の欠陥を鋭くえぐり、しかし、捕虜の身でありながら、何ら迎合するところがない」（前掲書）。

チラ式にしかるべくやってくれ、原稿を見たってオレにはわからん。」といってすべてを一任してくれた。まったく物わかりのいい軍人だと思って敬服したものだ（『昭和史の天皇　三』）。

メンバーの放送内容が不適切だと問題となり、番組責任者の恒石が「監督不行届（ふゆきとどき）」で重謹慎三日の処分を受けたことがあった。それでも彼は「前線班」の二世や捕虜[36]、海外留学経験者、女性[37]に一貫して任せ、自由にやらせた。とはいえ、恒石は放任していたわけではない。メンバーのひとりをカズンスと自分との連絡役に据え、運営の要点は押さえていた。

†米兵を魅了した新番組

「果たして米軍将兵が『ゼロ・アワー』を聴くだろうか。」という放送開始前の恒石の危惧は杞憂に終わり、放送の成功を伝えるニュースが次々に届いた。駐独日本大使館からは、参謀本部に賛辞と激励の電文が送られ「ゼロ・アワー放送はドイツから英国に向けて行っている謀略放送以上に成功しつつあるらしい。アメリカの戦線でもよく聞こえる所とそうでない所があり、［北太平洋の］アリューシャン方面では聞こえが悪いとこぼしているそうだ。」と伝えた。満潮班長は、サンフランシスコ放送がゼロ・アワーに難癖をつけているのを耳にし、放送が前線の米軍将兵を完全に魅了したと確信した。こうした状況は、米国の主要紙でも現地特派員電として報じられた。

ラジオ・トウキョウと日本軍の空襲のおかげで、当地の夜はさほど退屈ではない。東京はゼロ・アワーと呼ぶ番組をガダルカナル島付近に向けて送信しているが、米兵たちは自分たちに同情し、気の毒がってくれるこの放送を大いに気に入っている（『心理作戦の回想』）。

“Between the Tokyo radio and Japanese bombers, the nights are not always dull here. Tokyo has been beaming a program called “the zero hour” direct to the Russell islands and Guadalcanal. The fellows like it very much because it cries over them and feels so sorry for them”（『ニューヨーク・タイムズ』）.

36　情報局の宮本吉夫・放送担当課長は、前述の「捕虜の声」などを対米放送する際には、「……一切政治的な発言をすることは認めず、もっぱらその家族、友人、恋人等に対する個人的な呼びかけのみに極限した。」と述べている（『NHK 戦時海外放送』）。
一方、恒石も「ヒューマニティ・コールズ」など参謀本部が関係する番組で捕虜の声を紹介したが、その位置づけは異なっていた。彼は次のように回想している。「このメッセージは［中略］その家族達に届ける懐しい便りであって、人道的にみても立派なサービスである。しかしながらわれわれは彼等の家族達を喜ばせ勇気づけるのが目的ではない。このメッセージをサンドイッチの中の肉やチーズとして、そのまわりは反戦的な雰囲気をかもすパンの切れで取巻かなければならない。どうしても食べたい聞きたいものが含まれている以上、嫌な部分を取り除くわけにはゆかなかったと思う」（『心理作戦の回想』）。

37　情報局の奥村喜和男次長は、衆議院予算総会で次のように答弁した。「……女の声というものには迫力がなく、威勢のいい大戦果の発表や敵をギャフンとやっつけるための気合がこもらなくてはならぬ対敵宣伝には適はしくないようで［中略］女放送員［アナウンサー］を使わないことにしています」（『朝日新聞』）。

こうした反響は、撃墜され捕虜となった米軍パイロットへの訊問などによっても裏付けられた。
恒石は後年、ゼロ・アワー成功の要因を次のように語っている。

> アドリブが非常に気がきいて、向こう［米軍将兵］の今痛いところを突き、しかも面白くやる。そこに相当惹かれたようですね（「恒石重嗣元陸軍中佐の回想」）。

さらに、戦前からJOAKが蓄積していた良質なレコードや、先に述べた傍受機器による米国のローカルニュースを流したことも大きかったとしている。この点は、前掲『ニューヨーク・タイムズ』の見出し――「日本のラジオが故郷の話題でガダルカナルにいる兵士の士気を下げようとしている（”Japanese Radio Attacks Morale of Men on Guadalcanal with Tales of Home Folk”）」（筆者訳）――からもうかがえる。
さらに恒石は、満潮班長の存在も欠かせなかったと述べている。

> 満潮さんの人柄のおかげで捕虜の人も次第に協力するようになった。でっぷり太って、見るからに温厚、それでいて頭がきれる。こういう満潮さんに捕虜も敬服し、放送が成功した（『週刊新潮』）。

放送の成功を受け、JOAKはゼロ・アワーを拡張した。
米軍将兵は、この放送をゼロ・アワーではなく、女性アナウンサーにつけた愛称「東京ローズ」の名で呼ぶようになった。戦後の「東京ローズ」裁判では、二世のアイバ・戸栗が反逆罪で有罪判決を受けている。JOAKでタイピストをしていた彼女がアナウンサーとしてゼロ・アワーに加わったのは一九四三年一一月であり、それ以前にも米軍将兵の間で「東京ローズ」という呼称が用いられていた可能性がある。当時、英語を話す女性アナウンサーは複数おり、その中でもジューン須山芳枝[38]が知られていた。つまり「東京ローズ」は特定の人を指す固有名詞ではなく、米軍将兵がゼロ・アワーを放送した女性アナウンサー一般につけた呼び名だったとみられる。

38　恒石は次のように述べている。「女性では美貌美声で、その美貌が災いして終戦後接近した米兵のジープで事故死したジューン須山芳枝さんやルース早川寿美さん達も加わった」（『心理作戦の回想』）。

第五章　対米謀略放送とウィリアムズの拒否

一九四三年、戦局は枢軸国に不利に傾いた。同年九月、イタリアが無条件降伏する。太平洋諸島でも日本軍守備隊の玉砕が続き、参謀本部は休戦の可能性を探り始めた。こうした情勢の下、宣伝担当の恒石参謀は、『ラジオ・トウキョウ』で繰り返される米大統領への過激な批判を抑え、捕虜が母国に平和を訴える謀略番組に着手した。そして、ウィリアムズの予期せぬ拒否に直面する。

†『ラジオ・トウキョウ』の論調抑制

恒石と陸士同期で参謀本部第二部の同僚・大屋角造は、当時の部内の空気をこう回想している――「決定的勝利の見込みはすでに無く、いついかなる形で終戦に導くかが、大本営の指導幕僚、特に米英課関係者の底流をなしていたことは否めない。」

西課長の下、恒石は米国民の間に厭戦世論を醸成し、自国政府への批判を強めさせようとした。恒石は筆者との面談で「ベトナム戦争のときにアメリカ国内で起きたような反戦運動が、太平洋戦争中の米国でも起きることを期待していた。」と語っている。

そのため恒石は、(1) 対米放送における無用な挑発――米国大統領への誹謗・中傷――の抑制と、(2) 捕虜が母国へ休戦を訴える謀略番組の実現に取り組んだ。

対米放送の挑発的なアナウンスについて、JOAK 国際局のチーフ・アナウンサー、平川唯一[39]（一九〇二～九三年）は、次のように批判している。

> 米国民の間に政府批判を起こさせようと考えるなら、まず大多数の米国人がルーズベルト大統領を絶対的に支持していることを忘れてはならない。日本人から見ればルーズベルトは最も悪性の野心家であり、人類の敵と映るため「大嘘つき」「吸血鬼」「悪魔」といった強い言葉で非難すれば胸のすく思いがする。しかし問題は、それを聴く米国人の心にどう響くかである。もし敵が我々の東条首相を同じように罵倒したとしたら、どんな印象を受けるかを考えてみればよい。戦争中だからといって、我々日本人が日本人として感じることをそのままマイクに向かってどなり立てても、宣伝戦に勝つことはできない。効果的な宣伝とは、威勢よく敵を罵倒するようなものではなく、むしろ冷静で説得力のあるものでなければならない。語る側が胸のすく思いをするような内容は、宣伝としては概して落第であることを肝に銘じねばならない（『放送研究』、要約）。

---

[39] 岡山県出身の平川は渡米してワシントン大学演劇科を卒業し、ハリウッド映画の出演歴もあった。一方、JOAK のほとんどのアナウンサーは放送の専門訓練を受けることなく採用され、すぐマイクに向かっていた。なお、ラジオ・トウキョウでニュースを読む平川の声が、米国で録音・保管されている（国立国会図書館蔵『駿河台分室物語【資料編】』添付 DVD に収録）。

この「威勢よく敵を罵倒する」アナウンスこそ、帰国した西大佐が批判したラジオ・トウキョウの「生硬」さであろう。

先に触れたカズンスの「意見書」でも「熱心なる戦闘的な日本人解説者」によって書かれた「恫喝、誹謗、個人に対する攻撃等は、敵国人の態度を硬化させ、彼らの決意を昂揚するのみ」であり「宣伝放送の最も肝要事を忘却している」と批判していた。

しかし、この問題で厄介だったのは、JOAK を指導・監督する情報局首脳が――ヒトラー総統の演説に魅せられたのか――こうした攻撃的アナウンスをむしろ好んでいたことである。

そして恒石が所属する軍の内部にも、同様の風潮が強かった。彼は「とかく日本軍の欠点として、いたずらに勇壮なる文章を書くことによって事足れりとする傾向があった。」と述べている。こうした状況では、アナウンサーの論調抑制は慎重に進めざるを得なかった。

そして翌一九四四年三月になって、海外放送原稿の事前検閲機関である「英文放送事前監査室」が設置された[40]。

きっかけはいずれも、JOAK アナウンサーの失言と、それに対する米国側の皮肉である。そのひとつは、小児マヒで足が不自由だったルーズベルト大統領を「足萎え」と呼んだことであった。これに対し米国の放送は、大人が子供を諭すような口調でこう応じた。――「大統領の政策を批判するならともかく、いくら戦時中でも個人的なことを言うものではないよ。」

この発言が各省連絡会議で問題になり「武士道を誇る日本人がくだらない個人攻撃をするとは何事か。」とアナウンサー非難の声が上がった。さらに、大本営発表の戦果ニュースで「駆逐艦四隻」撃沈とすべきところを「戦艦四隻」と誤訳して放送し、米国側から「海戦に参加していない戦艦まで沈めたそうだ。これだから日本の放送は信用できない。」と皮肉られ、海軍を憤激させた。

こうして新設された英文放送事前監査室は情報局の所管で、板橋並治（のちの日米会話学院院長）を室長とし、大本営陸海軍部、外務省、大東亜省の嘱託で構成され、軍人はひとりもいなかった。当時、放送関係者の間で「恒石少佐が JOAK の一室で放送を全面的に指導している。」という噂が流れた。だが恒石は自著で、放送にかかりきりになるほどの時間的余裕はなかったと否定している。それでも、こうした噂が自然に広まるあたりは、情報と謀略を担う参謀本部第二部の性格をよく示していた。

†対米謀略放送に着手

時期はさかのぼるが、一九四三年五月ころ、西課長は宣伝謀略の目的で民間人と接触するため、赤坂山王ホテルに秘密の部屋を手配した。そして外務省 OB で、元アメリカ局第一課長の藤村信雄（一九〇〇～六五年）を招き、米国向け謀略放送の準備を委嘱した。

さらに西は、対米放送のために新設する施設へ、伝単作成など他の宣伝部門も集約し

---

40 情報局へ出向していた前述の並河亮は「…逓信省は、NHK 国際局から届く放送原稿の事前検閲を続ける義務を負わされていた。」と述べている（『NHK 戦時海外放送』）。逓信省と英文放送事前監査室との役割分担について、筆者は未調査である。

「対敵謀略宣伝センター」とする構想を示した。これは、第一次世界大戦で対独戦を勝利に導いた英国の宣伝組織クルーハウスをモデルにしたとみられる。同年八月に開かれた参謀長会議では、八課が配布した資料のページの七割が、クルーハウスの説明に充てられている[41]。

また、同月、戦前の翻訳書『英国の宣伝秘密本部―クルーハウスの秘密』が再版された。同書は冒頭で「宣伝とは一体いかなるものであろうか。宣伝とは、他人が影響を受ける様に、事件を陳述することを言う。」（“What is propaganda? It is the presentation of a case in such a way that others may be influenced.”）と、簡潔かつ実践的に定義している。

参謀長会議と出版の時期の一致から、恒石がこの動きに関与していた可能性が高い。彼はこの本を通じて各部隊の参謀長に、宣伝が第一次大戦で英国を勝利に導いたこと、そして英国の軍人は「いたずらに勇壮なる文章を書く」ことで満足していなかったと伝えたかったのであろう。

恒石は対米放送のため、国内外の収容所に対し、宣伝に適する捕虜の報告を求めていた。彼は参謀長会議の後、選抜した五三人を、東京の大森収容所へ送るよう指示した。

†池田徳真

山王ホテルで準備を続ける藤村信雄の人脈を通じ「対敵謀略宣伝センター」の人材が次第に集まった。肝心な対米謀略放送の主任候補に、外務省嘱託の池田徳真（一九〇四～九三年）の名前があがった。彼の父・池田仲博（一八七七～一九四八年）は徳川慶喜の五男で侯爵、旧鳥取藩主池田家の当主であった。

池田徳真は著書で、この放送と関わることになった経緯を詳しく記している。彼は東京帝国大学文学部を卒業後、オックスフォード大学に学んだ。英国で知り合った外務省の樺山資英（一九〇七～四七年）の誘いを受け、オーストラリア・メルボルンに新設された日本公使館へ文化宣伝担当として赴任し、開戦を迎えた。

> そこで考えた。戦争勃発の日に敵国に居るなどということは、一生のうちに二度とはあるまい。一つ敵国というものを、散歩して見ようということであった。それで帽子を目深にかぶり、レイコートの襟を立て――オーストラリアは夏だったのだが――コリンズ通りを下って、スワンソン通りとの四つ角にいって新聞を買った。急ぎ足で道行くオーストラリア人の顔は、異様であった。それから曲って、スワンソン通りをフリンダース駅の方に行ったのだが、人びとの顔があまりに恐ろしいのでこわくなり、公使館に逃げ帰った。そして、この日から八カ月にわたる公使公邸での抑留生活がはじまった（『日の丸アワー』）。

一九四二年一〇月、池田は日英交換船で帰国し、外務省へ挨拶に行った。ラジオ室の樺山資英室長が喜び「いいときに帰ってきてくれた。ラジオ室で働いてくれ。」と、即座に手続をとった。そこでは、二世たちが海外の短波放送を傍受して謄写刷を作り、内閣や陸海

41　一九四三年七月、西課長は新任務を帯びてベルリンに向かい、その後は恒石が計画の中心となった。西が搭乗した新開発の長距離機は、シンガポールを離陸後、行方不明となっている。

軍はじめ各省に配布する仕事をしていた。池田は樺山らとニュースを分析し、外務省が育成した二世による対米放送の原稿作成を指導した。

そうした日々を送るうち、池田は対敵宣伝放送の姿勢が米ソ英独など国により大きく異なること、宣伝に携わる者たちでさえ、この重要な事実を見逃していることに気が付く。そして、日本の放送は「理論も、組織も、統一した方針もなくバラバラで、敵国の宣伝態度に比べて、はるかに見劣りする。」と痛感した。そこで池田は、第一次世界大戦のプロパガンダに関する書物を神田の古本屋で買い集めて研究を始め、翌年五月ごろ「対敵宣伝放送の原理」と題した報告書にまとめ、樺山室長に示した[42]。

この報告書には、先にふれたカズンスや平川唯一がラジオ・トウキョウのアナウンサーに向けて行った批判と同様な指摘が記されている。

「宣伝だからと言って愛国心を十二分に発揮して、始めから終りまでルーズベルトやチャーチルの悪口を言って宣伝になっていると思うのは甚だしい間違いである。国内で敵愾心を充分に現わすことは誠に結構なことであるが、対敵宣伝に敵愾心を露骨に示す如きは、宣伝の何ものかを全然理解していない証拠である。」

池田はこの報告書を、日本の放送の改善を促す警鐘のつもりで書いたのだが、それは想像もしなかった世界へ彼を導くことになる。

一九四三年九月の中ごろ、樺山が話があると池田を別室に誘い、こう話した。「参謀本部第八課では、ゼロ・アワー放送につづいて、捕虜集団を使って対米謀略放送をすることを計画している。それで担当の参謀から、誰かじっさいに捕虜を使ってアメリカ西部に向けて放送することのできる人を、推薦してくれという依頼があった。君やらないか。」

あまりに奇想天外なことで、池田は二、三日考え込んだ。世界にも例のない試みであり、捕虜にやらせるという自身の能力をはるかに超える難事業だと分かっていた。しかし、戦時下の非常事態である。加えて、オックスフォード大学留学中に「指導者は他人にできないことをしろ。」と繰り返し叩き込まれていた。池田は応じる決心をした。

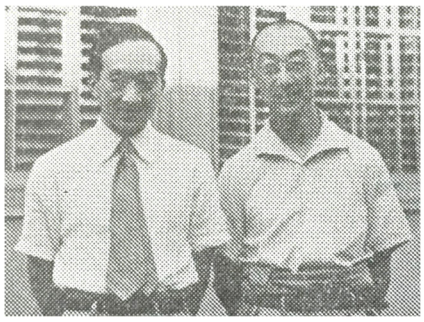


図６　池田徳眞（右）と樺山資英
出典：『プロパガンダ戦史』

[42] 池田徳眞『プロパガンダ戦史』（中公新書、後に中公文庫）巻末に、「対敵宣伝放送の原理」が収録されている。池田が徹底的に熟読・研究したという三冊の中に、先に挙げた『英国の宣伝秘密本部』があった（戦前、内閣情報部が部内用に「情報宣伝研究資料」として印刷したもの）。

†山王ホテル

九月下旬、池田は山王ホテルを訪れた。指定された部屋は奥まった、ちょっと誰も気付かない場所にあった。長身で赤ら顔、眼鏡をかけた藤村信雄が待っていた。藤村は池田に、捕虜による対米謀略放送の企画、捕虜の選考、放送の実施を頼みたいと、快活に切り出した。

数日後、池田は同じ部屋で恒石重嗣少佐と会った。若い、穏やかな口調の人物だった。恒石は池田に、五三人の捕虜の姓名と、階級、年齢、国籍、戦前の職業などが記された横長の表を渡して言った。――大部分は、すでに東京俘虜収容所（大森）に収容されています。放送利用の意図は隠して、この中から一五人から二〇人ほど役に立ちそうな者を選んで下さい。あなたの名は収容所に通知してありますから、いつでも入れます。信用できる人物なら、誰を同行しても差支えありません――。説明は簡単明瞭だった。

部屋を出た池田は、両肩にとてつもなく重い責任を感じた。こうして捕虜選考の仕事が始まった。

ラジオ室に戻ると、樺山が恒石少佐のことを話した。驚くべきことに、第八課の六、七人の参謀の中で最も若い恒石が、敵国に対する広範な謀略と、相手側の謀略への対処を一手に担っていた。彼は敵の放送に関するあらゆる事柄を調査・検討して上席者に報告し、同時に JOAK から発せられる短波放送のすべてを陸軍の立場から監督していたのである。こうした一般任務に加え、ゼロ・アワーや捕虜による解説放送、「淡路事務所」での伝単製作など、多くの謀略活動にも従事していた。

樺山は付け加えた。「恒石少佐は、ほかの陸軍将校と比べれば謀略をはるかによく理解している[43]。彼のような将校を見つけることは、まず不可能だ。」

池田は突如、とてつもなく忙しくなった。考えるべきことは次から次へと押し寄せる。捕虜はどう選ぶか。彼らはわれわれのために放送をするだろうか。協力の限界はどこまでか。放送番組の構成をどう仕立てるか。敵国民の戦時心理を研究せねばならぬ。謀略宣伝の「弾丸」を探せ。戦時宣伝の本をすべて買い集めろ。――そして結論は「捕虜放送の宣伝方針は何か」であった。

筆者が話を伺った際に録音した池田の肉声が、国立国会図書館に残されている。

> 即決即断のものが非常に多いんです。何が正しいか正しくないかなんて、そんなことは分かりゃしない。僕はクリスチャンで英国のことを知っているから何とか切り抜けてこられたが、えらいことをしたもんだと思う。こんなに働いた一〇〇日は［ない、毎日］四時間くらいしか寝てない。そりゃあ、寝てるひまなんてないですよ（「池田徳真（のりざね）氏の回想」）。

43　恒石は、参謀長会議で宣伝組織クルーハウスを紹介したことからも分るように、英国の宣伝を高く評価していた。国立国会図書館に保存されている彼の録音には「仕事柄、各国の放送を聴いたが、最も信頼できたのは英国の BBC だった――」という言葉が残されている。

†捕虜との面接開始

太平洋戦争の激化による将兵の動員で国内の労働力が不足し、これを補うため南方から捕虜が送られ、新たな収容所が設けられた[44]。池田が捕虜を選ぶため向かった大森収容所もそのひとつで、現在の大田区平和島の競艇場付近に開設された。大森の海岸と収容所のある人工島の間の水路には幅二メートルほどの仮橋が架けられ、橋の脇に細い水道管が通されていた。

放送の成否は選別する捕虜で決まると池田には分かっていたが、手引書はなく、経験者もいなかった。初めて収容所を訪れた彼は、水路に浮かぶハゼ釣り舟の群れを見て、幼いころ兄弟姉妹とこの辺で遊んだことを思い出した。橋の上で立ち止まり、しばし任務も戦争も忘れて見入った。米軍の空襲が始まる一年前のことで、まだ平和そのものの光景であった。

しかし人工島に渡り、野菜畑を抜けて一歩収容所に入ると、空気は一変した。そこには戦争の現実があった。所長との面談を終えた池田は、まず捕虜の居住施設を視察した。

小さな絵が飾られた狭い応接室に、呼ばれた捕虜が順に入ってくる。彼らは神経を張り詰め、疑わしげな目をしていた。池田は率直な反応を引き出すため、穏やかな態度で接した。緊張を伴う駆け引きであった。初回の面接では、ひとりにつき一〇～二〇分ほど、故郷や家族、趣味、戦前の職業などを話題にして観察を続けた。そして候補と見なした捕虜には「どこでどうして捕虜になったのか」「戦争をどう思うか」といった題を与え、明後日までに短文を書くよう求めた。

面接を重ねるうちに、池田は「捕虜になったこと」に対する英国人と米国人の考え方の違いに気付いた。英国人は日本人と同じく、捕虜となるのを恥と感じ、どこか敵意をにじませていた。これに対し米国人は、全力を尽くして戦って捕虜になったのだから仕方がないと考えるらしく、池田の質問に最初から率直に答えた。ある米国人捕虜は東京へ護送される前、収容所の二世の通訳から「宣伝のような仕事をさせられるらしい。」と聞かされた。不安を抱いて将校捕虜に相談すると「やるか、それとも死ぬかということなら、日本軍の要求に従うしかあるまい。」と答えたという。大岡昇平が『俘虜記』で米兵について「こうした民間の延長として直ちに戦い得るならば、確かにこれは最善の軍隊である。」と記したのは、このような考え方を指しているのかも知れない。

†駿河台・文化学院

文化学院は、国電御茶ノ水駅から神田方面へ下る坂を、現在の明治大学の手前で右折した先にあった。入口のアーチをくぐると、中庭を小さな校舎が取り囲み、総面積はわずか五〇〇坪だった。授業料は年一二〇円と高額で、当時最高といわれた慶応義塾大学をも上回っていた。学院では芥川龍之介や小林秀雄ら一流の講師陣が指導に当たり、後に文学・音楽・演劇など幅広い分野で名を成す人々を送り出した。日本で初めてとされる男女共学を実践し、個人を尊重する自由主義的な教育方針でも知られていた。しかし、創立者・西村伊作（一八八四～一九六三年）は一九四三年四月、不敬罪などの容疑で拘禁され、学院

---

44 「国内の捕虜収容所の組織はたびたび改編され、大戦期間中に開設された本所・分所・派遣所・分遣所などは約１３０ケ所に及ぶ」（POW 研究会ホームページ）。

も東京都から同年八月三一日限りで閉鎖を命じられた[45]。

恒石は「幸い駿河台にあった文化学院［中略］は休校中で、校舎が使われていなかった。さっそく所有者の西村伊作氏に交渉してこれを借り受けることができた。」と自著に記している。西村は、自伝で次のように回想している。「ある日私は拘置所の特別の面会所へ連れられて行った。そこには陸軍の参謀本部から来た人がいたし、私の弁護士もいた。それは私の閉鎖された文化学院の建物を陸軍の方へ貸せ、という交渉であった。私は閉鎖されているのであるから貸してもいいと承諾した。」――恒石の記述を読むと、あたかも偶然文化学院の閉鎖を知り、九月以降に弁護士を介して西村と借上げの交渉をしたように聞こえる。しかし、恒石の管理下で伝単を製作していた漫画家・太田天橋は、戦後、次のように述べている。「昭和一八年七月［つまり夏休みのころ］、参謀本部は駿河台の文化学院を接収して、宣伝、謀略の仕事を組織的にやることになった」（太田天橋「私がマンガ伝単の元祖だ」）。

†開所式

一九四三年一一月三日（明治節の祝日）、対米謀略放送を中核とする対敵謀略宣伝センターの開所式が、文化学院中庭で行われた。表札は正式名称の「参謀本部駿河台分室」ではなく、外国人が出入りしても周囲の住人に怪しまれぬよう「駿河台技術研究所」と記されていた。この日、池田には「駿河台技術研究所研究員を命ず　年俸金三千円を支給す」という辞令が交付された。

秋晴れの下、参謀本部第二部長・有末精三少将はじめ第八課の参謀、藤村所長や池田以下一五人ほどの所員が参列し、写真撮影の後、冷酒とスルメで前途を祝した。

軍人たちは戦闘帽に肩章、日本刀を帯び、陸軍の権威を誇示していた。東条英機首相の信任が厚い有末少将は上機嫌で、参謀や藤村所長と声高に談笑していたが、心は開所式よりも首相官邸に向かっていたと、池田は記している。

一一月五、六の両日、大東亜会議が東京で開かれる。参加各国の代表が続々と羽田飛行場に降り立ちはじめており、事前会議が首相官邸で予定されていた。この〈史上初のアジア・サミット〉は、大東亜戦争の目的を世界に示す絶好の機会であり、宣伝を所管する参謀本部第二部長の有末少将が重要な役割を担うことになる。

開所式を終えた駿河台分室（通称「分室」）の組織図には、対米放送を担当する放送部をはじめ、それまで神田のビルで秘かに伝単を製作していた「淡路事務所」が移転して伝単部となっている。さらに、対ソ謀略を研究していた「九段事務所」の職員が企画部に加わった。放送部はまだ池田ひとりであったが、企画部には藤村所長、池田をはじめ、後述する演出家の朽木綱博（一九〇五～六三年）、森野正義（一九〇八～不詳）、勝野金政（一九〇一～八四年）たちが所属した。

日系二世の森野はカリフォルニア大学で政治学博士号を取得して一九三九年来日し、外務省情報部に勤務した。学生時代は米国西海岸のボクシングの学生チャンピオンだったと

45　文化学院の閉鎖に伴い、二人の学生が千代田女子専門学校へ転校したという。杉本苑子（一九二五～二〇一七年。小説家・文化勲章受章者）はこうした経緯を知り、戦後、同校を中退して文化学院に入学した。

いう。森野によれば、藤村は若いころニューヨーク領事を務めた米国通で、西大佐も陸軍には珍しい米国通だった。この二人の下なら働き甲斐があると思い、参加したという。

勝野はパリ大学留学中にフランス共産党に入党し、その後ソ連に入国してスパイ容疑により逮捕され、強制労働を経験した。帰国後、参謀本部嘱託として九段事務所設立に参加した。太平洋戦争開戦後、日本はソ連と戦う余裕はなくなり、九段事務所は閉鎖され、所属していた職員は駿河台分室に編入された。池田は企画部の協力を得ながら対米放送の準備を進め、森野からは米国事情を、勝野からはソ連共産党の宣伝と謀略を学んだ。

ゼロ・アワー放送に従事していた外国人捕虜カズンスとインスも、対米放送開始後に宿舎のホテルから移され、分室の捕虜棟から JOAK へ赴いた[46]。

分室では、対米放送や伝単作製の参考とするため、各界の著名人を招いて頻繁に講演会が行われた[47]。会場は所長室が使われ、司会は池田が務めた。講師は新聞社や通信社などの海外事情に通じた人々のほか、作家や将棋名人といった様々な講師が招かれた[48]。

さらに銀座の東宝試写室で映画『風と共に去りぬ』が上映された。戦前の日本には輸入されなかった作品だが、南方軍がシンガポールで押収したフィルムを、恒石参謀が東京に送らせたものである。米国へ行ったことのない池田[49]は「感覚を研ぎすまして貪るようにこの映画を見た。」作品は参謀本部の印刷物を製作していた東方社にも「対敵研究資料」として貸し出され、後には駿河台分室で捕虜の娯楽用として上映された[50]。

図７　文化学院中庭
筆者撮影

46　もうひとりのレイズは、一九四三年一〇月のフィリピン独立により、捕虜の扱いではなくなった。

47　戦時中、軍の要請に応じなければ国賊扱いされ、社会的活動にも支障をきたした。伝単を製作していた漫画家・那須良輔は、陸軍美術協会が協会に忠実でない画家を国賊と見なし、カンバスや絵具を支給しなかったと述べている（『日本週報』）。戦後、軍に協力した人々は「戦争責任」を追及され、履歴に軍への協力の事実を残さない例もある。

48　推理作家・江戸川乱歩の資料には、駿河台分室の「対敵宣伝研究会議」で講演した際、藤村信雄所長から届いた礼状が残されているという。

49　英国留学の帰途に立ち寄るつもりだったが、季節は冬に向かっており、英国で生まれた二人の娘の健康を案じた妻の強い反対に折れた。そして往路と同じインド洋経由で帰国した。

50　上司の許可を得て分室の女子職員も捕虜とともに鑑賞した。日本語字幕はなかった。

†ウィリアムズの東京移送

海外からの捕虜護送は到着日が不確かだが、国内の捕虜については、駿河台分室の開設日に到着するよう、あらかじめ指示が出ていたらしい。恒石が池田に渡したリストには善通寺収容所の六人の名が記され、本人たちに移送が告げられると収容所内ではさまざまな憶測が飛び交った。

一九四三年一一月一日の午後遅く、ウィリアムズやヘンショーたち六人は私物を持って管理棟前に整列した。何百人もの仲間に見送られ、衛兵と朝吹通訳に伴われて収容所の門を出た。多度津から連絡船で瀬戸内海を横断し、対岸の広島県尾道市の向島収容所で一泊した。

一行のひとり、米陸軍のカルプフライシュ中尉の手記にはこう記されている――善通寺を出発する際、ウィリアムズは英国人の同僚から「途中の収容所で同胞が困っていたら渡してくれ」と現金を託された。彼が向島の捕虜に金を手渡したことを衛兵は知っていたが、問題にされなかった。参謀本部の命令で東京へ護送される「特別の捕虜」だったためだろうか。

向島収容所で四人の捕虜が合流し、計一〇人となった。翌日の午後、彼らは尾道駅から列車に乗せられた。車中の会話は禁止されていた。

翌三日の朝、一行は東京駅に到着した。小銃を携えた衛兵に先導されて身動きの取れない混雑を抜け、待機していたトラック（木炭車）で国道一号線を南下し、大森収容所へと運ばれた。

ヘンショーが筆者に宛てた手紙には、旅の途中でウィリアムズに助けられたことが記されている。彼の背負った袋は、善通寺で仲間から餞別にもらった赤十字の缶詰で重くなっていた。途中、長い距離を歩いた時、持病のぜんそくの発作を起こして倒れそうになった。すると、ウィリアムズが身体を支え、荷物を持とうと言ってくれた。おかげで、どうにか大森にたどり着けたという。ウィリアムズも自分の大きな荷物を持っていたはずで、相当な体力の持ち主だったことがうかがえる。

英海軍将校ブッシュ（Lewis W. Bush、一九〇七～八七年）は戦前に来日、日本女性と結婚し、旧制弘前高校・山形高校で英語を教えた。芥川賞作家・火野葦平の作品の英訳ほか、日本に関する著作も多い（戦後「第二の小泉八雲」といわれた）。一九四〇年に離日して英海軍に志願し、太平洋戦争開戦直後に香港で捕虜となった。所属部隊とともに日本へ移送されたが、新潟の収容所に到着した直後、彼だけが東京へ護送され、一九四三年九月四日、大森収容所に収容された。彼はウィリアムズについて、次のように記している。

> 太平洋の英領ギルバート、エリス両群島の司政官をしていた、ジョージ・ウィリアムズという男も入って来た。［中略］快活できかん気ですこぶるエネルギッシュな人物だった（『おかわいそうに』）。

大森収容所では、捕虜宛の郵便物が分類・発送されていた。遅配を少しでも緩和しようと、暗号解読を専門とする英陸軍少佐が日本国内の捕虜名簿を作成し、手書きの宛名を判読していた。ウィリアムズが善通寺収容所の捕虜名簿を届けると、彼宛の郵便三通を手渡してくれた。

同じ列車で東京へ来た米陸軍のフジタ（Frank Fujita、一九二一〜九六年）軍曹は、日系二世の画家だった。ジャワ島で捕虜となって以来「自分はテキサス人だ。日本人ではない。」と言い張るので、日本兵から絶えず殴り倒されていた。大森でも、悪名高い渡辺睦裕（一九一八〜二〇〇三年）軍曹からひどい仕打ちを受けたが、家族からの郵便をもらって元気を取り戻した。

池田はウィリアムズとの面接を次のように回想している。

> 不屈の精神がはっきりと分かる、典型的なジョン・ブルの顔をした有能な人物に見えた。最初のうちは質問に答えたくなさそうだったが、私が英国での経験を話すと会話をするようになった。最終的に彼は「どのようにして捕虜になったか」という題で短い文章を書くことを約束した。日本陸軍は彼に少尉待遇を与えていたが、英国植民地省に勤務する文民だった。しかし、このグループにいた本物の将校の誰よりも彼は少尉らしく見えた（『駿河台分室物語』）。

マキン島で海軍が作成した捕虜名簿には、ウィリアムズが「ケンブリッジ大学卒業」と記されており、恒石の名簿にも同様の記載があったと考えられる。本人もそう語ったが、池田は信じなかった。彼の常識では、太平洋の小島に高学歴の行政官が駐在しているとは思えなかったのである[51]。ウィリアムズが大森収容所へ到着した一一月、彼のいたマキン島とタラワ島に米軍が上陸し、四日後に両島の日本軍守備隊五四〇〇人が玉砕した。池田は彼に、初めて聞く島の事情を尋ねた。

捕虜の到着は続いた。ブッシュによれば「英本国ランカシア連隊のマックノートン（John McNaughton）大尉（ママ）は、朝鮮の収容所から軍楽隊の一部を引き連れて入所して来た。［中略］出征前は俳優であり、英国で有名な喜劇役者ガス・マックノートンの息子である。」ウィリアムズも筆者宛の手紙に、彼らが楽器を携え、指揮者まで伴っていたことに驚いたと記している。

マックノートン中尉との面接の際、池田は演技の適性を確かめようと、実弟で松竹少女歌劇や日劇ダンシングチームの演出家である朽木綱博[52]を伴った。

放送開始までに大森収容所に到着した捕虜は四〇人で、当時の収容者の一割を超えた。彼らは池田の面接に備えるため、下士官・兵でも品川駅の荷役には出されず、事情を知らない捕虜たちから不思議がられた。

こうして池田は、計一〇回にわたり大森収容所を訪れ、恒石参謀に報告した。放送に使う一四人[53]の捕虜は、その場で一五分ほどで決定した。池田は参謀本部式の超省力主義だ

---

51 同様な誤解が英国側にもあったことを、ビルマ（現・ミャンマー）で捕虜生活を送り、のちに京大教授となった会田雄次が記している。「私はほんの少し英語ができ、ときどき［英軍の］通訳めいたことをやらされたので、二、三の将校に、お前は何者だと質問された。『京大を出て、あるカレッジの講師をしている』というと、ウソを言うなと叱られるのが常であった。大学を出た男が兵卒であるはずがない。講師であれば中尉以上にはなる、お前はスパイ役か何かの特務工作員で英語の訓練をうけた男ではないか、と疑うのである」（『日本人の精神構造』）。

52 元の名は池田博久。旧福知山藩主・朽木家に入籍し、兄と同じく東京帝国大学に進んで美術史を専攻した。池田徳真の妻・美知子は、綱博の養父・朽木綱貞（一八七五〜一九二九年）の次女である。

53 池田は『日の丸アワー』で、不確かだと断りつつ「一三人」としているが、捕虜フジタの著書にある

と驚いている。恒石は一一月下旬から一二月初めまで――対米放送にとって最も繁忙で大切な時期に――仏印独立に伴う宣伝業務指導と連絡のため、急に現地出張を命じられていた。大東亜会議の余波であろう。

†遅れた捕虜収容

恒石の部下で警備担当の浜本純一中尉は、分室に寝泊まりしていた。池田は浜本に「捕虜の収容は、放送開始の一週間前にお願いします。」と依頼したが、新番組『日の丸アワー』[54]の海外に向けた放送開始予告が流れ始めても、捕虜は到着しなかった。浜本は、文化学院入口のアーチに取り付ける木の扉[55]を作る大工が見つからないためだと説明した。参謀本部に権力はあるが物はない。のちに池田は、権力と物力を厳密に分離していることは素晴らしいと感心するのだが、当時はリハーサルができず、苛立ちを隠せなかった。

こうした中、池田の提案で捕虜棟に盗聴器を設置する検討がなされた[56]。陸軍中野学校[57]出身の浜本中尉が技術者らしい男を連れて来て、藤村所長と池田に紹介した。中背で三五歳ほど、名前も所属も明かさず、軍人かどうかも分らなかった。協議はすぐ始まり、男は配置図を注意深く確認し「お望みなら、数日で設置できます。」と述べた。しかし、設置は見送られた。藤村所長は公明正大な性格で、こうした卑劣なやりかたに頼らなくても捕虜放送が可能だと考えた。浜本中尉は、捕虜が何を企てようと力ずくで服従させ、命じたとおり働かせれば十分だという考えだった。こういった二人を前に、池田もそれ以上盗聴器設置を主張する熱意を失った。

結局、捕虜の移送は一二月一日――放送の前日になった。その朝、浜本中尉と池田が分室をトラックで出発したとき、大工はまだ扉を作っている最中だった。冬空は晴れわたり、厳しい寒さの中、駿河台の丘から白い富士山がよく見えた。

「一四人」を採る。なお、池田は同書で恒石との捕虜決定を「一〇月下旬」としているが、一一月に到着したウィリアムズやマックノートンが選抜されているので、正確には一一月であろう。

54 『日の丸アワー』と名づけた池田自身、勇ましいが謀略性に乏しい番組名だったと認めている。一九四四年四月からは、恒石の意見で『ヒューマニティ・コールズ』に改題された。なお、当時の日本では短波受信には特別な許可が必要で、機器も市販されていなかった。したがって一般の国民は海外の短波放送を聴取できず、こうした日本発の海外放送についても知る機会はなかった。

55 元からあった鉄柵は、戦時中の金属供出で失われていた。

56 開戦前、池田が勤務していたメルボルンの日本公使館で、電話器に仕掛けられた盗聴器が発見される事件があった。

57 日本陸軍が、諜報・防諜・心理戦の専門要員を養成した極秘の学校である。陸軍士官学校や各兵科学校が教育総監部の系統に置かれ、陸軍大学校は参謀本部直轄の公然たる高等教育機関として設置されていたのに対し、陸軍中野学校は正規の教育制度の枠外に置かれ、参謀本部第二部を中心とする情報・謀略部門の統制下で運営された。教育内容のみならず、学校の存在自体も厳重に秘匿されていた（“教育総監”“陸軍中野学校”“陸軍大学校”ほか. Wikipedia）。浜本は「この［陸軍中野］学校の卒業生は、将来参謀本部第二部の「私兵」として使われるように運命づけられていた。従って学校における師弟関係が、将来そのまま実務の面にまで延長される仕組みとなっていた。」「陸軍大学校で兵学教官をつとめることもあるこれらの参謀将校も、中野学校での講義はいささか趣きを異にしていた。教官が自ら背広服に着替え、相対する学生も一様に背広服、長髪の将校ばかりである。しかも三十八名（私達第二期乙種長期学生の場合）の学生は全員が［陸士・陸大ではなく］民間の大学、専門学校卒業者ばかりである。」と述べている（『青雲白雲』）。

大森収容所では捕虜全員が整列するまでに小一時間かかり、鈴木所長の訓辞が二〇分続いた。その後、翌日からの捕虜の食事をめぐり、収容所の大尉と浜本中尉が言い争いになった。池田は自分が口を出せば「民間人が軍のことに干渉した。」と問題がさらにこじれることをよく知っていたので、黙って見守るしかなかった。やがて鈴木大佐が仲裁し、捕虜は正式に浜本中尉に引き渡された。

浜本が号令をかけて先頭を進み、捕虜が雑嚢（私物を入れる布袋）を担いで続き、最後尾を池田が歩いて仮橋を渡った。幌のないトラックの荷台に捕虜たちが乗せられ、浜本と池田は運転席横に座って、後方を監視した。

池田は運転手に、できるだけ東京の立派な通りを走るように頼んだ。JOAK の前を過ぎ、日比谷交差点を抜け、皇居の美しい堀沿いの道に入ると、反対側に大きなビルが並んでいた。捕虜たちの目は、敵国の首都・東京の中心を見た驚きに輝いた。

†到着と混乱

昼前に駿河台分室へ到着すると、大工の作業はほとんど進んでいなかった。もし完成まで捕虜の移送を遅らせていたら、予定通り放送できなかった――そう思うと池田はゾッとした。

中庭に入った捕虜は、驚いた表情で小さな収容所を見回した。やがて彼らはここを「BUNKA CAMP」と呼ぶようになる。

浜本中尉は整列を命じた。ひとりの捕虜が無断で列を離れて雑嚢を取りに行こうとすると、浜本はいきなり殴り倒して怒鳴りつけた。浜本の前では言動に細心の注意を払わねばならぬことを捕虜は悟ったと、ウィリアムズ回想している。浜本は雑嚢をコンクリートの地面に置かせ、ひとつずつ検査した。

浜本純一（一九一五〜九八年）中尉は和歌山県の出身で、甲子園大会に四番打者として出場した経験をもつ。一カ月前、上海から参謀本部に転任となり、陸軍中野学校同期の谷山樹三郎（一九一五〜二〇〇七年）中尉から分室の任務を引き継いだところだった。

参謀本部駿河台分室は、手本とした英国のクルーハウスに比べれば手狭で、東側の壁には病院が隣接していた。池田は、病院の二階の窓から数人の女性が分室の中庭を見下ろし、浜本中尉の私物検査を眺めているのに気付いた[58]。

検査が終わると、浜本はマックノートン、ウィリアムズ（英国）、カルプフライシュ、ヘンショー（米国）シェンク[59]（Nickolas Schenk、オランダ）の五人を捕虜棟二階の将校の部屋へ、残る九人を別の二室へ誘導した。捕虜棟右側の半地下の一室には、文化学院時代から勤めていた用務員の夫婦が住んでいた。捕虜たちは、収容所に女性がいることに驚きを隠せなかった。

昼食は担当の捕虜が数人で用意したが、初めてのことで手際よくはいかず、食べ終わるとすでに午後二時になっていた。池田がリハーサルのため捕虜三人を JOAK に連れて行こ

---

[58] 恒石は「近隣の日本人から捕虜優遇について文句が出ているという報告を受けた記憶がある」と記している。配給外のルートで入手した肉などを分室の調理場で焼くにおいが隣家に流れ、苦情を招いたのではないか。

[59] 池田はシェンクを「軍曹」としているが、フジタの著書に従い、 Adjutant（副官――将校）とした。

うとすると、浜本中尉が「午後三時に捕虜に対する命令が出るから、それまでは誰も連れ出してはならぬ。」と制止した。池田は愕然とした。予約していたスタジオは午後一時から四時までしか使えなかったからである。

すでにスタジオにいた朽木からは、昼ごろから五、六回催促の電話がかかっていた。

「一時から四時までということを覚えているのか。四時以後は他の放送があって絶対に使えないのだぞ。内閣情報局、JOAK の人たち二〇人ぐらいが、さっきから待っている。彼らは、明日から本当に放送ができるのかと言っている。本当に四時までに来られるのか。」

池田はこう答えるほかなかった。

「捕虜は到着したから、明日から必ず放送する。いま、三時に命令が出ると聞いた。それまでは、どうすることも出来ない。命令が終わったらすぐ飛んでいく。」

†命令とリハーサル

三時になった。一四人の捕虜は浜本中尉の指揮で、中庭の中央に南面して一列に並んだ。正面に管理棟、背後に捕虜棟が建つ静かな空間である。やがて、海外出張中の恒石参謀に代わり、参謀本部付将校である小岩井光夫（一九一〇～五九年）少佐が浜本・谷山両中尉、憲兵軍曹を伴って姿を見せた。中庭には一気に緊張が走った。

少佐はポケットから紙片を取り出し「気を付け」の姿勢に固まる捕虜たちに向かって、よく通る声で命令を読み上げた。

命令

一、汝等（なんじら）は、この無益なる戦争を終結させる為に、大日本帝国陸軍と協力せよ。

二、協力を拒みたる者は、その生命を保証せず。

昭和一八年一二月一日

大日本帝国陸軍参謀総長　杉山元

（『日の丸アワー』）。

企画部の森野正義が通訳し、叫んだ。小岩井は紙片を静かに折りたたむと、ひとりで中庭を後にした。

彼は戦前、参謀本部第八課で宣伝補佐を務めた。開戦後は大隊を率いてニューギニアの山脈を越え、ポートモレスビーに迫ったが、ガダルカナルの戦況悪化で補給が困難となり、帰還を命じられた。一九四三年九月、再び参謀本部付となった。

解散の号令とともに、池田はカルプフライシュ中尉、ヘンショー海軍少尉、プロボー―（John David Provoo）軍曹の三人の米国人に「私についてこい。」と声をかけた。門を出て左へ一五〇メートルほど走り、大通りの御茶ノ水駅の斜め前に出た。ほどなく来たタクシーで、JOAK へ向かった。日比谷交叉点に差しかかったとき、池田は初めて対米放送のことと、今日がリハーサルであることを三人に明かした。タクシーは間もなく JOAK 横の内玄関に着き、一行は急ぎ足で第五スタジオに入った。池田は準備した原稿をカルプフライシュに渡し、マイクの前で読むよう命じた。彼は放送経験があり、予想以上に巧みに読み上げた。次にプロボーが読み、これもまずまずの出来で、池田は「これなら行ける。」

と感じた。このリハーサルを、情報局やJOAKの関係者二〇人ほどが副調整室から見守っていた。最初は視線も冷ややかだったが、捕虜の出来が意外に良く、やがて驚きが表情に現れた。

この日は池田の勢いがすさまじく、三人の捕虜は何も言わず命令に従った。池田も朽木も胸をなで下ろし、四時になったので捕虜を連れて駿河台へ引き上げ、藤村所長に報告した。

その後、捕虜全員を集めて日の丸アワーについて説明し、当面の担当業務を割り当てた。カルプフライシュ、ウィリアムズ、プロボーは解説者、ヘンショーは音楽ディレクター、マックノートンは俳優兼演劇プロデューサーといった具合である。放送要員とは別に、日系二世の画家フジタは、伝単部主任の漫画家太田天橋の下につけた。オランダ人将校シェンクはバタビア（現・ジャカルタ）放送局員だったが、面接した池田はその能力を評価しなかった。恒石の意向で連れてきたが、ほかのひとりとともに台所の調理係を命じた[60]。

こうして捕虜を起用した前例のない大規模な宣伝放送は、池田と、脅迫され従わざるを得なかった捕虜たちの奇妙な協力の下に始まった。

池田にとってなんとも刺激に満ちた一日であった。帰宅後、一一時ごろ床についたが、とてもすぐに眠れるものではなかった。その日の出来事を思い返しながらつぶやいた。「三九年の人生で、いちばん興奮した。これから先も、こんな日はあるまい。」そして、駿河台分室へ移送された捕虜たち、特にJOAKに行った三人にとっても同じだろうなと思った。

図８　JOAK(日本放送協会)
出典：Wikimedia Commons
「日本放送協会 放送会館」
参照 2025-10-30

†対米放送開始

一二月二日、ついに対米謀略放送を始める日が来た。池田は朝食のとき、心が引き締まるのを覚え「今日からが私と捕虜の本当の勝負だ。」と思った。午前八時前に出勤する

[60] 終戦後一〇年余りして、池田はシェンクが無能を装っていたことを知った。

と、捕虜の到着によって分室の雰囲気は一変し、女子職員――帰国子女、二世、淡路・九段事務所から来た職員――も活気づいていた。

池田が向かった捕虜棟では、特に変わった様子はなかった。「よく眠れたか。」「大森収容所と比べてどうか。」などと軽く声をかけながら、神経を研ぎ澄ませて行動を観察した。そのとき、ヘンショーとプロボーがこの日の放送について相談に来たので「出発は一〇時三〇分。昨日と同じ三人が行く。」と伝えた。

やがて藤村所長以下二五人ほどの所員の「放送の成功を祈ります。」との声に送られ、出発した。一行は一一時前に JOAK に到着し、朽木の指示で本番開始までに二度リハーサルを行った。

いよいよ本番が近づいた。朽木と三人の捕虜がスタジオに入り、カルプフライシュとプロボーは副調整室の二重ガラス窓の前に、マイクを挟んで座った。朽木は壁際のレコード用ターンテーブルにつき、その横に見習いのヘンショーが座った[61]。副調整室の池田は放送原稿を手にディレクターの左隣、赤い「on the air」ランプの前に座った。捕虜が余計なことを口走れば即座にスイッチを切るべく身構えた。最初の放送には藤村所長と浜本中尉が立ち会い、情報局と JOAK の関係者一〇人ほどが副調整室に詰めていた。

午後一時、ディレクターの「五、四、三、二、一」というカウントに続き、池田の前の赤ランプが点灯した。彼は右手を上げ、プロポーの第一声が流れた。

> これから、日の丸アワーを放送します。確固とした決意と勝利に満ちた、大東亜の声が聞こえてきます。その番組は、次のようです。（“This is Hinomaru Hour, the voice of the Great East Asia is heard, strong, determined, ever victorious. On with the program!”）（『日の丸アワー』）。

こうして長く準備を重ねてきた米国向け捕虜放送が始まった。最も感動的な瞬間で、参加した者には生涯忘れ得ぬ出来事となった。番組は甘い音楽とともに進み、カルプフライシュが最初の解説を読んだ。放送経験のある彼は、声の調子も読む速さも見事であった。音楽に続くプロボーの解説も上出来で、締めくくりのアナウンスが終わると池田の前の赤いランプが消えた。彼はしばし放心し、参観者も声を失った。次の瞬間、池田は番組の終了を実感して深く安堵した。情報局の役人や JOAK の職員から賞賛の言葉が寄せられた。

こうして初日の放送はまずまずの出来で終わった。終了後、翌日の「モンロー主義の宣言」（The issue of Monroe Doctrine）について JOAK の関係者と打合せを行い、分室に戻って全員で遅い昼食をとった。

一二月三日（米国では二日）に「モンロー主義の宣言」を放送することは、早くから決まっていた。これが対米放送の開始を急いだ理由である。一八二三年一二月二日、モンロー大統領が欧米両大陸の相互不干渉を主張する米国外交の原則を宣言した日にちなみ「アジア人が他地域の干渉を拒否するという同じ態度を取ったのに対して、それに反対して戦争をするとは理屈が合わないではないか。」という宣伝論法を用いたのだと、池田は述べている。

この劇のため、池田は前日の三人に加え、マックノートンとウィリアムズをスタジオに

---

[61] 後年、ヘンショーはテレビ業界に進み、舞台美術家として活躍した。

連れ出して主要な役を担わせた。米国の指導者を批判するには英国人の方が適任だろう、と判断したからである。こうして捕虜五人と平川唯一ら JOAK の三〜四人が出演する大規模な劇となった。この日もスタジオに来た藤村所長は、モンロー主義を題材にしたドラマの論法に満足し、池田を賞賛した。

†捕虜棟の生活

駿河台分室は、中庭を挟んで管理棟と捕虜棟が向かい合う配置であった。道路に面した、幅三〇メートルの鉄筋コンクリート三階建てのビルが、日本人の勤務する管理棟として使われていた。一階の正面右側にはアーチ型の入口があり、その左に衛兵と憲兵の部屋があった。二階は、アーチの上に所長室が置かれ、そこからいちばん遠い部屋が伝単部である。その間の広い区画に、企画・放送・総務の各部が配置されていた。天井の高い三階は、舞台と楽屋を備えた元講堂であった。

中庭の奥の正面にある、半地下を含む三階建ての木造校舎が、捕虜棟に改造されていた。一階は食堂を挟んで左に倉庫、右に原稿作業室があり、二階は娯楽室兼図書室を挟んで左に将校の寝室、右に下士官・兵の二つの寝室があった。

池田は、放送の練習[62]や、捕虜から聞いた米国の流行曲の採譜をするため、早急にピアノを用意する必要があった。文化学院で使われていたピアノは院長の家族が持ち帰っており、参謀本部にはピアノを購入した前例はなかった。

そこで池田は参謀本部から支給される年俸に匹敵する額を投じ、娯楽室にピアノを設置した。おかげで捕虜は放送の練習だけでなく、余暇に弾いて楽しむこともできた[63]。

恒石少佐は、ゼロ・アワーのカズンスたちと同様に、日の丸アワーの捕虜が放送に専念できる体制を整えた。彼らが協力するなら、どれだけ優遇しても構わないと決めていた。

放送が軌道に乗ったころ、池田は捕虜間の同性愛の話を耳にし、恒石に報告した。すると少佐は「ここは道徳を教える学校ではありません。放送がうまくいきさえすれば、本官は何が起きても構いません。」と答えた。恒石の実務優先の姿勢がうかがえる。

捕虜棟では将校を中心とした自治が認められ、浜本中尉は朝夜の点呼を除き、必要がない限り口を出さず、衛兵も決して中には入らなかった。フジタは「なんと素晴らしい変化だろう。」と喜んだ。

生活面では、恒石は機密費から毎月五千円を総務部主任に渡した。主任はその金で用務員夫婦に依頼し、配給外のルートでパンやジャガイモ、牛肉、タバコなどを調達した[64]。池田は、その当時の五千円は、闇の物価が驚くほど高かったといっても、まだ価値は十分

---

62 分室の女子職員が次のように記している。「向かいの校舎から、切々たる歌声が流れて来た。公爵［分室での池田の通称］の寄贈なるピアノの伴奏で、放送の練習である。戦後、それは「恋人よ、我に帰れ」という歌である事を知ったが、その頃は無論何の歌かはまるで知らなかった。ただ、思いなしか、しみじみと胸に迫るものがあった」(『猫のしっぽ』)。

63 西村の自宅に持ち帰ったピアノは空襲で焼失した。一方、駿河台分室の周辺は爆撃を受けなかったためにピアノは残り、戦後、文化学院の授業に活用された。

64 フランス文学者・中島健蔵は、開戦後、陸軍宣伝班の一員としてシンガポールに派遣され、一九四三年初めころ帰国した。当時の内地の様子を振り返って「……物価が高くなり、ヤミがひどくなっていた。［中略］正面からさがしても何もない。しかし、裏がわにまわるとたいていのものがある。」と書いている（『昭和時代』)。中島はその後、参謀本部と関係のある東方社に入った。

にあったと回想している。

日の丸アワーの仕事でJOAKへ行かない捕虜には、午前三時間、午後二時間の原稿執筆が割り当てられていた。「現在の状況」という課題では、米軍の海上封鎖で物資輸送が滞る中、配給の乏しさやビタミン不足による健康悪化を強調するよう指示された。「このまま戦争が続けば、あなたの最愛の夫や息子が、日本で命を落とすかもしれない。」という不安を、米国にいる家族に訴える狙いであった。ウィリアムズは、原稿の中に日本にとって好ましくない含意を潜ませることに全精力を集中し、文章が苦手なフジタを助けることもあった。

こうした中、原稿を執筆していた捕虜の一部からタバコの追加要求が出て、総務部主任が専売公社に出向いて特別配給を願い出たこともあった。

†ウィリアムズの拒否事件

分室に到着した直後、捕虜はお互いをよく知らず、国籍もまちまちで、疑心暗鬼に陥っていた。やがて日本側の意図が明らかになると、協力すべきか否かをめぐって、激しい議論が始まった。米陸軍のプロボー軍曹が「協力するしかない。」と主張し、大勢はそちらに傾いた。これに対しウィリアムズは――放送二日目に思いがけずJOAKのドラマに出演させられたものの――いまは強く反対を唱えた。彼はこうした会話が隠しマイクで盗聴されているに違いないと考え、自らの立場を明確に示すため、すべての部屋を回って「どんなことがあっても放送に協力しないぞ。」と大声で叫んだ。そして、彼の決意が試される日が訪れた。

一二月一〇日朝、仏印から帰国した恒石少佐が分室に姿をみせた。所長室で藤村所長と池田から報告を受けたのち、JOAKで放送を視察した。そして分室での昼食の後、主任参謀として捕虜に話すことになった。

参謀肩章をつけた恒石少佐は静かに中庭に現れ、捕虜の敬礼を受けた。この日の東京は、一二月らしい澄んだ青空が広がっていた。

今回の通訳が二日前に着任したばかりの二世軍属だったことを除けば、形式は一二月一日の小岩井少佐のときと変わらなかった。そのため、少佐が厳しい調子で話すことを誰もが予想していた。ところが彼は意外なほど静かに語り始め、戦争の悲惨さに触れながら「もし諸君がわれわれに協力してくれるなら安全を保証し、できるだけの待遇をしたい。」と述べ「われわれもこの戦争は止めなければならないと思っている。そのために、諸君は協力してくれるか。」と結んだ。約三〇分の呼びかけであった。恒石は小岩井から報告を受けており「反対する者はあるまい。」と心の中で思いながら、右から順に指さして賛否を問うた。

そのときである。三人目のウィリアムズが突然「気を付け」の姿勢をとった。恒石が鋭く「協力はいやか。」と問うと、ウィリアムズは「ノー、サー。」とはっきり答えた。浜本中尉が「前に出ろ。」と命じ、ウィリアムズはためらわず一歩[65]踏み出した。彼はこのときの心境を次のように記している。

---

[65] 池田は「三歩出」たと記し、ウィリアムズ本人は「一歩前に踏み出した」と述べている。一歩踏み出してから、その場で力を込めて足踏みしたため、池田には三歩に見えたのかもしれない。

私のそれまでの人生と育った環境は、祖国の敵に対し、いかなる形での協力も拒むよう命じていた。私は何のためらいもなく一歩前に踏み出した（“My whole life and upbringing had conditioned me to refuse to cooperate in any way with the enemies of my country and without any thought or reasoning, I took a step forward.”（筆者宛書簡、筆者訳）。

浜本は残りの捕虜に「お前はどうだ。協力するか。」と急いで順に問うた。マックノートンは決めかねて震えていたが、結局ウィリアムズを除く全員が協力を承諾し、捕虜棟に戻された。

恒石少佐は中庭にひとり残ったウィリアムズに近づき、静かに「お前は死んでもよいのか。」と尋ねた。ウィリアムズは「死ななければならないのなら、仕方がない。」と答えた。恒石は内心――日本人でもよほど骨のある者でないと、この行動はとれない――と感動した。しかし捕虜棟の二階から捕虜たちが、その場のやり取りを見守っているのに気付いた。もし彼らがウィリアムズにならって協力を拒めば、苦労して始めたばかりの謀略放送は根底からくつがえる[66]。恒石は毅然たる姿勢を示す必要を感じ、軍刀の柄（つか）に右手をかけた。一瞬殺気がみなぎった。浜本・谷山両中尉があわてて制止した。浜本はウィリアムズを憲兵の大山勉軍曹に引き渡した。大山は彼に両手を後ろで組ませ、東側の建物の壁すれすれに立たせた。

恒石はのちに、あれは二階の捕虜を意識した「芝居じみたジェスチャー」だったと述べている。浜本の回想によれば、恒石の顔は紅潮し、緊張にひきつっていたという。谷山は、恒石はおとなしい参謀で、捕虜を斬り殺すような人物ではないと語っている。いずれにせよ、それは刹那の出来事であった。

†東京憲兵隊

所長室に恒石参謀、藤村所長、浜本・谷山両中尉が集まり、ウィリアムズの処置を協議した。分室に残すわけにはいかないが、大森収容所へ戻せば、捕虜放送の秘密が漏れる。放送に起用予定で、まだ大森収容所に到着していない捕虜もいたため、それは避けたかった。結局、恒石の「秘密の漏洩は困るから、そういう恐れのない所へやってほしいと、憲兵隊に申し込みましょう。」[67]という指示で、浜本中尉が電話で交渉を始めた。

憲兵隊の係官は、ウィリアムズの身柄の引き受けに難色を示した。憲兵隊は捕虜収容所ではなく、軍隊の警察である。したがって、容疑者でなければ留置はしない。ウィリアムズが恒石少佐の要請を拒んだことは犯罪ではない。小岩井少佐は捕虜に命令する権限はな

---

[66] 対米放送と同時に、恒石自身の運命も懸かっていた。彼の赴任時に宣伝担当を務めていた参謀は、南方軍宣伝班の不評から左遷され、その後インパール戦線に送られていた。

[67] 恒石は「憲兵司令部が大森収容所の所長らと話をして大井川［正しくは天竜川］の方へやったと思う。その後のことは自分はタッチしていないし、行ったことも知らなかった。」と述べている（「恒石重嗣中佐の回想」）。捕虜から尋ねられた分室の所員も――彼ら自身もウィリアムズがその後どうなったか知らなかったが――捕虜に協力を続けさせるため、「銃殺されたとしても驚かないね。」と、あえて否定しなかった（ヘンショー筆者宛書簡）。

く、協力拒否を命令違反として問うこともできなかった[68]。浜本は、こちらで預かる理由がないと渋る憲兵隊の係官を相手に、二〜三〇分がかりで交渉した。何とか預ってくれと粘ると「下宿屋ではあるまいし。」と突き放されたという。

しかし参謀からの要請とあっては、憲兵隊も軽々しく対応できなかった。結局、二時間ほどして迎えの車が到着する。ウィリアムズが憲兵に伴われ、アーチをくぐって出て行くのを見た捕虜たちは、彼が殺害されるのではないかと恐れた。一方、池田たちには傲然と拒否したように見えたウィリアムズだが、捕虜という弱い立場にあった彼は、内心では強い恐怖を感じていた[69]。

東京憲兵隊本部は、分室から一キロほど南西、皇居の清水（しみず）門・清水濠（ぼり）と道を挟んだ向かい側（現・千代田区九段南一丁目）にあった。ウィリアムズは両手を絹縄で縛られていた。事務室で手続を終えると、いくつもの廊下を抜け、広い通路に並ぶ独房のひとつに導かれた。中に入ると、大山軍曹は壁に掲げられた規則を指さし、フランス語ができるかと尋ねた。ウィリアムズが「できる。」と答えると、大山は規則の説明を始めた。「自分は英語も話せるが、敵性語なので使えない。」と大山は言ったが、フランス語を試してみたかったのだろう。お祈りは定められた時間に限り許されるという項目があった。大山は東京外国語学校（現・東京外国語大学）で学んでおり[70]、フランス語には自信があった。

図９　大山勉（部分）
写真提供：佐々木清一

独房の奥にはセメントの台座に磁器の便器が据え付けられていて、水を流すボタンが壁にあった。便器の周囲に汚物が積もっていたので、ウィリアムズは掃除したいと申し出

---

68 前掲恒石書簡。

69 ウィリアムズは分室の壁の前に立たされている間、拒否したことを後悔し、「あのとき、もう少し考える時間があれば、こんなことにはならなかったのにと思っていた。」と語っている（ウィリアムズ筆者面談記録）。

70 大山勉（一九一五年ごろ〜七八年ごろ）は東京外国語学校フランス語学科の卒業生で、憲兵隊でも上司の命令で語学の研鑽を続けていた。池田が分室の彼の部屋を訪ねたとき、「学者の部屋かと思うくらいゾラやモーパッサンの原書がずらりと並んでおり、驚いた。」という。大山の東京外国語学校の同級生で、戦時中同盟通信サイゴン支局で働いていた木村寿栄吉の話では、終戦の時大山も仏印にいたという（筆者宛書簡）。

た。大山は快く応じて何度もバケツで水を運んでくれたので、便器は完全にきれいになった。最後に消毒剤とお湯、石鹸まで用意され、ウィリアムズの手は清潔になり、ほのかな香りがした。真冬の独房で受けた思いがけない親切に、彼は深く感謝した。

独房にいる間に虐待されることはなく、分室での抵抗を知る看守たちは、むしろ彼に敬意を払った。取調べは行われなかったようである。毎朝、外の練兵場では乗馬訓練が行われ、号令と蹄(ひづめ)の音が彼の独房にも響いた。

一週間ほど経ったころ大山軍曹が現れ、絹縄でウィリアムズの両手を縛り、独房から連れ出した。いくつもの階段を上って最上階の乱雑な狭い事務室に着くと、机の前で直立不動を命じられ、宣告を受けた。――「これまでの出来事や、どこから来たのかを誰にも口外しないことを条件に、死刑の執行を停止する。」

ウィリアムズは、次の収容所の門をくぐった瞬間から厳しく監視され、これ以上の反抗は命を賭すことになると覚悟した。東京憲兵隊は、「秘密の漏洩を避けたい」という恒石参謀の指示を、忠実に守った。

第六章　山奥の収容所へ

ウィリアムズは、長野県南部のダム工事現場に近い収容所へ護送された。将校待遇を剥奪されて厳しい作業に従事したが明朗さを失わず、仲間の士気を支える責務も忘れなかった。工事現場で出会った人情味ある班長は、彼にとって大きな支えとなった。

†戦時下のダム建設

大山軍曹とウィリアムズは階段を下り、東京憲兵隊を出た。左に折れて交通量の多い通りをしばらく歩き、東京駅に着いた。大山が切符を買う間、彼はメイン・コンコースにひとり残された。師走の駅を忙しそうな人々が行き交っていた。やがて大山が戻り、二人はプラットホームへ出て列車に乗った。

数時間後、二人は長野県の小さな駅[71]で降りた。山のふもとの道を進み、捕虜のいる施設に着いた。ウィリアムズは、米国やカナダの将校が収容された建物奥の小部屋に入れられた。食事を運んできた捕虜に、ここはどこかと尋ねると、にらみつけたまま黙って立ち去った。隣室からベートーヴェンの交響曲が流れ、「もっと掛けてくれませんか。」と声をかけると、音楽は止まった。東京憲兵隊の命令で「言葉を交わせば厳罰に処す。」と警告されていたらしい。

翌朝、大山と再び列車に乗り、途中の駅で乗り換えた。右手に渦を巻いて流れる天竜川を見ながら南下し、山の斜面にある満島駅（現・平岡駅）[72]に到着した。一キロほど上流で戦前からダム工事が進められていたので、満島駅の構内は広く、倉庫が立ち並んでいた。駅で待機していた衛兵に従い、川へ向かって延びるコンクリートの坂を進むと、高い木塀に囲まれた収容所があった。衛兵のいる門を入ると広場があり、右手に管理棟、左手に炊事場と浴場、奥に捕虜宿舎と医務室が並んでいた。通訳が案内した宿舎の寝床には、薄い畳の上に毛布四枚と硬い丸枕が置かれていた。

近くのダム工事現場では日本人、朝鮮人、中国人が働いていたが、一九四二年一一月に通称「満島収容所」が開設されてからは、各国の捕虜が加わった。

夕方、作業を終えた捕虜たちがウィリアムズを囲み、さまざまな質問を投げかけた。しかし憲兵隊の警告があり、彼はマキン島で捕虜になったこと以外は語れず、日本側のスパイではないかと仲間に疑念をもたれた。

翌朝、ウィリアムズは捕虜番号一一四を割り当てられ、他の捕虜とともに宿舎を出て作業現場へ歩いた。真冬の天竜川対岸の山腹では、ロンドンの地下鉄を思わせる二本の巨大なトンネルが掘削されていた。ダムの完成後、貯水を発電所へ導くための施設だった。朝鮮人坑夫が爆破作業を担い、爆薬が炸裂すると、捕虜がつるはしやシャベルを手に中へ入

71　中央線の茅野駅だと思われる。終戦の年、駅の北東約一一キロの地点に正式な捕虜収容所が開設されたが、それ以前から、付近の重要施設・諏訪鉄山で働く捕虜を収容する施設が存在したと推測する。

72　東京から満島駅へ向かうには、中央線のほか、東海道線の豊橋駅で飯田線に乗り換える経路も考えられる。しかし、大山らが途中で宿泊可能な捕虜収容所は、神奈川県以西には存在しなかった。

り、崩れた岩石をかき出した。安全への配慮は乏しく、しばしば落盤事故が起きた。重大事故の後、作業員は外に集められ、下流の村から神主が呼ばれた。ウィリアムズは初めて見る日本の神事を興味深く眺めた。トンネルの入口に白布を掛けた祭壇が設けられ、米飯と酒が供えられた。やがて金襴の長い陣羽織に黒い立烏帽子の神主が現れ、手には翡翠や暗色の石を散りばめた短い笏を持っていた。緑の葉の付いた枝が配られ、神主の低く響く祝詞に合わせ、一斉に振るよう命じられた。ウィリアムズは、山の精霊の怒りを鎮める厳粛な祈りだと理解した。その後、重大事故は起きなかったという。

やがてクリスマスが訪れ、赤十字の小包を寝床の両側の捕虜と分け合った。それをきっかけに、彼はようやく憲兵隊での恐怖感が薄れ、自分のことを語れるようになった。周囲も彼に心を許した。多くはシンガポールで捕虜となり、中にはスマトラ島で英軍用機を整備していたマレー人や中国人もいた。彼らは終始陽気で、士気も高かった。

トンネルの掘削が終わると、日本人と朝鮮人の労務者が内部をコンクリートで塗り固めた。捕虜はセメントに砂と水を混ぜ、容器に移して塗装の足場まで運ぶ仕事が割り当てられた。重い容器を五〇センチ以上持ち上げるのは難しく、貴重なセメントをこぼすたび「ダメだ」「こら」「馬鹿野郎」と怒鳴られた。そこで捕虜は改善を図り、中間に壇を設けて二人を配置すると、作業効率は一気に上がった。ただしセメントを混ぜる担当者は極限まで忙しくなった。

†おおらかな班長

コンクリートによる下塗りが終わり、仕上げの漆喰塗りまで済むと、余剰水を下流へ逃がす放水路の建設が始まった。資材は、トンネルから掘り出して山裾に捨てた岩石で、落下の衝撃で固まっていた。それを再び掘り返し、トロッコで運んだ。砕石機にかけてできた砂や小石を山腹のホッパーに詰め、そこからバケツに入れてウインチで作業場まで降ろした。

捕虜は二人一組で働いた。ウィリアムズは捕虜棟で仲良くなったウェールズ人の元炭鉱夫と組み、つるはしやシャベルの使い方を教わった。夕方、作業が終わると、翌日のために採石場から砕石機までトロッコのレールを敷いた。敷設には細心の注意を払った――岩石を満載して運ぶとき、脱線すれば大変だからである。

毎朝六時、点呼を終え衛兵に引率されて門を出ると、捕虜たちはほかの組に先を越されまいと、全速力で橋を渡り採石場まで走った。作業場所によって能率が違ったからだ。

彼らはこうして終日、岩石を掘り起こして運び、汗と土ぼこりにまみれて働いた。だが、過酷な現場にも思いがけず人情味のある班長がいた。

捕虜は、悪天候で工事が中止にならない限り、夕方六時までは収容所に戻ることが許されなかった。だが、ウィリアムズの班を率いた原田源燈（一八九九〜一九七〇年）は少し違った。彼は各組に「トロッコ一六杯」という具体的なノルマを与え、それを果たすと「これまで！」と宣言し、収容所へ帰らせてくれた。

原田のやり方は独特だった。捕虜が砕石機のある坂の下までトロッコを運ぶたびに、切符を一枚渡す。それはタバコの箱を半分に切ったもので、彼の印鑑が押されていた。衛兵たちも同じ銘柄を吸っていたので、空き箱は簡単に手に入った。捕虜のひとり、マラヤ

（現・マレーシア）出身の中国人を説得し、台所から盗んだ生の芋で原田の印を彫らせ、偽の切符を作らせた。使うときには注意が必要だったが、労働の負担は大きく減った。

捕虜たちは別の工夫もした。休憩時間に原田をレスリングに引き込み――原田自身は後年「相撲をとった。」と語っていた――彼の前掛けの小袋へ手を伸ばして切符を抜き取り、見物していた仲間にそっと渡したのである。原田はこうした企みに気付いていたが、黙認していたのではないか――そう思わせるものが確かにあった[73]。背は低く、肩幅が広く、蟹股（がにまた）で歩く姿からフロッグ（カエル）とあだ名されたが、陽気でおおらかな性格で皆に慕われた。捕虜を怒鳴ったり、いじめたりせず、穏やかに見守ることで、荒っぽいほかの班長たちよりもはるかによい作業成績を上げた。ウィリアムズは「彼の下で働いた捕虜は皆、たまらなく好きになった。彼こそ本当の紳士だ。」と語っている。英国人として最高の賛辞だろう。

ある日、ウィリアムズは、地上四メートルほどの高さにある砕石機へトロッコの中身を移す作業を担当した。岩石の掘り起こしとは比較にならぬほど体は楽で、天竜渓谷の眺めは捕虜であることを忘れるほど美しかった。ところがいっしょに作業していた米軍曹が不用意に柵の間から放尿し、運悪く下を歩いていた衛兵にかかった。衛兵は逆上し、米軍曹を殴りつけた。

仲裁に入ったウィリアムズもとばっちりを受け、捕虜生活でこの時初めて殴られた。反射的にボクシングの防御姿勢をとると衛兵は興奮し「ユー、ボクシング！」――と叫びながら上着をつかみ、坂の下まで引きずり下ろした。ウィリアムズの眼鏡が弾き飛ばされ、壊れた。衛兵は小銃に弾を装填し、銃口を向けた。ウィリアムズは、衛兵の過剰な反応は東京憲兵隊からの申し送りのせいだろうと考えながら、直立不動の姿勢をとった。駆けつけた原田がうまくその場をとりなし、壊れた眼鏡は収容所の職員が直してくれた。

図１０　原田源燈
写真提供：原田博夫

[73] 原田源燈の長男・博夫は、「知っていたと思うなあ。オヤジは学はなかったけど人情味はあったよ。」と筆者に語っている。

†満島駅の作業

一九四四年六月、連合軍がフランス・ノルマンディーに上陸し、同じ月、米軍が太平洋のサイパン島に侵攻した。満島駅で荷役をしていた捕虜たちは、毎朝プラットホームに投げ降ろされる新聞の束から一部を抜き取り、漢字が読めるマレー系中国人がそれを解読した。おかげで戦争――特にヨーロッパ戦線――の最新状況を知ることができ、毎日空腹で病気や事故による死者も出たが「勝利の日は近い」と士気は高まっていた。

そのころウィリアムズは、駅でセメントを降ろす作業班に配属された。班は一一人で構成され、ひとりは病人で作業には加わらず、薪（まき）を割って湯をわかし、途中の茶畑でむしった葉で茶を入れる役目を担った。日本人の班長は初老の落ち着いた男で、捕虜が仕事を心得ていると知っており、余計な干渉はしなかった。

満島駅に着いた列車は、五〇キロ入りのセメント袋を満載した貨車を一両残して出発し、作業班の一〇人がそれを押して倉庫の前に運んだ。貨車の扉を開くとき、出発駅でセメント袋を積込んだ捕虜が不機嫌でなかったことを願わずにはいられなかった。袋が破れていると、詰め直さなければならないからである。一日の作業は約二千袋で総重量は一〇万キロ。二人は倉庫内の積み上げ作業に回るので、残る八人は各自二五〇袋、一万二五〇〇キロを運ぶ計算だった。重労働ではあったが、皆元気でたくましく、やり遂げることを誇りにしていた。

セメント倉庫に隣接して大きな金物倉庫と食糧倉庫があり、中で日本人労務者が働いていた。倉庫から駅の下の道までは一〇メートル近い高低差があった。セメントが来ない日――このころセメント不足が深刻になっていた――には捕虜は金物倉庫に呼ばれ、工事用資材の積み上げや、配送を手伝った。鋼鉄製の重量物の配送は数人がかりで台車に載せ、駅前の坂を下って橋を渡り、現場でウインチにかけて巻き上げ、人手で運んだ。

一方、食糧倉庫には満島の村や収容所の食糧――米俵、小麦粉（二五キロ袋）、籠に入った麺類など――が蓄えられていた。捕虜の立ち入りは許されていなかったが、隙を見て中から小麦粉の袋をつかんで押している貨車に投げ込み、セメント袋の陰に隠して持ち去った。線路の反対側の倉庫から木炭を取り出し、拾った古い灯油缶製のオーブンを使ってセメント倉庫の中でパンを焼いた。収容所の入口で検査があるため、持ち帰ることはできなかった。

駅では二人の女性が働いていたが、捕虜に敵意はなかった。ひとりは捕虜からマー（おかあちゃん）と呼ばれた六〇歳ほどの女性で、こぼれたセメントを袋に詰め直す仕事をしていた。もうひとりは二五歳ほどの美しい駅員で、おそらく駅長の助手だった。客車の到着・出発時にはプラットホームで気を付けの姿勢をとり、その端然とした姿を見るだけで心が和んだ。こうしてセメント輸送が途絶えるまで[74]、捕虜たちは重労働ではあったが駅での作業を楽しみにしていた。

---

[74] 一九四一年に六百万トンあったセメント生産量は、一九四四年には三百万トンと半減した。原料の石灰岩は国内で自給できたものの、戦局の悪化により生産に不可欠な石炭や労働力が不足したためである。また、本土決戦の準備――一九四四年一一月には松代大本営（現・長野市）の工事が始まった――で使うセメント需要は急増した。平岡ダムが完成したのは、戦後の一九五一年だった。

†食事の分配

収容所の炊事場には鋳鉄製の大釜が並び、米・大麦・大根を混ぜたご飯（おかゆ）が炊かれた。各捕虜宿舎への配分は木の桶で行われた。まず空の桶の重さを計り、次にご飯を入れた状態で計る。そこから桶の重さを差し引き、捕虜の人数で割ってひとり分の配分量を算出した。この数値を「小数点」と呼び、通常は〇・三〜〇・四キロであった[75]。炊事兵は当番が書いた人数に小数点を掛け、その重さになるようにご飯を加減した。ご飯と同様に桶で運ばれる味噌汁の具は大根の葉で、ときに豆腐が入ることもあった。

食糧難の中、炊事担当者は、収容所から約五〇キロ離れた愛知県東三河まで仕入れに出向いた。副食は小魚の干物が週二回くらい、肉が出ることはまれだった。塩辛い海藻のジャム（海苔の佃煮）や、長野県らしく、油で揚げた蚕（かいこ）の蛹（さなぎ）が付くこともあった[76]。

各捕虜宿舎の食堂には全員の食器が並べられ、食事の到着を待った。善通寺とは異なり、満島収容所では食器が支給されず、捕虜たちは自作した。穴をふさいだエナメル製の電球カバーが器としてよく用いられ、味噌汁用のマグカップは、赤十字の肉缶を再利用して銅線で取っ手を付けていた。ウィリアムズは国内でもっとも待遇がいいとされる善通寺収容所と、もっとも待遇の厳しい満島収容所の両方を体験したことになる[77]。

ご飯の配分係は投票で決められ、ウィリアムズの宿舎では彼と、マラヤ出身の中国人が担当した。二人は木のしゃもじと、村の墓地から持ち出したと噂される茶碗を手に、テーブルの両側に立った。茶椀にご飯を詰めて表面をならし、一杯ずつ配る。八〇人の捕虜は、一粒の差もないか息を詰めて見守った。配分が終わって余りが出ると「次のレゲは誰だ？」と声がかかった。レゲ（lege）はマレー語で「おかわり」を意味する。食器は毎回同じ順に並べられたから、今回の追加をもらう者は自ずと決まった。さらに余りが出れば隣の捕虜に回るが、そこからは半杯ずつになり、最後の者が次回のレゲとなった。ときには全員が半杯もらえることもあった。

この半杯は一種の通貨になり「防火当番を代わってくれたらレゲを三回分やる。」といった取引に使われた。約束を守らぬ者もおり、フィリピンで捕虜となった兵隊は借金がかさんで「破産」を宣告され、完済するまでは誰とも取引できなくなった。

ある米国人捕虜が、ご飯の量を一定にする器具を考案し、従来の複雑な方法は不要になった。仲間たちはそれを「ガイズ・ライス・デバイス」と呼んだ。肉の空き缶をシリンダーにして、木で作ったピストンとの間に木の輪をはさみ、ひとり分のご飯の量を一定にする仕組みである。正確に同じ量を押し出せるため全捕虜棟に広まり、レゲは姿を消した。原田班長はその公平なやり方を知って感心し、長男に「捕虜の衆は皆で同じように分けて

75　炊き上がりのムラや計量の誤差によって、その日のご飯の総量と各宿舎の合計は必ずしも一致しなかったと考えられる。重視されたのは全体の帳尻合わせよりも、人数割りの計算を示して捕虜に形式的な公平さを納得させることだったのではなかろうか。

76　炊事担当者が苦心して調達したゴボウを、戦後の BC 級裁判で捕虜が「木の根を食べさせられた」と証言し、虐待の証拠とみなされたという（『朝日新聞』）。

77　ゴードン大佐は回想録『Fight It Out』の中で、日本で大船、善通寺、満島の各収容所を経験したが、その中では善通寺の待遇が比較的よかったと述べている。ただし食事の量は、重労働に従事するためか、満島の方が多かったようだ。終戦前に善通寺収容所から満島へ移送されて来た英軍将校の話を聞いた医師ワインスタインは「これら新しく来た人たちにとっては、われわれの貧弱な食事も豊かなものであった。彼らはわれわれの三分の一しか与えられていなかった。」と記している。

食べるだぞ。」と語ったという。

一方、二人の捕虜医師は、食事をタバコと交換する人々の問題に頭を悩ませていた。英軍と米軍の捕虜にそれぞれ一一人ほどいて、〈サッカーチーム〉と呼んだ。士気は低く、怠惰でやせ細り、栄養失調で脚気を患った。ごみを漁って病気になり、貴重な医薬品を浪費した。さらに仲間の赤十字の缶詰や衣類を盗み、日本人職員とタバコに交換したりして、常に騒ぎの種をまいた。捕虜の中にも、彼らとずるい取引をする者がいた。医師たちは「破産」を宣告して、借りを返済させるとともに、毎日の食事を医務室の〈トレーニング・テーブル〉で取らせ、タバコと交換できないようにした。彼らをなんとか立ち直らせ、生き延びさせようと工夫したが、成功する者はほとんどいなかった。

†クリスマス

一九四四年一二月、ドイツ軍が西部戦線で反撃を開始した。日本の新聞は大きく報じ、ウィリアムズたちは暗い気持で記事を読んだ。フィリピンにおける米軍の進撃の速度も遅く感じられ、連合軍のノルマンディー上陸以来高まっていた捕虜の士気は一転してどん底に落ちた。長野県山間部の厳しい寒さ[78]と食糧不足の中、インフルエンザが流行したうえ、いつ解放されるか分からないという心理的負担が重くのしかかり、死者が増えていった。

捕虜の移動は頻繁で、満島から他の収容所へ送られる者もあれば、新たに収容される者もいた。恐らく恒石参謀の憲兵隊への指示のため、ウィリアムズは終戦まで満島収容所に留め置かれた。彼は長い収容生活の間に日本側の信頼を得て、しばしば作業隊の引率を任され、ときには火葬に関わる仕事もあった。棺に納められた遺体を山の上の火葬場まで運んだ。整地されていない急な山道で運搬役が足を滑らせると、死体が棺から投げ出され、木か藪に引っ掛かるまで転げ落ちた。そのたびに一行は坂を下り、遺体を引き上げなければならなかった。数日後また山を登り、遺骨を拾って白木の箱に収め、事務所に安置する――それは薄気味悪い仕事であった。

こうした暗い空気を吹き払おうと、ウィリアムズと英軍医ホイットフィールド（Richard Whitfield）がクリスマス・パーティを企画し、米軍医ワインスタイン（Alfred A. Weinstein）も賛成した[79]。久保龍郎所長は開催に同意した。この年の八月、二代目の所長に就任した久保少尉は中国戦線で負傷していた。彼は両医師の提案に常に耳を傾け、部下による捕虜への制裁を許さなかったと、ワインスタインは著書に記している。しかし久保も、翌年、満島へ転属になった渡辺睦裕軍曹――軍上層部の特命を受けていた可能性がある――を取り締まることはできなかった。制裁を禁じられた衛兵は、渡辺に告げ口した。

三〇人の英国、米国、カナダ、中国の捕虜は、厳しい労働を終えると凍える医務室で何週間も讃美歌の練習を続けた。クリスマス当日、捕虜は許可を得て山に入り、常緑樹――モミと松の大枝を切り出して捕虜宿舎や医務室に飾った。赤十字の小包が各捕虜にひとつ

---

78 満島から北へ二〇キロほど離れた飯田市では、一九四四年一二月の最低気温は零下一〇度以下を記録した（『長野県気象累年報』）。

79 ワインスタインは著書で、ウィリアムズは米兵に人気があり、「快活に自分の仕事をこなし、さらにそれ以上のことをする。」と記している（『Barbed-Wire Surgeon』）。ウィリアムズは、仕事で疲れて捕虜がほとんど集まらない日でも、バラエティショーを上演していた（『Horyo』）。

ずつ配られた。彼らが交換した贈り物は哀れを誘うほど粗末だった。しかし医務室と便所の間の狭い空地に集まった彼らの前で、ホイットフィールドとワインスタインがクリスマスの儀式を執り行い「聖夜」の合唱が響き渡った。

医師たちも兵隊の知恵に救われた。収容所では規則により一月四日までは冬の衣類が支給されず、部屋を暖めるための火も使えなかった。そのため彼らの医務室兼寝室も凍えるように寒く、とても眠れる状況ではなかった。風呂は五日に一度しか入れなかった。そんな時、寒さをしのぐ方法――天竜川の河原で丸石を拾い、炊事場の熱で温めて毛布に包み、抱いて寝る――を教えてくれたのは、元ホームレスの米兵であった。

†終戦まで

一九四四年一一月から、B29による東京空襲が始まっていた。翌年一月になると、満島でも収容所のはるか上空を九機が編隊を組んで飛行する姿が見られた。胸を躍らせて見上げる捕虜を、衛兵は竹刀で殴り、宿舎へ追い返した。それ以後、天竜川の湾曲部がB29の地上確認目標となったためか、満島の上空を頻繁に通過するようになった。その機影と爆音は、捕虜にとって希望を告げるものだった。

一九四五年には、資材不足のため満島のダム工事は完全に中止された。満島駅は静まり返り、荷役の姿はほとんど見られなくなった。健康な捕虜たちを集めて新たな作業隊が編成され、トンネル内の地下工場建設、ダム工事で使われた機器の保守、木材の伐採・運搬・製材などを命じられた。雪が融けてからは開墾や、航空機の燃料にする松根油（しょうこんゆ）の採取も始まった。一方、病気の捕虜――重労働と栄養失調のため、脚気の患者が増えていた――は、火の気のない作業場で稲わらを使って蓑（みの）や草鞋（わらじ）を編んだ。

医師たちは久保所長の許可を得て毎月患者を品川俘虜病院へ送り、治療を終えて戻った捕虜から秘かに医薬品や戦況情報を受け取っていた。

ある日、ウィリアムズが作業から戻ると捕虜宿舎の代表が来て「この宿舎で大学を出ているのはあなただけだ。戦況の見通しを教えてほしい。」と頼んだ。彼は大きなボール紙を使い、ドイツの降伏までに起こりそうな出来事を日付とともに記していった。太平洋戦線は新聞記事が検閲されていて予想が難しかったが、終戦は九月三日と書き込んだ。ウィリアムズはこれを、純粋に士気を高める手段だと考えていた。ところが、実は捕虜の間で都市や島の占領を予想する賭けが行われていたのだ。手元にあった書籍の図を手がかりに世界地図を作り、捕虜が持っていたウェブスター辞典の都市や河川の地名索引を利用した。善通寺から来た英軍中尉が、抑留中に日本語をマスターしていたので、新聞の解読は容易になった。賭け金はタバコ一本で、清算はホイットフィールド医師が担当していた。

ある春の日、ウィリアムズは六人の捕虜を率いて衛兵の引越し作業を手伝った。満島駅に行くと、列車で到着した転入者が、借りた荷車や雌牛といっしょに待っていた。捕虜たちは家財道具を荷車に積み上げた。分量がある荷物をヒモで縛り、一回で運ぶか二回に分けるかが問題だった。二回にすると三〇キロ以上歩くことになって貴重な休日が潰れ、衣類を煮沸して虱（しらみ）退治をする時間がなくなり、風呂にも入れない。

短い相談の結果、一回で済ますことにした。ところが途中、渡ろうとした仮橋が崩れた。ウィリアムズは手がヒモに挟まり、積荷とともに天竜川の河原へ向かって転落した。落下の途中で手が外れ、奇跡的に崖の岩棚に引っかかった。岩壁に身を寄せ、牛と荷車が

積荷とともに河原の岩に激突するのを、胸が悪くなる思いで見下ろした。二〇メートルほど崖を這い上がり、仲間のいる所へ戻った。皆は彼の姿を見るなり歓声を上げ、どうやって助かったのかと、口々に尋ねた。牛や家財道具を失った衛兵もウィリアムズの生還を喜び、その後いつも彼に親切に接した。

ウィリアムズが無事帰国できた理由は、優れた体力や精神力に加え、こうした強運に恵まれていたためだろう。

天竜川下流の浜松市とその周辺には、飛行場や軍需工場などの軍事施設が集中しており、たびたび激しい空襲に見舞われた。朝、捕虜が点呼のために外へ出ると、夜間の空襲による火災の煙が川面を逆流して上流の満島まで押し寄せ、辺り一面を包んでいることもあった。

戦局は急速に動いた。四月一日、米軍が沖縄本島に上陸した。五月七日、ドイツが無条件降伏し、六月二三日には沖縄での日本軍の組織的な戦闘が終結した。

この日、日本本土決戦に備え、上陸が予想された四国では、善通寺収容所から将校捕虜の移送が始まった。港湾や鉄道駅で荷役をするジョーンズたち下士官・兵だけが残された。

六月二五日、ゴードン大佐以下、英国人将校一〇六人が満島に到着した。ウィリアムズは再会を心から喜び、医師たちもまた、魅力的な個性と新鮮な話題をもつ人々の到着を歓迎した。

その後間もなく、悪名高い渡辺睦裕軍曹が、満島へ転属になった。ゴードンは渡辺を恐れなかった。渡辺が捕虜に暴力を振るうと、久保所長に抗議したのである。彼以前に、そのような行動を取った将校捕虜はいなかった。ある捕虜は渡辺を「正しい指導を受ければ、おそるべきミドル級ボクサーになれただろう。」と評している。英語もうまい渡辺は、終戦までゴードンを肉体と精神の両面で徹底的に虐待した。

八月になると、収容所内にも戦局の大きな変化が伝わってきた。日本人は、広島への一回の爆撃で一〇万人以上が死亡したと騒いでいた。捕虜たちは盗んだ新聞を解読し、それが原子爆弾であること、ソ連が日本に宣戦布告して満州へ侵攻したこと、さらに長崎にも広島と同様の爆弾が投下されたことを知った。

八月一五日、収容所の空気が一変した。日本人は皆どこか上の空で、いつもの騒がしさが消えていた。その日、所長は「追って通知するまで作業隊は働きに行かなくてよい。」とだけ告げた。ウィリアムズが衛兵に理由を尋ねると、派遣先の土建業者と雇用上の問題が起きたのだと取り繕った。空には飛行機の影がなく、山頂のサイレンも沈黙していた。捕虜たちは、何か決定的なことが起きたと感じた。

第七章　戦争を越えて

終戦の混乱を経て、ウィリアムズは帰国した。大学時代から好意を寄せていた女性と結婚し、植民地省に復帰する。やがて対米謀略放送に協力した元米軍軍曹の裁判が開かれ、証人としてニューヨークを訪れた折、駿河台分室の池田徳真と再会した。

†終戦と混乱

戦争が終わったことは、やがて確かなものとなった。渡辺軍曹たち一部の衛兵は姿を消し、残った者は態度を和らげ、タバコを差し出して捕虜の機嫌を取ろうとした。

捕虜の最先任（階級が最も上の者）である英海軍ゴードン大佐が、収容所の事実上の管理を引き継いだ。そして捕虜たちが静まり返る中、落ち着いた声で語り始めた。

> 戦争は終わった。日本は降伏した。しかし連合軍はまだ上陸していない。いつこの収容所を出られるのかは、私にもわからない。久保少尉は、帰国を待つ間、食料を少しでも多く確保するように努めてくれるだろう。英国人、米国人は暴徒支配(mob rule)を良しとしない。われわれを飢えさせ苦しめた日本人には、やがて当然の報いがあるだろうが、自分の手で法を執行してはならない。我慢してほしい。われわれの軍隊が上陸すれば彼らは軍法会議にかけられ、公正な裁きを受ける。その到着を待たねばならないのだ（『Horyo』、筆者訳）。

こうして捕虜たちは目前に控えた解放を、秩序を保ち静かに待つことになった。彼らは知らなかったが、ゴードンたち上級将校は、捕虜の安全を第一に考えていた。興奮した捕虜が日本側とトラブルを起こし、全員の帰国が危うくなることを何よりも恐れていた。

全国の捕虜収容所には屋根に「P.W」と表示するよう通達が回り、満島でも実行した。米軍機が捕虜に救援物資を投下するための目印である。八月三〇日の新聞は、本州と九州の六〇カ所に物資が投下されたと報じたが、満島には何も届かなかった。

そこで医師たちは収容所長と交渉し、病気の捕虜の移送に医師のひとりが同行することを認めさせ、衛兵とともに東京へ行くことになった。二人のコイントスで、行くのはホイットフィールドに決まった。ワインスタインが彼を見たのは、これが最後になった。その晩、衛兵が持ち帰ったホイットフィールドの手紙を、ワインスタインは集まった捕虜たちの前で読み上げた。

> エド［病人］を病院船に乗せた。もう安心だ。［横須賀の］港は、あらゆる種類の味方の艦船で埋め尽くされている。提督（admiral）に会った。正式な降伏調印式は、明日九月二日、米戦艦ミズーリ号で行われるという。それが済めば、米国人が君たちのところへやって来るだろう。
>
> 初めてチョコレート・アイスクリーム・ソーダなるものを飲んだが――いやはや、

驚くほどうまかった！　（『Barbed-Wire Surgeon』、筆者訳）。

捕虜たちは、その言葉に、ようやく自由が手の届くところまで来たのを感じたに違いない。

ホイットフィールドが病人をそれまでの品川俘虜病院ではなく、米軍の病院船に収容したのには、次のような経緯があった。

八月二九日朝、大森収容所長は、来訪したスイス公使館員から「米軍が捕虜を受け取りに来る。」との予告を受けた。所長が俘虜情報局へ向かう準備をしていると、米海軍シンプソン准将（Commodore Rodger W. Simpson）が兵士約三〇人を率いて上陸し、捕虜の引き渡しを要求した。所長は衛兵に戦闘準備と関係先への連絡を命じ、米軍を部屋に案内して時間を稼いだ。

日本側の対応は、まったく米軍の好みに合わなかった。シンプソンはいらだち、ビスケットと四つに割った夏みかんを突き返し「われわれは直ちに収容所を解放する。」と宣言した。

結局、東部軍の判断により、降伏調印式の前ではあったが、大森収容所と品川俘虜病院など京浜地区の捕虜は、病院船『ベネヴォランス』（慈悲心の意）へ移送された[80]。

翌三〇日、ダグラス・マッカーサー陸軍元帥を乗せた輸送機が、厚木飛行場に着陸した。彼は日本側の出迎えや式典、用意された宿舎のすべてを断り、声明文を朗読すると、そのまま横浜の『ホテルニューグランド』へ車を走らせた。

†満島出発

九月二日朝、米海軍の戦闘機六機が満島収容所上空に姿を現した。最初は深い霧のため、目印を見落として通過し、捕虜たちは落胆と罵りの声を上げた。しかし一時間後に再び低空で飛来した。捕虜たちは歓声を上げ、機影に向かって手を振って迎えた。編隊はさらに高度を下げ、オレンジ色のパラシュートが付いたドラム缶を次々に投下した。缶詰の果物やハム、コーンビーフ、肉と野菜のシチュー、ドライ・ミルク、チョコレート、キャンデーなどが詰め込まれ「[米空母]『ランドルフ』乗組員一同からのご挨拶」と書かれた手紙も添えられていた。捕虜たちは久々に米国の食べ物で腹を満たした。タバコの缶もあったが、喫煙の習慣がないウィリアムズは関心を示さなかった。当時の彼は判断力が鈍り、タバコが物々交換に使えることに気付かなかった。一方、ハーシー社のチョコレートを詰めたドラム缶の奪い合いには加わっている。

マッカーサー上陸の報が伝わると、山あいの村でも不安と根拠のない噂が広がっていた――「アメリカ兵が上陸すれば日本の女や子供が皆殺しにされる。」そうした中、満島収容所の上空に米軍機が姿を現し、恐怖はいっそうかき立てられた。だが投下されたのは爆弾ではなく、捕虜への慰問品だった。翌日、別の空母の艦載機が飛来したが、村の人々は、

80　米第三艦隊のハルゼー提督は、日本にいる捕虜救出の緊急性を確信した。「マッカーサーは陸軍介入の準備がととのうまで、捕虜の収容をはじめないよう艦隊に命令を送っていたが」、ハルゼーはニミッツ海軍元帥の許可をとり、シンプソン准将に作戦を命じた（『キル・ジャップス！』）。米海軍はこの作戦を Plan Jailbreak と呼んだ。語義は「脱獄」だが、実際には捕虜救出を意味し、降伏調印前の緊急行動として実施された（『Commander Task Group/Operation Plan』）。

もはや恐れずに空を見上げるようになっていた。

九月三日、久保所長はゴードン大佐に「明日出発して米軍に引き渡されることになった。」と告げた。所長は「捕虜は三〇〇人あまり[81]だから、六〇席の客車四両で十分だろう。」と提案したが、ゴードンは善通寺から満島への移送で味わった窮屈な経験を思い出し、これを断固拒否した。少なくとも五両は必要だと主張したのである。思い通りにできるとはなんと気分のよいものか――彼はそう感じた。

ゴードンは収容所の全員を前に帰国を伝え、こう結んだ。

> これまでわれわれが受けてきたあらゆる屈辱に報復を考える者がいるなら、その思いは捨てなければならない。日本人に、われわれが紳士として振舞う姿を示すのだ（『Fight It Out』、筆者訳）。

翌日、満島駅で特別列車が捕虜たちを待っていた。米兵は大声で冗談を言い、笑いながら三々五々駅へ向かった。坂の途中で振り返ると、英軍将兵が収容所の広場に整列し、亡くなった仲間に黙祷を捧げているのが見えた[82]。

役場を通じて捕虜帰国の知らせが回り、ほとんどの住民は厳重に戸締りして二階の窓からおそるおそる眺めたが、駅には荷役作業の班長やマー、美しい駅長助手たちが集っていた。一方、工事現場の原田班長と捕虜たちとの別れを惜しむ抱擁や握手が続き[83]、原田は印半纏をウィリアムズに手渡した[84]

列車は午前一一時に満島駅を離れた。米軍への捕虜引き渡しのため、久保収容所長が同行した。やがて用意されていた鯨の缶詰が配られ、捕虜たちは指でほぐして口に運んだ。車窓を流れる天竜川と田園風景を眺めながら、誰もが静まり返り、これから待ち受ける運命に思いを巡らせていた。

†遠州灘の米艦隊

九月二日、東京湾に停泊した米戦艦ミズーリ艦上で日本の降伏文書が調印された。米軍は捕虜と抑留者の帰還作業に本格的に着手した。

ウィリアムズたちが満島を出発する前日の九月三日正午ごろ、前月大森収容所を解放したシンプソン准将の艦隊が、静岡県浜松市の南方に広がる太平洋――遠州灘の沖に姿を現

81　当時の収容者は三〇六人で、内訳は英国人二一三人、米国人九三人であった。

82　満島収容所では、一九四二年一一月の開設から終戦までに五六人の連合軍捕虜が命を落とした。戦後のBC級戦犯裁判――捕虜や民間人への虐待などの戦争犯罪を裁く軍事法廷――で、満島収容所の関係者六人が死刑、四人が終身刑の判決を受けた。
太平洋戦争中、概数だが、日本軍の管理下にあった英米を中心とする連合軍捕虜の総数は約一四万人で、このうち約四万人が日本へ送られた。死亡者総数は約四万人（全体の約三割）に及ぶ。一方、日本国内で亡くなった者は約四千人で、日本に送られた捕虜全体の約一割である。なお、これらの数字には民間人抑留者は含まれておらず、日本への輸送途上で、潜水艦などによる攻撃を含む事故によって死亡した人数については、十分に反映されていない可能性がある（各種資料）。

83　捕虜が記念に残したバッジ類が箱一杯になったという。当時は貴重品のオーバーコートを贈った捕虜もいた。後年、源燈が胃を患ったとき、家族はそれを米一俵と交換して粥を与えることができた。

84　原田源燈の孫・原田馨は「おじいは、着ていた印半纏を脱いで渡したのではないか」と語った。

した。軽巡洋艦『サン・ファン』を旗艦とし、病院船と駆逐艦九隻を従える編成で、翌四日から六日間にわたり、中部地区の捕虜・抑留者二千八百余人の撤収作戦を実施した。

東海道線の上り列車が浜名湖の鉄橋を渡る手前に、新居(あらい)町（現・湖西市）がある。浜名湖は、町の南の今切口(いまぎれぐち)と呼ばれる開口部で、太平洋に通じている。鉄橋を渡り終えると舞阪(まいさか)町となり、その先が浜松市である。

当初、米軍は鉄道で新居町駅に到着した捕虜を、今切口に近い南の砂浜へ誘導し、上陸用舟艇で病院船に運ぶ計画を立てていた。ところが舟艇を降ろして測深したところ、海図の数字よりも遠浅であることが判明し、急遽今切口を通る方法に変更された。

浜名湖沿岸の住民にとって、米艦隊の出現は衝撃だった。終戦直前の七月二九日夜、新居町は遠州灘に侵入した米艦隊から浜松市とともに一時間、二千発を超える艦砲射撃を受けていた。

その夜、暗い沖の軍艦から砲撃の赤い閃光が途切れなく走り、照明弾で町は昼のように明るくなり、空気を切る砲弾音と着弾の轟音が周囲を圧した。花火の後のような火薬のにおいがただよい、主目標となった浜名海兵団（海軍の新兵訓練施設）では六七人が戦死、砲弾が直撃した浜名橋の厚いコンクリート桁には大穴があいた。

新居町に住む杉浦萠子（一九二三〜不詳）[85]は、子供たちと防空壕に避難していた。壕の中にガダルカナルの生き残りだという海兵団の兵長がいて「今のは湖に落ちた音、今のは上空ではぜた音、カラカラいうのは破片が落ちてくる音。」と教えてくれて、心強かった。一回目の攻撃がおさまったとき、杉浦は口の中が乾ききり、唾が出ないのに気が付いた。排尿を訴える子供たちを外へ連れ出したが、恐怖で身体がこわばり、だれもできなかった。艦砲射撃の後、米軍が上陸するのではないかと不安が高まった。

その記憶がまだ生々しかった九月三日の夜、沖の艦隊は一斉に投光機を点じ、病院船『レスキュー』（救援の意）が白く浮かび上がった。

そのころ浜名湖東岸の舞阪町では、浜松警察署から警防団[86]に捕虜収容の連絡があった。翌四日朝、団長が三人の団員と南の浜に出ると、沖の軍艦から三隻の上陸用舟艇が接近して来るのが見えた。上陸した米兵は空に向けて威嚇射撃を行い、団員たちの手を挙げさせたうえで身体検査を実施した。

東京の参謀本部から同行した大尉が通訳を務め、浜名湖進入のため、水先案内を一〇人出すよう要請した。室町時代の地震で生じた今切口は浅く、底砂が頻繁に移動するため、航路が一定しない海の難所であった。

団員の漁師・鈴木与平が乗せられた舟艇には米兵三人が乗り組み、五〇人以上を収容できる大きさだった。鉄製の舟艇は八分どおり砂浜に乗り上げており、鈴木は、潮がよほど満ちて来なければ海には戻れまいと思った。だが、舟艇のエンジンの馬力は漁船の比ではなく、たやすく海へ滑り出した。無線電話で連絡を取ると軍艦から同型の舟艇が一〇隻ほど次々に発進し、鈴木たちの艇に続いた。この日は、漁船なら出漁できぬほど波が高かった。鈴木は、この艇の構造では波に弱いと考え、沈没してもすぐ泳げるよう団服のボタン

---

85 夫の杉浦克巳（一九一五〜二〇〇二）は、戦後、毎日新聞東京本社社会部長、サンデー毎日編集長などを務めた。退職後は故郷の新居町に戻り、当時の関係者に取材して『艦砲射撃のもとで―新居の戦争』を自費出版した。

86 空襲に備えるため、消防組と防空を担当する防護団を統合した団体。

をすべて外した。しかし、艇が高速を出すと、波の動きよりはるかに速く、高い波を押し分けるようにして、今切口を難なく突破してしまった。

†新居町駅

その日、新居憲兵隊分隊長の熊谷勝美少尉は、新居町駅近くの国道で丸腰のまま待機していた。戦前米国に住んでいたという近隣の年配者が、通訳として同行していた。午前九時ごろ、鈴木が乗る艇ともう一隻が到着し、熊谷は「ここは人通りが多いから、鉄橋をくぐって駅の北側へ回れ。」と指示した。しかし九時半ごろ現れた三隻は熊谷の指示に従わず、いきなり浅瀬に乗り上げた。先頭の艇に立っていたシンプソン准将が真っ先に水に飛び込み、足を濡らしたまま国道の土手に上がり、海兵隊員や従軍記者が続いた。熊谷は、通訳を介して「自分は憲兵分隊長で、協力するため迎えに来た。」と伝えた。シンプソンは鋭い視線を向け「駅はあそこか。」と確認すると、熊谷を顧みず先頭に立って駅へ向かい、熊谷と通訳はやむなくその後に従った。

新居町駅は朝から緊張が漂っていた。駅長が国道に出ると、米兵が二列縦隊で接近して来る。ひとりが空に向かって威嚇射撃をした。駅に着いた米兵が銃を突きつけて「お前は誰か。」と尋問口調で尋ねるので「オレは駅長だ。」とひるまず英語で答えた。米兵はにわかに態度を和らげ、銃をおろして駅長室に案内させた。

シンプソンは駅長室には入らず、線路を横切ってホームに上がり、自ら駅施設の点検を始めた。一方、駅長室には米兵の指揮官とみられる者が入り、棚や引き出しをすべて開けさせ、武器の有無を調べた。駅舎の外では天幕が張られ、無線で艦隊との交信が開始された。上陸用舟艇から女性兵士が上陸し、ジープが走り出た。その迅速な行動に駅員たちは舌を巻いた。

新居警察署長が駅長室に入ると、米兵たちがガムを噛みながら机の上に腰かけ、誰が指揮官なのか判然としなかった。やがて町長も到着し、駅長と三人が揃ったところへシンプソンが入室した。彼は予定を簡潔に説明し、協力を要請するとすぐに立ち去った。

地元当局が最も警戒したのは、捕虜や米兵と復員途上の日本軍将兵との間でトラブルが起きることであった。そのため捕虜引渡しの期間中、旅客列車は新居町駅に停車せず、捕虜列車とすれ違うときには窓を閉じるよう、指示が出された。女子学生・生徒は集団で登下校させ、町は捕虜に湯茶をふるまう準備をした。

午前一〇時ごろ、最初の捕虜列車が到着、続いてもう一本が入り、午前中だけで六〇〇人ほどの捕虜が新居町駅のホームに降り立った。彼らは駅の北側と、東の鉄橋付近から上陸用舟艇に乗り、約三〇分かけて遠州灘に停泊中の病院船へと運ばれて行った。

米軍の報道班員は、プラットホームで自動小銃を肩にかけ、ガムを噛みながら警戒する兵士、列車から舟艇に歩む捕虜の笑顔、湖上を進む舟艇とそれを眺める小舟の釣り人、病院船のタラップを昇る捕虜、集団で歩く女生徒を撮影している[87]。

静岡新聞の記者は、目の前で展開する米軍の圧倒的な物量と機動力、駅に到着した捕虜たちの歓喜と涙を記事にした。

午前の輸送が終わると、鈴木の乗った舟艇のスクリューの修理が行われた。旗艦の軽巡

[87] 国立国会図書館蔵『長野県・満島収容所』添付 DVD に収録。

洋艦に横付けすると、甲板からクレーンが伸び、舟艇ごと引き上げられた。そのとき、鈴木は息をのんだ。旗艦をはじめ周囲の軍艦は、主砲も副砲も新居町駅に向けて正確に照準を合わせていた。前月の大森収容所の捕虜撤収は降伏調印式の前であり、日本側が抵抗すれば撤退する計画であった。今回はもし抵抗や妨害があれば直ちに排除する構えである。捕虜の病院船への収容も、海岸から見えない、船の陰になる南側から行われた。大戦中、南太平洋で駆逐艦隊を率いて日本海軍と死闘を演じたシンプソン准将に、油断はなかった。

米軍は中部地区の捕虜撤収にあたり、名古屋港ではなく、港湾施設のない新居町を選んだ。その理由は、戦争中 B29 が投下した機雷への警戒に加え、伊勢湾を北上する際、両岸から攻撃を受ける危険を回避する意図もあったのではなかろうか[88]。

昼前に満島駅を出たウィリアムズの一行は、豊橋駅で列車を乗り継ぎ、午後三時ごろ新居町駅に到着した。ゴードン大佐はシンプソン准将と短く言葉を交わすと、岸辺へ向かった。彼らが乗り込んだ上陸用舟艇は静かに後退し、波間に身を揺らしてからエンジン音を高め、水をかき分けるように沖へと走り出した。

英海軍の艦長経験を持つ大佐は、捕虜撤収作戦における米軍の組織力と迅速さ、そして決定した計画をどんな困難の中でもやり遂げる徹底ぶりをまのあたりにし、深い感銘を受けた。

最終の満島の捕虜輸送が終わったのは、午後六時を過ぎていた。シンプソン准将とスローナム参謀は最後まで現場に残った。憲兵の熊谷少尉が感心したのは、二人が一日中ほとんど腰を下ろさず、拡声器で的確に指示を出し、最後の舟艇で帰艦したことであった。上陸は先頭、帰艦は最後尾——そこに米軍指揮官の揺るがぬモラルを見た。

帰艦の途中、鈴木ははずみでシンプソンの帽子に触れて落とし、あわてて謝った。日本の軍人であれば叱責が飛ぶ場面だが、シンプソンはにっこり笑って「気にするな。」と合図しただけだった。最後に米軍は水先案内人全員の所在を確認し、缶詰を渡した。鈴木は大きなトマトケチャップの缶を受け取ったが、食べ方が分からず、結局手を付けずに捨てた。

†帰国

ウィリアムズは、この日のため大切に保管してきたオースチン・リードのスーツに、母校のネクタイを締めていた。しかし上陸用舟艇では波を受けるたび全身に海水を浴び、ずぶ濡れになっていた。病院船に入るとシャワールームへ案内され、服から私物を出して脱ぐよう命じられた。薬品で全身を消毒された後、米軍の真夏の下着と緑のデニムの作業服が支給され、それまで着ていた服はすべて処分された。

その後、医師の診察を受け、家族へ送る電報の定型文を選び、捕虜生活に関する係官からの細かな質問に答えた。

この間ウィリアムズは夢見心地で、指示されるままに行動していた。音楽の流れる食堂でトレイを手に列に並ぶと、数年間口にすることのなかった料理や飲み物に加え、食後の

---

88 伊勢湾の沿岸に近い伊勢神宮は、日本社会において特別な象徴性を帯びていた。米軍の名古屋港を避ける判断には、こうした要素も考慮されたのではなかろうか。

アイスクリームまで用意されていた。

ラウンジには新聞記者たちが待ち構えていた。ウィリアムズがAP通信の女性記者の前に座ると、彼女は目を光らせてテーブルに身を乗り出し「さあ、収容所で体験した恐ろしい話を聞かせて。」と迫った。そんな体験はなかったと答えると彼女は露骨に失望し、彼を追い払った。誇張を避け、控えめに語ることを重んじるのが英国の国民性であり、ゴボウを木の根と取り違えて虐待談に仕立てるほど、彼は無知でもなかった。

ウィリアムズは、知合いがいないかと巨大な病院船の甲板を歩き回ったが、だれも見つけることができなかった。マキン島以来、長い旅をともにしてきた寝袋を見つけ、もう二度と手離すまいと心に誓った。

病院船での診察の結果、ウィリアムズたちは入院不要と判断され、移乗した駆逐艦でその夜浜名湖沖を離れた[89]。艦内で大歓迎され、彼は大いに飲み食いしたため、その後しばらくバターを塗ったパン以外は何も胃が受けつけなかった[90]。

翌朝目を覚ますと、彼の乗った駆逐艦は、東京湾に大集結した連合軍の艦船の間を進んでいた。横浜の埠頭に到着すると、上陸作戦で用いられた巨大な戦車揚陸艦へ案内された。ウィリアムズは、大戦中に開発された新兵器の巨大さと技術に茫然とした。その日は共同寝室のひとつで一夜を過ごした。

横浜港からはトラックで厚木飛行場に運ばれ、沖縄・嘉手納飛行場へ向かった。着陸後、米国赤十字の飲食施設で歓迎を受け、トラックで移送されたのは大テントの臨時収容所だった。ここで寝起きし、マニラ行き航空機の搭乗順を待った。一日に千〜二千人が続々と到着し、国籍や階級の別なく、帰国手続は効率的に進められた。食堂の収容力は四百人にすぎず、食事の列は四百メートルにも達したが、鶏料理と食後のアイスクリームには並んで待つだけの価値があった。一日の大半は、こうした食事や日用品の支給、家族へ手紙を送るための行列に費やされた。収容所内は昼夜を問わず、拡声器の声が響き渡っていた。

ゴードン大佐は支給された米軍の熱帯用のシャツとズボン姿で寛ぎ、娯楽センターに備え付けられた雑誌や新聞の日付の新しさに目を見張った。

そのころ、沖縄近海を通過してマニラへ向かう病院船に、ニュージーランド人のジョーンズが乗っていた。善通寺で終戦を迎え、和歌山港から帰国の途にあった。彼の目に映る沖縄の海は、見渡す限り北も南も東も、日本本土上陸作戦のため集結した巨大な航空母艦や、右舷左舷に数多くの上陸用舟艇を積んだ兵員輸送船など、数千隻のあらゆる型の艦船で埋め尽くされていた。一方、島の飛行場では、輸送機が絶え間なく離着陸を繰り返していた。

やがてウィリアムズの順番が来て、座席を増設した米軍の爆撃機でマニラに到着した。九月二〇日、客船『エンプレス・オブ・オーストラリア』でフィリピンを離れ、一〇月二

---

[89] 当時、新居町内の浜名海兵団では、開戦時に機雷敷設艦『沖島』に乗り組んでいた佐々木平（一九二〇〜不詳）伍長が、残務処理にあたっていた。捕虜の撤収が行われることは承知していたが、終戦以来「世の終わりのような気がしていて」、見物に出向くことはなかったという。佐々木とウィリアムズは、開戦と終戦という二つの節目に、偶然にもすぐ近くにいた。佐々木はその後、沖島の戦死者慰霊や、横須賀市での記念碑建立に尽力した。

[90] 病院船に残された満島の医師・ワインスタインも卵を一度に三二個も食べ、すぐにすべて戻した。

七日、英国リバプール港へ帰還した。

†米軍の追及

ウィリアムズがマニラを出港した日、東京の陸軍省を、背広姿の米軍諜報部隊（CIC）の中尉が訪れた。目的は、殺人事件の捜査だった。

米海軍のヘンショー少尉は駿河台分室で終戦を迎え、大森収容所に移された後、シンプソン准将の救出作戦で帰国した。その際「いっしょだったウィリアムズという英国人が、殺害されたと思う。」と、係官に申告した[91]。

陸軍省では、元参謀本部第八課長の永井八津次少将以下のスタッフが応対したが、誰もウィリアムズの消息を把握していなかった。終戦前、恒石は四国防衛軍へ兵站参謀として転出していたため、急遽、在京の池田が呼び出された。

池田が陸軍省に着くと、大きな丸テーブルの後方の窓を背にして、背広姿の若い米国人が座り、永井少将はじめ七人の日本側関係者が質問に答えていた。池田は、ウィリアムズが東京憲兵隊へ連行された後のことは知らない、と述べた。

永井は「俘虜情報局に照会したものの、疎開先から引越し中でカードが見つからない。」と説明し、池田が通訳した。額面どおり受け取ったかどうかは分からないが、中尉は静かにこう言った。「引っ越しはいつ終わりますか。 それまで待ちましょう。」ヘンショーの証言もあり、日本側が殺害したと疑っていたはずだが、表面上はあくまで穏やかだった。

終戦の混乱で軍の命令系統は壊れ、ウィリアムズの消息は容易につかめなかった。もし彼が死亡していた場合、その事情がどうであれ、対米放送に関わった者は裁判にかけられ、絞首刑に処されるおそれもあった。池田もウィリアムズを選んで解説担当に入れた以上、無罪になるとは思えず、心配で何か情報がないかと市ヶ谷へ通った。

戦時中、陸軍の中枢が置かれた市ヶ谷は、参謀肩章を吊った将校たちが犇(ひし)めく、いわば「日本陸軍教の総本山」であった。だが敗戦後、その光景は一変していた。軍人の魂とされた日本刀を、もはやだれも帯びていない。丸腰であちこちを歩く軍人たちはどこか弱々しく見え、池田の目には商人のように映った。

一週間後の朝、池田がいつものように第二部長室へ顔を出すと、永井少将が大声で叫んだ。

「池田さん！生きている！ 無事だ！」

日本の軍人の声は一般の人々より大きいが、その朝の声は格別で、部屋中に響き渡った。

「本当ですか？ 絶対に間違いありませんか？」

「間違いない！ 確かだ！」

二人は喜び合った。

とりあえず一件落着したが、永井課長は米軍の今後の調査に備え、恒石参謀を高知から

---

91 のちにウィリアムズの生存を知ったヘンショーは、次のように評している。「彼はきわめて高い精神的規範を備えた立派な人物だった。文化キャンプで共に過ごした日々を振り返ると、その人格の強さにあらためて驚かざるを得ない」（ヘンショー筆者宛書簡）。

東京へ転属させた。

†ニューヨークの再会

帰国の翌月、ウィリアムズは報告のため植民地省（ロンドン）を訪れ、タラワ赴任を命じられた。

出発直前の一九四六年三月、彼は父親の司式で結婚式を挙げた。新婦のダイアナ（Diana Hayter）は、戦前に父親が本国勤務となった際、教区で親しかったヘイター家の長女である。ウィリアムズは大学生のころ、休暇のたびにヘイター家の子供たちと馬で遠乗りや狐狩りに出かけ、彼女に強く惹かれていった。

植民地省の規則で――公務と私事を混同させず、公費で新婚旅行をさせないための措置なのか――新郎新婦が同じ船で渡航することは認められなかった。ダイアナは見知らぬ土地へ、ひとりで心細い船旅をすることになり、ウィリアムズはこれを「官僚主義的な愚行だ。」と憤った。

この年の官報でウィリアムズの叙勲が発表された。彼は、善通寺と満島でいっしょだったゴードン大佐の推薦によるものだと考えている。一九四九年、東アフリカのウガンダへ転任した。赴任の途中に立ち寄ったオーシャン島でクスノキ製のタンスを購入し、満島で原田源燈から贈られた印半纏を大切に納めた。

一九五二年一一月、ニューヨークで反逆罪の裁判が始まった。駿河台分室で対米謀略放送に従事していた、米陸軍のプロボー元軍曹が被告だった。

ウガンダから休暇で帰国していたウィリアムズは、来訪した米 FBI 職員の依頼を受けて渡米した。検察側証人としての証言を終えると、法廷外のホールでプロボーの弁護士が近づき「弁護側として考え得る最良の証言でした。」と礼を述べた。ウィリアムズは、自分は真実だと思うこと答えただけだと語っている。

その翌年の一月二〇日、ウィリアムズはニューヨークの連邦裁判所の証人室で、思いがけず池田徳真と再会した。

池田は翌日の晩、彼を市内の「都レストラン」へ招いた。ウィリアムズは、憲兵隊へ連行された後の経緯を池田に語り、満島での生活の様子や原田源燈のことにも触れた。

池田は彼の叙勲を祝い、日本酒で乾盃した。ウィリアムズは、収容所の食事にたびたび出た「きんぴらごぼう」を思い出した。池田がウェイターに尋ねると「ございません。外国のお客様からのご注文は初めてです。」と答え、その場は笑いに包まれた。そこへレストランのオーナー塚田数平[92]が現れ、池田から事情を聞くと「次にニューヨークへいらっしゃるまでにはご用意しておきましょう。」と応じ、また笑いが起きた。そして塚田は「今日のところは、すき焼きをお楽しみください。」と穏やかに付け加えた。

ウィリアムズは、駿河台分室中庭で協力を要請した恒石少佐[93]の近況を尋ねた。池田

92　塚田数平（一八七六～一九五九年）は、ニューヨークのスキヤキ・レストラン経営で成功を収めた。日米親善活動にも力を注ぎ、一九五〇年には「憲政の神様」と呼ばれた政治家・尾崎行雄（一八五八～一九五四年）を米国に招く費用一切を提供している。

93　戦後、恒石は GHQ の指令による公職追放を受け、喫茶店を経営し、その後貸しビル業に転じた。一九八一年三月には高知偕行会――旧陸軍将校の親睦団体――の会長に就任。一九八七年三月の総会挨拶で、出席者に防衛大学校出身者の姿もある中、大戦中ウィリアムズが示した愛国心に触れている。

は、故郷の高知で喫茶店を営んでいると答え「あのときもしあなたを斬っていたら、今ごろ彼は生きていない。」と続けた。ウィリアムズは「そうなっていたら、彼の故郷に喫茶店はなかったわけですね。」と応じた。
二人の会話はさらに当時の思い出へと広がっていった。

「あなたと大森収容所で初めて会ったとき、『どこでどうして捕虜になったのか』という題で文章を書いてほしいと頼んだ。『日本軍が上陸したと知らせる者があり、自転車に乗って出かけたところ、突然日本兵が現れて捕虜になった』と書いたね。正しかったかな。」
「素晴らしい記憶力をおもちですね。」
「忘れないよ。だってガバナーが自転車に乗って自分の領地を巡視するなんて、聞いたことがないからね。お忍びなら分かるが。」
「ああ、それはマキンが小さな島だからです。」
——池田の先祖もまた、鳥取で領主を務めた家柄であった。
「あれは実のところ、試験用紙だった。」
「私は合格したのですね？」
「そう、不幸なことに。私の選択であなたの人生が終わるところだった」(『駿河台分室物語』)。

池田は、ウィリアムズの昔と変わらぬがっしりとした姿から「ぶっても叩いても俺は死なないぞ。」という強い意志を感じた。口には出さなかったが「お前が生きていてくれたので［戦犯に問われずに済み］、私の首もつながっているんだよ。」と思いながら、楽しい晩餐を続けた。
話は尽きず、いつしか店内の客もまばらになっていた。
やがて長い沈黙の後、ウィリアムズが口を開いた。

「すっかりスキヤキ・ディナーを堪能させていただきました。三度目はいつ、どこでお会いできるでしょうか、ミスター・イケダ？」
「神のみぞ知る、さ。——では、名高いガバナーの健康を祝して乾杯しよう」(同)。

二人は盃を合わせ、日本酒を飲み干した。

参考資料

一　書簡・面談など

第一章

ウィリアムズ〔Charles F. Williams〕（一九九一〜九三）筆者宛書簡→以下「W 書簡」とする。
ウィリアムズ（一九九二）筆者面談記録〔映像記録〕→以下「W 面談」とする。
増淵真吾（一九八八）筆者面談記録→以下「増淵面談」とする。
小菅輝雄（一九九三以後）筆者宛書簡
ジョーンズ〔John Jones〕（一九九二〜二〇一三）筆者宛書簡（善通寺市立図書館蔵）→以下「J 書簡」とする。
ジョーンズ（二〇〇六）筆者面談記録〔映像記録〕（善通寺市立図書館蔵）
ジョーンズ(一九八八、一九九三)録音 DVD（『横浜・山手 250 番館』付属資料。国立国会図書館蔵。文字起こしは Japan's First POW Camp in WWII: Zentsuji に収録）→以下「J 録音」とする。
Peter McQuarrie（二〇〇六〜　）筆者宛 E メール

第二章

J 録音、J 書簡
W 書簡
増淵面談
防衛研究所（一九八九〜　）筆者訪問時助言
防衛研究所（一九八九〜　）筆者宛書面回答
平井宏知（一九九四）筆者との電話による聞き取り
有田和子（一九九五）筆者面談記録〔映像記録〕

第三章

W 書簡
J 録音、J 書簡
ヘンショー〔George Henshaw〕（一九九二〜九八）筆者宛書簡→以下「H 書簡」とする。
Carol McAdoo（二〇二四〜　）筆者宛 E メール〔カルプフライシュ（Kalbfleisch）中尉の娘〕→以下「M 書簡」とする。

第四章

恒石重嗣（一九九六）「恒石重嗣元陸軍中佐の回想―『ウィリアムズの拒否事件』ほか」筆者面談記録〔映像記録〕（国立国会図書館蔵）→以下「恒石面談」とする。
恒石重嗣（一九八八）筆者宛書簡→以下「恒石書簡」とする。
安岡元彦（二〇一八〜　）筆者宛 E メール〔恒石重嗣の又甥〕
J 録音、J 書簡

第五章

恒石面談
恒石書簡
池田徳真（一九九二）「池田徳真（のりざね）氏の回想―『ウィリアムズの拒否事件』ほか」筆者面談記録〔映像記録〕（国立国会図書館蔵）
池田百合子（二〇一六〜　）筆者宛書簡・面談・電話記録〔池田徳真の長女〕
池田百合子（二〇一六）『父、池田徳真の思い出』第一四回諜報研究会（五月一四日）講演〔映像記録〕
小林久子（二〇一五）筆者宛書簡
M 書簡
H 書簡
W 書簡、W 面談

谷山樹三郎（一九八八～二〇〇七）筆者宛書簡
谷山樹三郎（二〇一六）「谷山樹三郎元陸軍中尉の回想―『ウィリアムズの拒否事件』ほか」筆者面談記録〔映像記録〕（善通寺市立図書館蔵）
浜本純一（一九八八）筆者との電話による聞き取り
佐々木清一（一九九八）筆者宛書簡
木村寿栄吉（一九九八）筆者宛書簡
第六章
W 書簡、W 面談
板倉恒夫（二〇一二）筆者宛書簡
原田博夫（一九九四）筆者面談記録→以下「原田博夫面談」とする。
第七章
W 書簡
原田博夫面談
Caroline Tyner（二〇二〇～　）筆者宛書簡〔ウィリアムズの次女〕
原田馨（二〇二三）「印半纏を渡した経緯に関する証言」（九月一四日）〔原田源燈の孫〕
佐々木平（一九九四）筆者面談記録

二　参考文献

［公文書・公式記録］

第一章
参謀本部（一九四三）「軍事極秘「マキン」島及小「マキン」島」米国議会図書館蔵
南洋庁長官官房調査課編（一九四一）『英直轄植民地ギルバート及エリス諸島概況』南洋庁長官官房調査課
第二章
アジア歴史資料センター『鹵獲品調査表』Ref.C08030066500
アジア歴史資料センター『俘虜名簿』Ref.C08030066500
第三章
官報一九四二年一一月四日「善通寺、朝鮮、台湾、大阪及東京俘虜収容所設置」
アジア歴史資料センター『編成完結の件』Ref.C04123653200
陸軍主計中尉吉田茂集録（一九四二）『善通寺俘虜収容所情報綴』（善通寺市立図書館蔵）
アジア歴史資料センター『俘虜情報局月報』Ref.B02032536500
アジア歴史資料センター『写真週報 二一八号』Ref.A06031081300
第四章
アジア歴史資料センター『米国内　食糧及農業問題』Ref.A03024878700
アジア歴史資料センター『俘虜の内地送致の件』Ref.C01000457800
第五章
アジア歴史資料センター『昭和一八年度参謀長会同における実務連絡事項（第八課主務事項）』Ref.C14010442700
第六章
長野測候所編（一九五三）『長野県気象累年報　明治二二年～昭和二七年』長野測候所
第七章
United States Pacific Fleet Third Fleet/Allied Prisoner of War Rescue Group（一九四五）『Commander Task Group/Operation Plan』（八月二七日）

［書籍・論文］

はじめに
池田徳真（一九七九）『日の丸アワー』中央公論社→以下『日の丸アワー』とする。
第一章
ロアルド・ダール／永井淳訳（一九八九）『単独飛行』早川書房
浜渦哲雄（一九九一）『英国紳士の植民地統治』中央公論社

岩波書店編集部編（一九六八）『近代日本総合年表 第三版』岩波書店→以下『近代日本総合年表』とする。
クリストファー・ベイリ編／中村英勝ほか訳（一九九四）『イギリス帝国歴史地図』東京書籍
Robert Louis Stevenson（一九〇八）『In the South Seas』A Public Domain Book
Arthur Grimble（一九五二）『A Pattern of Islands. John Murray』（Kindle 版）
アーサー・グリンブル／服部判理訳（二〇〇六）『島での日々』ブイツーソリューション
郷隆（一九四二）『南洋貿易五十年史』南洋貿易
染木煦（一九四五）『ミクロネシアの風土と民具』彰考書院
下里梅子（一九八八）『タラワ環礁』北海道新聞社出版局
郡義典（一九九六）『マウリ・キリバス』近代文芸社
牟田清（一九九一）『太平洋諸島ガイド』古今書院
Kurt Weyher and Hans Jürgen Ehrlich（一九五五）『The Black Raider』Elek Books
Peter McQuarrie（二〇〇〇）『Conflict in Kiribati』University of Canterbury
Peter McQuarrie（二〇一二）『The Gilbert Islands in World War Two』Masalai Press
名倉有一編（二〇一四）『横浜・山手２５０番館』私家版→以下『横浜・山手２５０番館』とする。
名倉有一（二〇一八）「ジョーンズさんの戦争」『浜松市民文芸第六三集』浜松市文化振興財団浜松文芸館
梅棹忠夫（一九九〇）『梅棹忠夫著作集 第一巻』中央公論社
中島敦（二〇〇一）『南洋通信』中央公論新社
山本麻子（二〇一二）『言葉を鍛えるイギリスの学校』岩波書店
碇義朗（一九七九）『最後の二式大艇―海軍飛行艇の記録』文芸春秋
第二章
防衛庁防衛研修所戦史室（一九七〇）『戦史叢書 中部太平洋方面海軍作戦１』朝雲新聞社
沖島事務局編（一九八三）『噫（ああ）、栄光の敷設艦沖島』沖島会
『横浜・山手２５０番館』
平井宏知（一九八五）『太平洋戦記』私家版
ブッシュ／明石洋二訳（一九五六）『おかわいそうに』文芸春秋新社→以下『おかわいそうに』とする。
池田潔（一九五五）『自由と規律』岩波書店
横浜市教育委員会事務局社会教育部編（一九八四）『横浜・港・近代建築』横浜市教育委員会事務局社会教育部
第三章
立川京一（二〇〇七）「日本の捕虜取扱いの背景と方針」戦争史研究国際フォーラム報告書
茶園義男編（一九九三）『大東亜戦争俘虜関係外交文書集成 第一巻』不二出版
茶園義男編（一九九二）『俘虜情報局・俘虜取扱の記録』不二出版
茶園義男編（一九八五）『BC 級戦犯横浜裁判資料』不二出版
名倉有一編（二〇一二）『太平洋戦争初の捕虜収容所 善通寺の記録』私家版
名倉有一編（二〇二一）『「善通寺俘虜収容所」ハンドブック』私家版→以下『「善通寺俘虜収容所」ハンドブック』とする。
豆狸庵収録（作成年不詳）『善通寺俘虜収容所に於ける俘虜の全貌』（善通寺市立図書館蔵）
四国新聞社（一九七五）『昭和 50 年史（上巻）』四国新聞社
霧原一則編（二〇〇七）『善通寺俘虜収容所―記録写真』私家版（善通寺市立図書館蔵）
Roger Mansell, Edited by Holmes, Linda Goetz（二〇一二）『Captured: The Forgotten Men of Guam』Annapolis: Naval Institute Press
『横浜・山手２５０番館』
小宮まゆみ（二〇〇九）『敵国人抑留』吉川弘文館
横浜市総務局市史編集室編（一九九六）『横浜市史 II 第一巻下』横浜市
善通寺市教育委員会市史編さん室編（一九九四）『善通寺市史 第三巻』善通寺市
日外アソシエーツ編（二〇〇四）『２０世紀日本人名辞典』日外アソシエーツ
ゴードン〔Captain Oliver L. Gordon〕（一九五七）『Fight It Out』William Kimber and Co., Limited

→以下『Fight It Out』とする。
ジョン・フレッチャー － クック／江藤潔訳（一九七一）『天皇のお客さん』徳間書店
歴史探検隊（一九九一）『５０年目の「日本陸軍」入門』文芸春秋
『おかわいそうに』
出光興産編（一九九三）『日英の架け橋』出光興産
大川四郎編訳（二〇〇六）『欧米人捕虜と赤十字活動』論創社
内海愛子・永井均編集・解説（一九九九）『東京裁判資料―俘虜情報局関係文書』現代史料出版
ハンク・ネルソン／杉本良夫監修／リック・タナカ訳（一九九五）『日本軍捕虜収容所の日々』筑摩書房
アーネスト・ゴードン／斎藤和明訳（一九八一）『死の谷をすぎて』新地書房
第四章
小野俊郎（一九八二）「世界の電波戦」『NHK 戦時海外放送』原書房→以下『NHK 戦時海外放送』とする。
神谷勝太郎「戦前の海外放送」『NHK 戦時海外放送』
並河亮（一九八四）『もうひとつの太平洋戦争』PHP 研究所
ヂー・ゴルマン（一九三八）「日本の宣伝負けは昔から」『宣撫月報　第三巻第二号』不二出版
読売新聞社編（一九八〇）『昭和史の天皇　三』読売新聞社
澤田進之亟（一九四四）『姿なき戦ひ』輝文堂書房
恒石重嗣（一九七八）『心理作戦の回想』東宣出版→以下『心理作戦の回想』とする。
恒石重嗣（一九三七）「君を追想して」『河村俊平追想録』河村茂徳
恒石重嗣（一九八五）「思い出すまま」『歩兵第十二連隊百十年祭記念誌』歩十二編集委員会
名倉有一編（二〇二三）『恒石重嗣年譜』私家版→以下『恒石重嗣年譜』とする。
上法快男（一九七三）『陸軍大学校』芙蓉書房
百瀬孝（一九九〇）『事典昭和戦前期の日本』吉川弘文館
恒石重嗣（一九八二）「任官・満州・参本・命拾い三たび」『回想録―五十年の歩み』陸軍士官学校第四十四期生会→以下、書名は『回想録―五十年の歩み』とする。
共同通信社社会部編（一九九六）『沈黙のファイル』共同通信社
多川精一（二〇〇〇）『戦争のグラフィズム』平凡社
小林久子（二〇〇三）『猫のしっぽ』文芸社→以下『猫のしっぽ』とする。
上福岡市教育委員会（一九九八）『福岡受信所の歴史』上福岡市教育委員会
吉見かおる（二〇〇九）「ある日系アメリカ人帰米二世画家の口述生活史」『名古屋外国語大学現代国際学部紀要』第五号　三月
中野校友会（一九七八）『陸軍中野学校』中野校友会→以下『陸軍中野学校』とする。
宮本吉夫「海外放送と情報局」『NHK 戦時海外放送』
並河亮「ミッドウェイ海戦から終結まで」『NHK 戦時海外放送』
北山節郎（一九八八）『ラジオ・トウキョウ　II』田畑書店→以下『ラジオ・トウキョウ　II』とする。
『近代日本総合年表』
老川慶喜・前田一男編（二〇〇八）『ミッションスクールと戦争』東信堂
北山節郎編（二〇〇五）『外務省と対外放送』緑陰書房
第五章
『近代日本総合年表』
大屋角造（一九八二）「うら道人生の回想」『回想録―五十年の歩み』
『心理作戦の回想』
『日の丸アワー』
池田徳真（一九八一）『プロパガンダ戦史』中央公論社
池田徳真（一九九三）『恩寵と復活』キリスト新聞社
『ラジオ・トウキョウ　II』
平川洌（一九九五）『カムカムエヴリバディ』日本放送出版協会
戸部良一（二〇一〇）『外務省革新派』中央公論新社

木村秀政（一九九七）『わがヒコーキ人生』日本図書センター
吉村昭（一九七三）『深海の使者』文芸春秋
加藤百合（一九九〇）『大正の夢の設計家』朝日新聞社
西村伊作（一九六〇）『我に益あり―西村伊作自伝』紀元社
杉本苑子（一九九八）『杉本苑子全集 第二十二巻』中央公論社
キャプベル・スチュアート／飯野紀元訳（一九四三）『英国の宣伝秘密本部―クルーハウスの秘密』内外書房
Sir Campbell Stuart, K.B.E.（一九二一）『Secrets of Crewe House』Hodder and Stoughton
池田徳真／名倉有一・名倉和子訳（二〇一五）『駿河台分室物語【資料編】』私家版
ドウス昌代（一九七七）『東京ローズ』サイマル出版会
『おかわいそうに』
会田雄次（二〇〇三）『日本人の精神構造』PHP 研究所
Ikeda Norizane〔池田徳真〕（一九六四）『Bunka Camp Story』私家版（国立国会図書館憲政資料室蔵）
池田徳真／名倉有一・名倉和子訳（二〇一五）『駿河台分室物語』私家版（原著：Ikeda Norizane, Bunka Camp Story, 1964）→以下『駿河台分室物語』とする。
POW 研究会ホームページ. 参照 2025-12-16
笹本妙子（二〇〇四）『連合軍捕虜の墓碑銘』草の根出版
Frank Fujita(一九九三)『FOO』University of North Texas Press
大岡昇平（一九六七）『俘虜記』新潮社
深田祐介（一九九一）『黎明の世紀』文芸春秋
勝野金政（一九三四）『赤露脱出記』日本評論社
『猫のしっぽ』
“教育総監”“陸軍中野学校”“陸軍大学校”ほか. Wikipedia. 参照 2025-12-13
立川京一（二〇〇〇）「第二次世界大戦期のベトナム独立運動と日本」『防衛研究所紀要』第三巻第二号
Ivan Chapman（1990）『Tokyo Calling―The Charles Cousens Case』Hale & Iremonger
小岩井光夫（一九五三）『ニューギニア戦記』日本出版協同
浜本純一（一九八六）『青雲白雲』浜本事務所
坂内熊治（一九六五）『駿河台史』坂内熊治
中島健蔵（一九五七）『昭和時代』岩波書店
上坂冬子（一九七八）『特赦―東京ローズの虚像と実像』文芸春秋
『陸軍中野学校』
桑原安正編（一九九六）『一武人の波瀾の生涯』私家版
全国憲友会連合会編集委員会編（一九七六）『日本憲兵正史』全国憲友会連合会本部

第六章

鉄道省編（一九四三）『時刻表』東亜旅行社、一〇月
（一九九六）『飯田線の６０年』郷土出版社
POW 研究会事典編集委員会編（二〇二三）『捕虜収容所・民間人抑留所事典』すいれん舎→以下『捕虜収容所・民間人抑留所事典』とする。
名倉有一編（二〇一三）『長野県・満島収容所』私家版→以下『長野県・満島収容所』とする。
天龍村史編纂委員会編（二〇〇〇）『天龍村史 下巻』天龍村役場
William C. Rose（二〇〇二）『You Shook My Hand』Barney Books
一般社団法人ダム工学会（二〇一二）『ダムの科学』ソフトバンククリエイティブ
名倉有一（二〇一八）「日本軍の捕虜となって」『戦中・戦後の暮しの記録』暮しの手帖社
湯本彩子（一九九八）「満島俘虜収容所の日々」『戦争の傷跡―満島俘虜収容所の歴史像』明治大学政治経済学部後藤総一郎ゼミナール
『近代日本総合年表』
日本経営史研究所編（一九八一）『小野田セメント百年史』小野田セメント
朝日新聞社編（一九七五）『アサヒグラフに見る昭和の世相- 5 』朝日新聞社

ワインスタイン〔Alfred A. Weinstein〕（一九四八）『Barbed-Wire Surgeon』The Macmillan Company→以下『Barbed-Wire Surgeon』とする。
日本精工五十年史編集室編（一九六七）『日本精工五十年史』日本精工
浜松市役所編（一九八〇）『浜松市史 三』浜松市役所
Richard M. Gordon, Benjamin S. Llamzon （一九九九）『Horyo』Paragon House→以下『Horyo』とする。
『「善通寺俘虜収容所」ハンドブック』
第七章
『長野県・満島収容所』
『Fight It Out』
『Barbed-Wire Surgeon』
『捕虜収容所・民間人抑留所事典』
河辺虎四郎（一九六二）『市ヶ谷台から市ヶ谷台へ』時事通信社
『Horyo』
ヴィクトール・E・フランクル／池田香代子訳（二〇一四）『夜と霧　新版』みすず書房（Kindle版）
E・B・ポッター／秋山信雄訳（一九九一）『キル・ジャップス！』光人社
マルセル・ジュノー／丸山幹正訳（一九八一）『ドクター・ジュノーの戦い』勁草書房
舞阪町史研究会（一九七九）「昭和二十年の舞阪」『喜佐志満』第三号
杉浦萠子（一九九七）「新居で体験した戦争」『戦争と新居』新居町教育委員会
杉浦克巳（一九九七）『艦砲射撃のもとで―新居の戦争』私家版
佐々木平（一九八〇）「浜名海兵団―実戦以上の猛訓練」『わが海軍』ノーベル書房
『日の丸アワー』
“FEPOW Family：Empress of Australia – Passenger List” 参照 2025-12-11
『駿河台分室物語』
『心理作戦の回想』
上出正孝（一九六三）『桑山仙蔵翁物語』淡交新社
高橋起美子（一九七五）「ニューヨークで日本料理店を経営した塚田数平氏のことども」『頸城文化』第三五号
相馬雪香・富田信男・青木一能（二〇〇〇）『罌堂 尾崎行雄』慶応義塾大学出版会
『恒石重嗣年譜』
渡辺良民（一九八七）「花だより」『偕行』四三七号
あとがき
名倉有一（一九九〇）「だれかウィリアムズ氏を知りませんか」『素顔の銀行員』近代セールス社
梅棹忠夫（一九六九）『知的生産の技術』岩波書店
黒岩徹（一九八四）『豊かなイギリス人』中央公論社

三　新聞・雑誌・映像資料

はじめに
岩尾光代・粟野真紀子（一九八八）「日本の肖像―鳥取池田家」『毎日グラフ』三月六日号→以下、「日本の肖像」とする。
第一章
司馬遼太郎（一九九〇）「文明の電源」『月刊 Asahi』六月号
増淵ミツ（一九八三）「マキン（ブタリタリ島）の思い出」『南洋群島協会々報』九月一日号（国立国会図書館蔵）
第二章
横浜市環境創造局（設置年不詳）「根岸競馬場跡地パネル」
第三章
名倉有一収録（二〇一九）『「善通寺俘虜収容所」資料―新聞記事ほか 総目次』（善通寺市立図書館蔵）

『大阪毎日新聞』一九四二年一月一六日「平和な日本に吃驚」
『The Osaka Mainichi and The Tokyo Nichi Nichi』一九四二年一月一六日「Enemy Prisoners Detained at Zentsuji」
『朝日新聞』香川版一九四二年一月一六日「今ぞ見る米軍俘虜―グアム総督ら善通寺へ」
『朝日新聞』一九四二年一月一六日「グワム島の俘虜来る―総督以下四百余名善通寺へ」
『大阪毎日新聞』一九四二年一月一七日「学ぶ日本式の敬礼―情の訓示に感動の米俘虜」
『朝日新聞』香川版一九四二年一月一七日「朗らかな俘虜さん―学童と交歓」
『大阪毎日新聞』一九四二年一月一六日「収容中は労役―担当官に優秀将校任命」
『香川日日新聞』一九四二年一月二〇日「態度も良くなった―俘虜たちの日課　善通寺俘虜収容所長談」
『朝日新聞』（香川版）一九四二年一月二〇日「寒さが一番辛い―俘虜の炊事班長と一問一答」
『朝日新聞』（香川版）一九四二年一月二二日「俘虜の一日」
『朝日新聞』（香川版）一九四二年一月一八日「護国神社に最敬礼―俘虜、きのう街へ買出しに」
実松譲（一九七四）「大船捕虜収容所始末記」『別冊週刊読売』九月号
『大脱走』（一九六三年、米国、ジョン・スタージェス監督、ユナイテッド・アーティスツ）
『香川日日新聞』一九四二年五月三一日「東条首相讃岐路へ」
『戦場にかける橋』（一九五七年、英国、デヴィッド・リーン監督、コロムビア映画）

第四章

鳥居英晴（二〇一九）「参謀本部の米国国内中波傍受作戦」SW DX GUIDE　5 月号
『大阪毎日新聞』一九四二年二月二日「米俘虜　故国へ声で便り―同揃って日本の襟度に感謝」
『報知新聞』一九四二年二月三日「電波に乱れ飛ぶ宣伝戦　"無線放送"の舞台―今次大戦の特異性　宮本吉夫氏談」
『朝日新聞』一九四三年二月八日「対敵放送は男に限る」
『The New York Times』一九四三年六月二九日「Japanese Radio Attacks Morale of Men on Guadalcanal with Tales of Home Folk」
『週刊新潮』一九八八年七月一四日号「墓碑銘　"東京ローズ"を育てた対米謀略放送の班長」

第五章

平川唯一（一九四三）「海外放送のアナウンス」『放送研究』九月号
米国立公文書記録管理局〔NARA〕（一九四五年六月一四日）「ラジオ・トウキョウ」DVD 音声（『駿河台分室物語【資料編】』付属資料 No.2.c-5.c）国立国会図書館蔵
『朝日新聞』一九四三年八月三一日「文化学院・向島高女校門を閉じる」
『朝日新聞』一九七九年八月一二日「『日の丸アワー』を書いた池田徳真氏」
太田天橋（一九五九）「私がマンガ伝単の元祖だ」『日本週報』六月増刊号→以下、雑誌名は『日本週報』とする。
「日本の肖像」
『風と共に去りぬ』（一九三九年、米国、ヴィクター・フレミング監督、セルズニック・インターナショナル）
『読売新聞』二〇二三年一一月一六日「乱歩空襲生々しく―自伝全容公開へ」
『こちら捕虜放送局』（一九九五）TBS　八月一四日（テレビ番組）
勝野金政（一九七四）「参謀本部の中で」『歴史と人物』五月号
那須良輔（一九五九）「座談会　紙の宣伝戦士時代」『日本週報』
渡辺睦裕（一九五六）「アメリカに裁かれるのは厭だ！」『文芸春秋』四月号

第六章

和泉聡『朝日新聞』一九九六年一一月一〇日「地球食材の旅　ゴボウ」
『朝日新聞』一九四四年一二月二二日「独、国運賭する大攻勢　本社ベルリン国際電話」

第七章

『静岡新聞』一九四五年九月六日「引揚は超速度―米舟艇の機械化」
米国立公文書記録管理局〔NARA〕（一九四五年九月）「新居町からの捕虜救出映像」DVD 動画、（『長野県・満島収容所』付属資料 C）国立国会図書館蔵
『The London Gazette』（一九四六年一〇月二九日）「King's Commendations for Brave Conduct」

（補記）

参考資料の「一　書簡・面談など」に掲載した資料は、筆者が一九八七年から行ってきた調査で収集・整理したものである。そのうち、筆者所蔵以外の資料は国立国会図書館（一部は善通寺市立図書館）に所蔵されている。

筆者のこれまでの編著書はいずれも私家版である。国立国会図書館以外の主な所蔵先は、善通寺市立図書館、浜松市立中央図書館である。海外では Stanford University の Hoover Institution Library & Archives が“Nagura Yuichi papers, 1992–2023” として所蔵している（オンライン目録：https://oac.cdlib.org/findaid/ark:/13030/c8s470jv）。

また『横浜・山手 250 番館』と『駿河台分室物語』は、Cambridge University Library に所蔵されている（https://ci.nii.ac.jp/books/、Nagura Yuichi）。

表紙・本文掲載写真

ページ	図	キャプション
表　紙		池田徳真さんと電話で話すウィリアムズさん
2	1	ウィリアムズ
9	2	ジョーンズ
12	3	ビカチ島の無線施設
30	4	ゴードン
33	5	恒石重嗣
43	6	池田徳眞と樺山資英
47	7	文化学院中庭
53	8	JOAK（日本放送協会）
58	9	大山勉
62	10	原田源燈
裏表紙		ウィリアムズさんとの思い出を語る池田徳真さん

補足写真

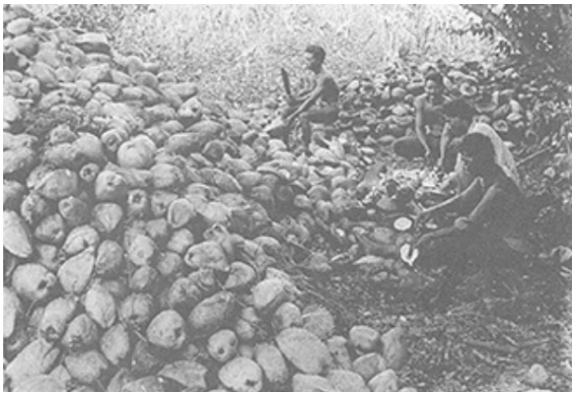
ページ	No.	キャプション
2	1	ファース
3	2	島民のコプラ作り
7	3	マキン（ブタリタリ）島
10	4	スバを出港するビティ
13	5	機雷敷設艦 沖島
17	6	根岸競馬場
17	7	移設された「山手二五〇番館」
17	8	進藤一
20	9	善通寺俘虜収容所と周辺図
20	10	善通寺俘虜収容所イラスト
20	11	善通寺俘虜収容所正門
20	12	下士官兵用捕虜棟
20	13	多度津港に集まった見物人
21	14	多度津港に上陸する捕虜ら
21	15	湯茶の接待を受ける捕虜ら
21	16	依知川庸司とマクミラン
21	17	高松港桟橋に到着したウィリアムズたち
22	18	別れを惜しむヘルマーズ一家
23	19	収容所の米軍看護婦
24	20	グリフィスと残した辞書
24	21	ウェーク島捕虜の到着
25	22	捕虜棟のウィリアムズたち
25	23	大麻山
25	24	大麻山へ作業に向かう捕虜
25	25	大麻山の開墾作業
26	26	ボーデンとウィリアムズ
26	27	水原義重
26	28	ウサギに餌をやる捕虜

26	29	講習会風景
28	30	宣誓拒否者の表示布
28	31	メッツェラー
29	32	台湾へ出発するマクミラン
29	33	二代目所長・佗美浩
29	34	ヘンショー
29	35	クリスマス演芸会
33	36	参謀本部
35	37	JOAK の録音風景
35	38	投降票（伝単）
35	39	伝単例
35	40	カズンス
36	41	西義章
36	42	インス
36	43	レイズ
37	44	JOAK 第五スタジオ待合室
40	45	平川唯一
41	46	板橋並治
44	47	藤村信雄
45	48	文化学院中庭と管理棟
45	49	文化学院（正面が後の捕虜棟）
46	50	「駿河台技術研究所」辞令とバッジ
46	51	朽木綱博
46	52	森野正義
46	53	勝野金政
48	54	カルプフライシュ
48	55	ブッシュ
49	56	フジタ
49	57	都内鉄道駅での捕虜荷役
51	58	駿河台分室配置図
52	59	小岩井光夫
57	60	浜本純一と谷山樹三郎
58	61	東京憲兵隊本部
60	62	満島駅

60	63	満島収容所見取図
60	64	満島のダム工事現場
60	65	満島のダム
61	66	神事
61	67	赤十字小包例
61	68	満島工事現場のトロッコ
63	69	鉄道で働く女性
64	70	「ガイズ・ライス・デバイス」想像図
65	71	満島収容所の葬式
65	72	クリスマスの捕虜棟
66	73	東京を初偵察した B29「トーキョー・ローズ」と乗組員
66	74	天竜川の崖崩れ
68	75	捕虜救援物資の B29 積込み
69	76	捕虜収容所のシンプソン准将
69	77	救出を喜ぶ大森収容所の捕虜たち
70	78	空から見た浜名湖と太平洋
71	79	米軽巡洋艦サン・ファン
71	80	米病院船レスキュー
72	81	新居町駅の米軍と到着する捕虜列車
72	82	新居町駅に到着した捕虜たち
72	83	上陸用舟艇に乗り込む捕虜たち
72	84	浜名湖を航行する上陸用舟艇
72	85	病院船レスキューに到着した上陸用舟艇
74	86	佐々木平
74	87	東京湾へ集結した連合軍艦隊
76	88	The London Gazette
76	89	ウィリアムズと印半纏
76	90	ニューヨークの「都レストラン」
76	91	塚田数平

第一章

1．ファース
出典：『英国紳士の植民地統治』

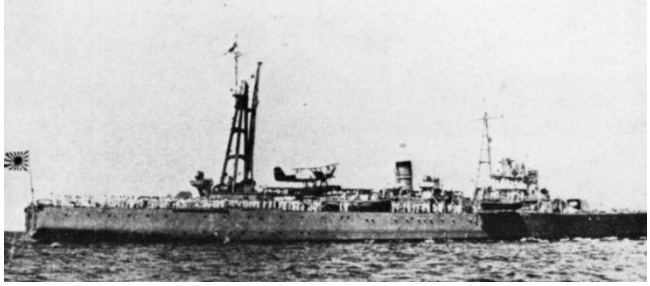


2．島民のコプラ作り
出典：“南洋貿易の歴史”. 南洋貿易株式会社（NBK）

3. マキン（ブタリタリ）島
出典：『横浜・山手 250 番館』

4. スバを出港するビティ
撮影：一九四一年七月
© Bill Laxon Maritime Library Voyage New Zealand Maritime Museum

第二章



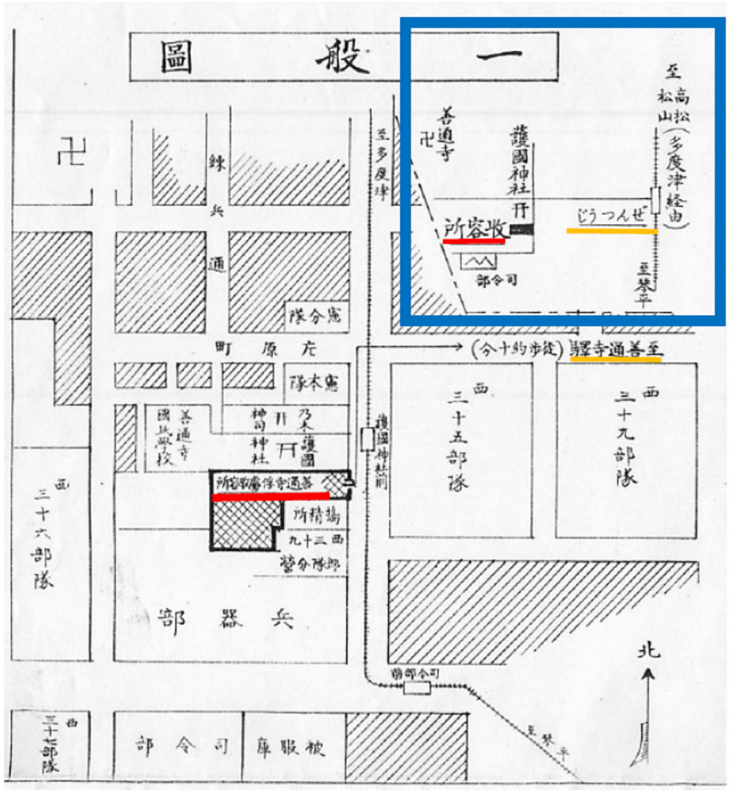
５．機雷敷設艦 沖島
出典：“Japanese minelayer Okinoshima in 1937”.
Wikimedia Commons

６．根岸競馬場
出典：“Negishi Horse Racing Track”. Wikimedia Commons

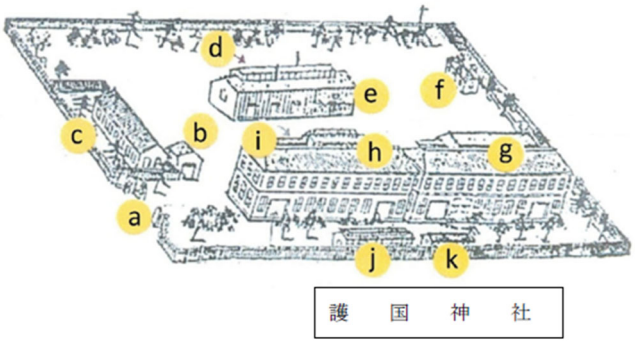
７．移設された「山手二五〇番館」
撮影時期：二〇一三年
筆者撮影
手前の白い建物

８．進藤一
写真提供：有田和子

第三章



９．善通寺俘虜収容所と周辺図
善通寺市立図書館蔵
右上は縮小図



a	正門
b	衛兵所・面会所
c	軍直轄製パン工場
d	炊事場
e	浴場
f	飼育場
g	１号棟 （１階は本部事務所）
h	２号棟
i	洗面所・便所・物干所
j	縫製作業場
k	営倉

１０．善通寺俘虜収容所イラスト
出典：『大東亜戦争俘虜関係外交文書集成 第一巻』
筆者加筆

１１．善通寺俘虜収容所正門
出典：アジア歴史資料センター
Ref. A06031081300

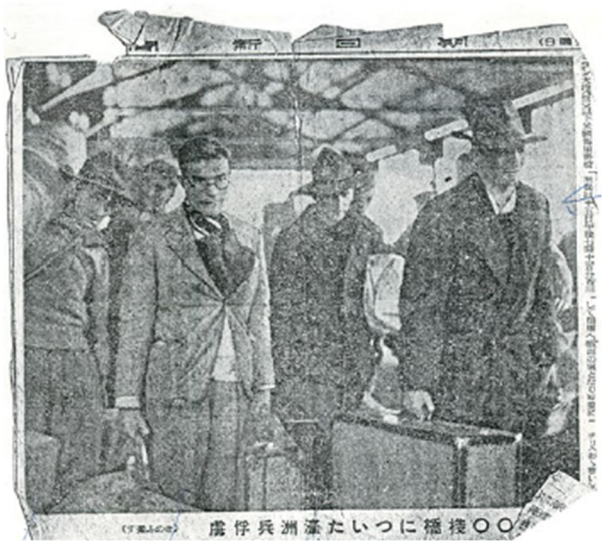
１２．下士官兵用捕虜棟
善通寺市立図書館蔵

１３．多度津港に集まった見物人
出典：『朝日新聞』1942-01-16

１４．多度津港に上陸する捕虜ら
出典：『朝日新聞』（香川版）1942-01-17

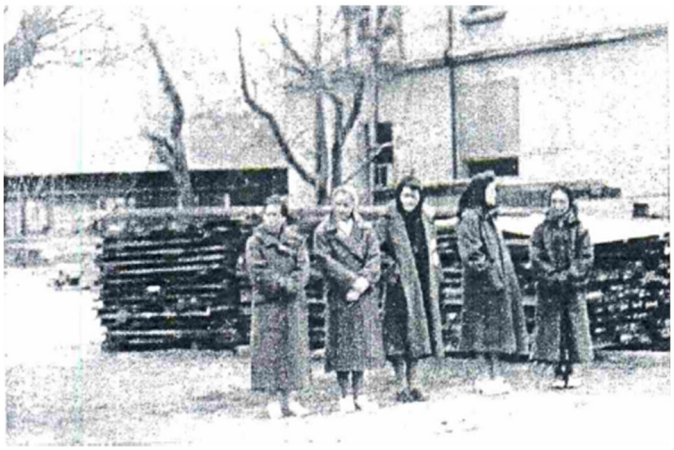
１５．湯茶の接待を受ける捕虜ら
出典：『大阪毎日新聞』1942-01-17

１６．依知川庸治（右）とマクミラン
出典：『善通寺俘虜収容所に於ける俘虜の全貌』
善通寺市立図書館蔵

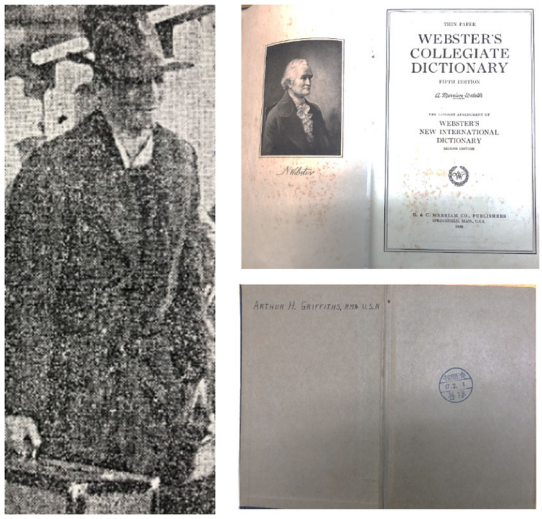


１７．高松港桟橋に到着したウィリアムズたち
出典：『大阪朝日新聞』（香川版）1942-01-16
写真提供：C. F. Williams（眼鏡の人物）

１８．別れを惜しむヘルマーズ一家
出典：『善通寺俘虜収容所情報綴』
善通寺市立図書館蔵



１９．収容所の米軍看護婦
出典：『善通寺俘虜収容所に於ける俘虜の全貌』
善通寺市立図書館蔵

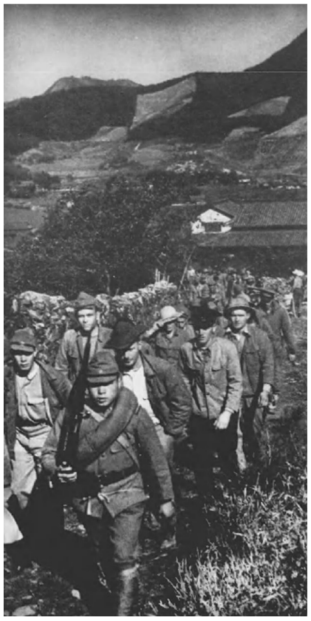


２０．グリフィス（左）と残した辞書
（左）撮影場所：香川県・高松港桟橋
出典：『大阪朝日新聞』（香川版）.1942-01-16
（右）善通寺市立図書館蔵

２１．ウェーク島捕虜の到着
出典：『善通寺捕虜収容所に於ける俘虜の全貌』
最前列右の黒い制服が進藤一少尉

２２．捕虜棟のウィリアムズたち
写真提供：John M. Jones
赤の矢印がウィリアムズ、最前列がジョーンズ

２３．大麻山（右手。 左手は象頭山）
出典：『「善通寺俘虜収容所」ハンドブック』



２４．大麻山へ作業に向かう捕虜
出典：アジア歴史資料センター
Ref.A06031081300

２５．大麻山の開墾作業
出典:『善通寺俘虜収容所情報綴』

２６．ボーデン（左）とウィリアムズ
出典：*We Stole to Live*

２７．水原義重
靖国偕行文庫蔵

２８．ウサギに餌をやる捕虜
出典：『婦人画報』一九四二年八月号

２９．講習会風景
出典：アジア歴史資料センター
Ref.A06031081300

３０．宣誓拒否者の表示布
写真提供：Charles F. Williams

３１．メッツェラー
出典：*We Stole to Live*

３２．台湾へ出発するマクミラン
（左から二番目）
出典：『善通寺俘虜収容所 記録写真』

マレー上陸作戰の殊勳

佗美部隊に感狀

畏し偉功上聞に達す

感狀

佗美部隊

獨力重任完うす

南洋中に輝く佗美部隊の殊勳

３３．二代目所長・佗美浩

出典：『報知新聞』1942-03-10

３４．ヘンショー

写真提供：John M. Jones

３５．クリスマス演芸会
善通寺市立図書館蔵

第四章

３６．参謀本部
出典：三井住友トラスト不動産「この町アーカイブス」
旧陸軍士官学校本部庁舎（市ヶ谷台）

３７．JOAK の録音風景
出典：『善通寺俘虜収容所情報綴』

３８．投降票（伝単）
出典：『心理作戦の回想』

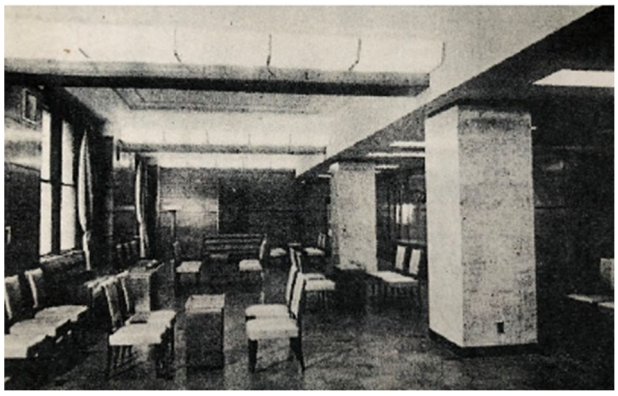
３９．伝単例
出典：『心理作戦の回想』

４０．カズンス
出典：『心理作戦の回想』

４１．西義章
陸軍士官学校時代
靖国偕行文庫蔵

４２．インス
出典：『心理作戦の回想』

４３．レイズ
出典：『心理作戦の回想』



４４．JOAK 第五スタジオ待合室
出典：船橋治.『復刻版新建築』（第 8 回配本）

第五章

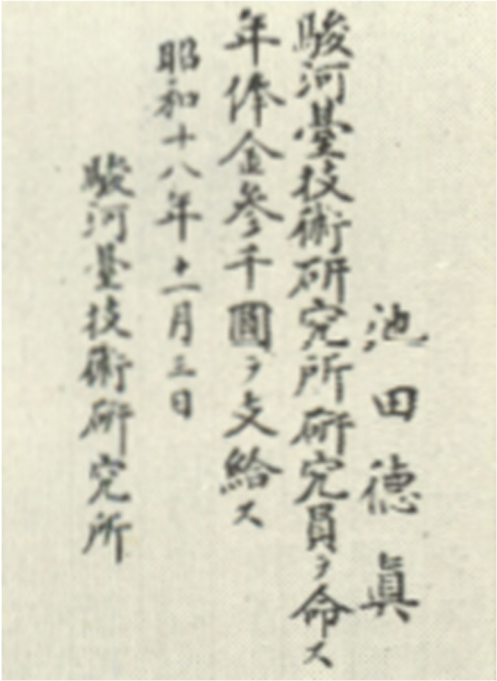
４５．平川唯一
撮影時期：一九四七年ごろ
出典："平川唯一". Wikimedia Commons

４６．板橋並治
出典：『駿河台分室物語【資料編】』

４7．藤村信雄
出典：『日の丸アワー』

４８．文化学院中庭と管理棟
出典：「文化学院を愛する会」http://lovebunkagakuin.web.fc2.com/

４９．文化学院（正面が後の捕虜棟）
撮影時期：一九三九年ごろ
出典：『光の中の少女たち』



５０.「駿河台技術研究所」辞令（左）とバッジ
出典：『日の丸アワー』

５１．朽木綱博
出典：『レヴユウを生む人々』

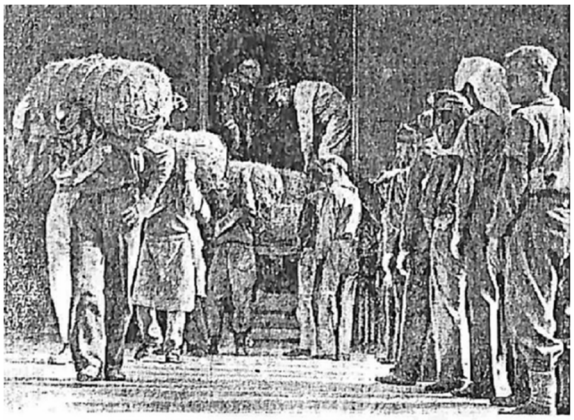
５２．森野正義
出典：『日の丸アワー』

５３．勝野金政
写真提供：稲田明子

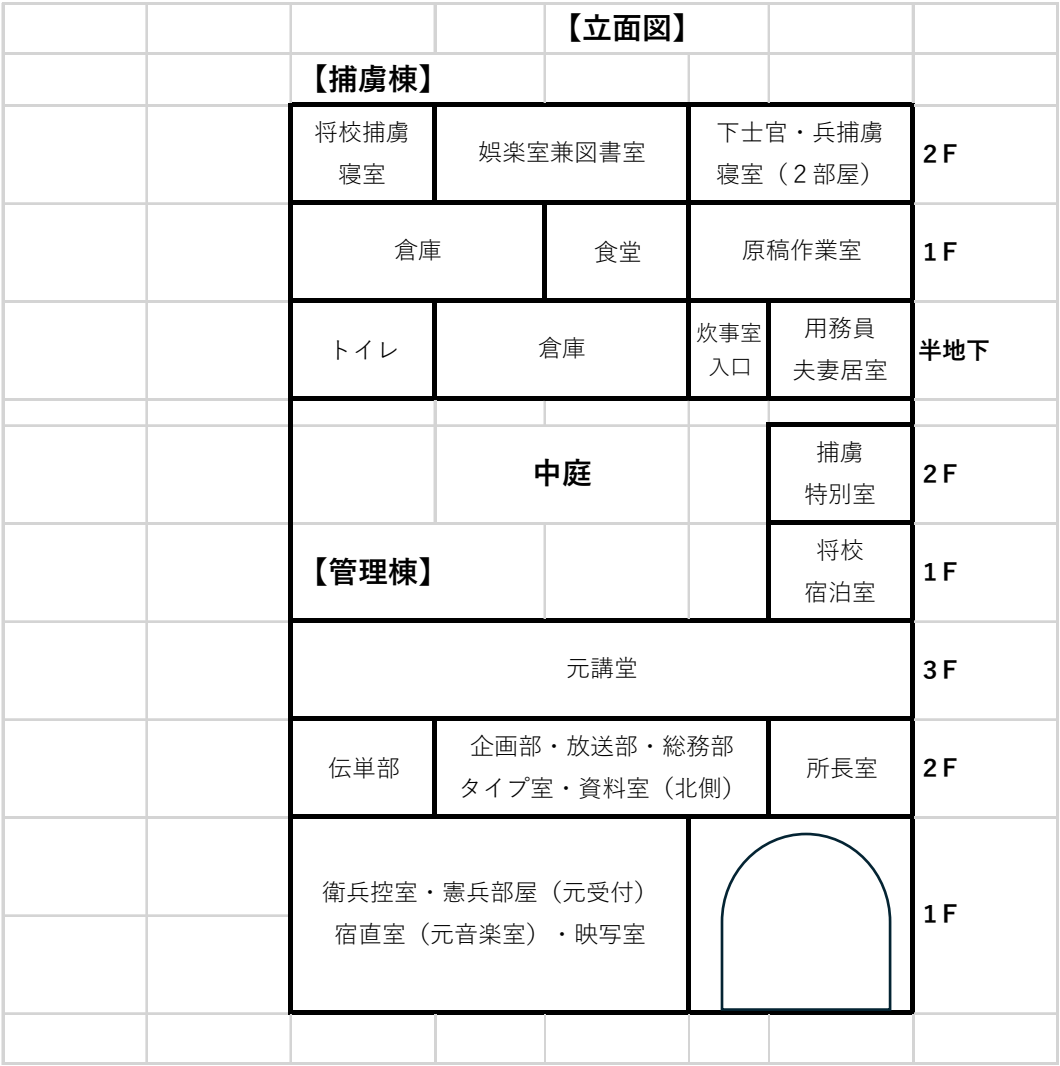
５４．カルプフライシュ
出典：*We Stole to Live*

５５．ブッシュ
出典：『おかわいそうに』

５６．フジタ
出典：*FOO*



５７．都内鉄道駅での捕虜荷役
出典：『朝日新聞』1942-11-08



５８．駿河台分室配置図
出典：駿河台分室物語【資料編】ix により筆者作成
管理棟一階右のアーチが入口

５９．小岩井光夫
陸軍士官学校時代
出典：“小岩井光夫（予科卒業時）”.
Wikimedia Commons

６０．浜本純一（左）と谷山樹三郎（部分）
撮影時期：一九四三年
写真提供：谷山樹三郎

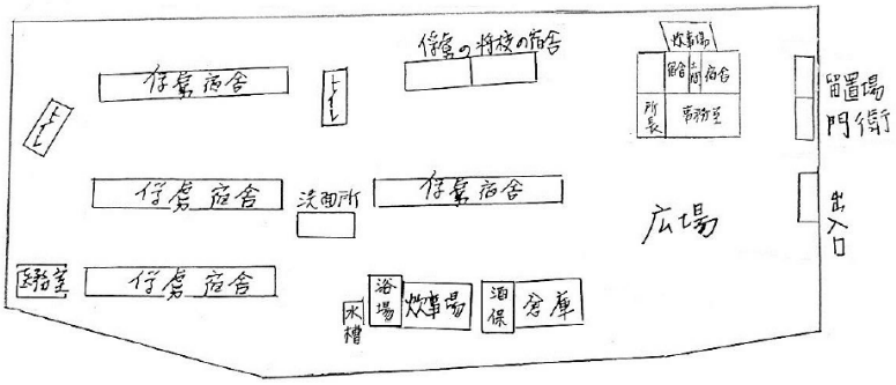
６１．東京憲兵隊本部
出典：『日本憲兵正史』

第六章

６２．満島駅

撮影時期：一九三七年ごろ

出典：『飯田線の 60 年』



６３．満島収容所見取図

写真提供：原英章

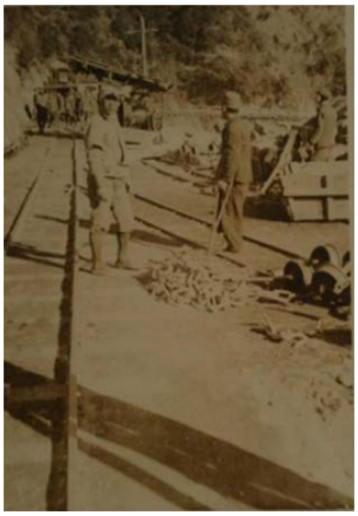
© 原英章 2013

６４．満島のダム工事現場
出典：*You Shook My Hand*
手前が天竜川

６５．満島のダム（完成後）
筆者撮影

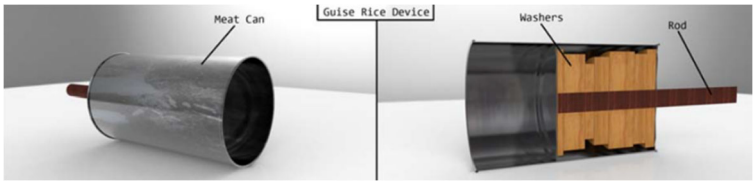
６６．神事（イメージ）
出典：『長野県・満島収容所』

６７．赤十字小包例
写真提供：Dave Harris



６８．満島工事現場のトロッコ
写真提供：北澤洋太郎

６９．鉄道で働く女性（イメージ）
出典：アサヒグラフに見る昭和の世相-５



７０.「ガイズ・ライス・デバイス」想像図
© Kyle Skippon 2013

７１．満島収容所の葬式
写真提供：北澤洋太郎

７２．クリスマスの捕虜棟
撮影時期：一九四四年
写真提供：原英章
ツリー前の帽子とブーツの人物が久保所長

▲ 写真偵察機「トーキョー・ローズ」とクルー

７３．東京を初偵察した B29「トーキョー・ローズ」と乗組員
出典：『米軍の写真偵察と日本空襲』
写真提供：工藤洋三

７４．天竜川の崖崩れ（イメージ）
筆者撮影

第七章

７５．捕虜救援物資の B29 積込み
撮影場所：サイパン島
撮影時期：一九四五年九月
出典：*STARS and STRIPES*

７６．捕虜収容所のシンプソン准将（中央）
撮影時期：一九四五年八月
出典：Department of the Navy-Naval Historical Center

７７．救出を喜ぶ大森収容所の捕虜たち
出典：Department of the Navy-Naval Historical Center

７８．空から見た浜名湖と太平洋（下部の黒い部分）
出典：米軍航空写真.一九四六／『長野県・満島収容所』
浜名湖を横切る東海道線は、左が豊橋方面、右が舞阪・浜松方面

７９．米軽巡洋艦サン・ファン
出典：“サン・ファン（軽巡洋艦）”. Wikipedia.

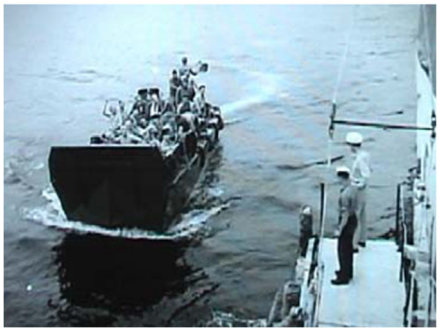
８０．米病院船レスキュー
出典：Naval History & Heritage Command Collection

８１．新居町駅の米軍と到着する捕虜列車
出典：米国立公文書記録管理局（NARA）

８２．新居町駅に到着した捕虜たち
米国立公文書館蔵
提供：POW 研究会

８３．上陸用舟艇に乗り込む捕虜たち
出典： NARA

８４．浜名湖を航行する上陸用舟艇
出典：NARA



８５．病院船レスキューに到着した上陸用舟艇
出典：NARA

８６．佐々木平
撮影場所：浜松市新居町の自宅
筆者撮影
手にしているのは『噫、栄光の敷設艦沖島』

Photo # 80-G-490487 Sun sets behind Mt. Fuji, 27 August 1945

８７．東京湾へ集結した連合軍艦隊
出典：National Museum of the U.S. Navy

Rumd. 37771

5307

THIRD SUPPLEMENT
TO
The London Gazette
Of FRIDAY, the 25th of OCTOBER, 1946
Published by Authority
Registered as a newspaper

TUESDAY, 29 OCTOBER, 1946

CENTRAL CHANCERY OF THE ORDERS OF KNIGHTHOOD.
St. James's Palace, S.W.1,
29th October, 1946.

The KING has been graciously pleased to make the undermentioned awards of the GEORGE CROSS:—

Eric George BAILEY (deceased), Sergeant 3rd Class, New South Wales Police Force.
At about 8.30 p.m. on the 12th January, 1945, Sergeant Bailey (then a Constable 1st Class), whilst on duty in Adelaide Street, Blayney, had occasion to speak to a man whose movements were suspicious. During the questioning the man pulled a revolver from his pocket and fired a shot which struck Bailey in the stomach. The Constable immediately closed with his assailant who fired two more shots. Although fast succumbing to his injuries and suffering from the effects of shock and haemorrhage, Bailey continued the struggle with the offender and held him on the ground until assistance arrived. Shortly afterwards he died. The fortitude and courage manifested by this Police Officer, in spite of the mortal injuries sustained by him at the outset of the encounter, constitute bravery and devotion to duty of the highest order.

John Alexander FRASER (deceased), lately Assistant Attorney-General, Hong Kong.
Fraser was interned by the Japanese in the Civilian Internment Camp, Stanley, and immediately organised escape plans and a clandestine wireless service. He was fully aware of the risks that he ran but engaged

it was commented upon by the Japanese prison guards. Unable to breal
the Japanese finally executed
devotion to duty, outstanding c
endurance were the source of
inspiration to others and there
doubt the lives of those whom th
were trying to implicate were se
magnificent conduct.

CENTRAL CHANCERY OF THE
OF KNIGHTHOOD.
St. James's Palace, S.W.
29th Octo

The KING has been graciously
give orders for the undermentio
ments to the Most Excellent O
British Empire, for the following a
British Empire Medal, and for the
in the London Gazette of the nar
specially shown below as having
expression of Commendation for
conduct.

To be Additional Members of the
of the Most Excellent Order o
Empire:—

Wilfrid John BARNES, Manager,
Agency, Cairo.
For services to the Forces i
East.

Walter CORLETT, Secretary,
Christian Association.

Miss Lalita HENSSIAN, Welfare W
Red Cross Society.

Arthur Wycliffe SERVANTE, Wa
attached 25 Indian Division.

KING'S COMMENDATIONS FOR BRAVE CONDUCT.

Miss Evelyn GORE-SYMES, lately British resident in Budapest.
For special services to the Allied cause.

Herbert Edward TURNEY, Apprentice, s.s. "Empire March" (Headlam & Son).
For attempting to escape from a Prisoner-of-War Camp in Japan.

Henry Charles Ralph Fulford WILLIAMS, Administrative Officer, Gilbert and Ellice Islands Colony.
For services in a Prisoner-of-War Camp in Japan.

８８．The London Gazette（英国官報）
1946-10-29, p.5307-5308（いずれも部分）

８９．ウィリアムズと印半纏
撮影場所：英国ウィリアムズ宅
撮影時期：一九九二年
筆者撮影

９０．ニューヨークの「都レストラン」
出典：『桑山仙蔵翁物語』

９１．塚田数平
出典：『桑山仙蔵翁物語』

あとがき

ニューヨークで再会した後、池田徳真さんとアフリカ駐在のウィリアムズさんの間では手紙のやりとりが続いていた。ところがその交流はなぜか途絶え、お互い残念に思いながら年月だけが過ぎていた。

一九九二年、私が英国のウィリアムズ宅を訪問することになったとき、池田さんから「東京の私のところへコレクトコールしてほしい」と依頼された。

当日、お二人の電話は一時間近く続いた。電話を終えると幾分上気したウィリアムズさんが、「池田さんの提案で、いっしょに二一世紀を見ようと約束した」と笑いながら報告し、奥さんも「まあ！」とほほ笑んだ。

鉄道の駅へ向かう自動車は奥さんが運転し、身体が不自由なウィリアムズさんは助手席にいた。私は、夏の英国のゆったりとうねる田園風景をぼんやり眺めていた。

「何を考えているの？」と奥さんが聞いた。

「もしウィリアムズさんがあのとき進み出なかったら、池田さんは本に書かなかったし……」と答えかけると、ウィリアムズさんが言葉を引き取り、「キミがここへ来ることもなかったわけだ」と言い、こう続けた。

「人生はドミノみたいなものだ。ひとつの出来事が次へと続く（Life is like a line of dominoes—one thing leads to another）」

翌年一二月、池田さんが亡くなった。ウィリアムズさんに手紙で連絡すると、思いがけず夫人から返事が届いた。一九九四年一月にウィリアムズさんも亡くなったこと、そして「二人はいなくなったけれど、気を落さずにプロジェクトをまとめなさい」と書かれていた。

ウィリアムズさんの印半纏は次女のキャロラインさんが引き継ぎ、大切に保管されてきた。しかし父親の思いがこれからも伝わるだろうかと案じた彼女は、二〇二三年九月、家族とともに来日し、原田源燈さんの孫にそれを手渡した[94]。

ふり返れば、この調査もまたウィリアムズさんの言葉どおり、ひとつの出来事が次へと続くドミノのように長い年月の中でつながったきた。

本書の執筆にいたるまで、多くの方々から支援と助言をいただいた。池田徳真さん、ウィリアムズさん、恒石重嗣さんをはじめ当時の関係者各位、資料や情報をご提供くださった皆さん、そして善通寺・浜松両市立図書館など内外の諸機関の人々に深くお礼を申しあげたい。あわせて、長年にわたり私の調査を支えてくれた妻・和子に感謝する。

---

[94] 来日の模様は、新聞各紙のほか、NHK（ニュースおよび NHK World-Japan）、信越放送ラジオなどで報じられ、POW 研究会編集の『捕虜収容所・民間抑留所事典』p.320 にも収録された。

調査の経緯

年	月	事　項
1987	9	『日の丸アワー』（中公新書）に登場するウィリアムズ（以下「W」)さん（**注 1**）を探し始めた
	11	日米会話学院の板橋並治院長の紹介で池田徳真さんを訪問したが、W さんと音信不通になっていた
88	7	高知から上京した恒石重嗣さんと都内で面談
90	8	『素顔の銀行員』（近代セールス社）に「だれかウィリアムズ氏を知りませんか」収録（**注 2**）
91	1	ケンブリッジ大学同窓会に W さん探しへの協力を依頼
	4	W さんから手紙
92	6	訪英前に依頼があり、池田さんを訪問、ビデオ撮影　**（裏表紙）**
	7	W 宅から東京の池田さんへコレクトコールを手配、ビデオ撮影　**（表紙）**
93	12	（池田さん逝去）
94	1	（W さん逝去）
95	5	W さんの奥さんへ日本での W さんに関する英文報告書 *The Project on Mr H.C. R. F. Williams: A Great Step Forward* を郵送
	7	勤務先の駐在員事務所開設のため上海へ（～99 年 8 月まで駐在）
	8	（TBS が『日の丸アワー』原作の終戦 50 周年特別企画『こちら捕虜放送局』放映）
96	3	上海からの一時帰国時、高知の恒石重嗣さんを訪問、ビデオ撮影
	9	（恒石さん逝去）
98	6	上海からの一時帰国時、博多の谷山樹三郎さんを訪問、ビデオ撮影
2004	3	ビデオ作品『生命がけの三歩』を作成（未発表）
6	1	ニュージーランドのジョーンズ（以下「J」）さんを訪問、ビデオ撮影
10	9	定年退職
12	4	報告書『太平洋戦争初の捕虜収容所 善通寺の記録』を作成、善通寺市立図書館ほか関係先へ寄贈

2012	8	善通寺市教育委員会主催の講演会で善通寺捕虜収容所について発表
	9	*Japan's First POW Camp in WWII: Zentsuji* を作成、J さんほか関係先へ寄贈
13		『長野県・満島収容所』を作成、飯田市立中央図書館ほか関係先へ寄贈
14		『横浜・山手 250 番館』を作成、横浜市中央図書館ほか関係先へ寄贈
15		池田さんの私家本 *Bunka Camp Story* を翻訳して『駿河台分室物語』（本編、資料編）を作成し、千代田区立図書館ほか関係先へ寄贈
16	5	諜報研究会（東京）で『駿河台分室物語』について発表（同時に池田百合子さん（池田徳真さんの長女）が「父、池田徳真の思い出」発表）
	8	情報史研究会（京都） で『駿河台分室物語』について発表
17	1	POW 研究会（東京。以下「P 研」）で『駿河台分室物語』について発表
	1	第 20 回図書館を使った調べる学習コンクール佳作『命がけの三歩―捕虜ウィリアムズの戦争』
	4	ケンブリッジ大学図書館へ上記報告書寄贈（**注 3**）
18	1	善通寺市立図書館所蔵の収容所開設時資料（吉田茂陸軍主計中尉作成）を翻刻（～12 月）
	3	『浜松市民文芸』に「ジョーンズさんの戦争」収録
	7	『戦中・戦後の暮しの記録』（暮しの手帖社）に「日本軍の捕虜となって」収録
19	4	善通寺市内の中学校生徒に、善通寺捕虜収容所について発表（インターネット「KSB ニュース名倉有一」で映像検索可能）
	6	NPO 法人インテリジェンス研究所（以下「I 研」）の特別研究員になる
20	8	スタンフォード大学フーヴァー研究所へ報告書・ビデオ寄贈 "Nagura Yuichi papers, 1991–2021" として整理・公開される（**注 4**）
21	8	『「善通寺俘虜収容所」ハンドブック』を作成、善通寺市内の中学校の図書館ほか関係先へ寄贈
23	8	『恒石重嗣年譜』を作成、オーテピア高知図書館ほか関係先へ寄贈（I 研ホームページにも掲載）
	9	W さんの次女キャロラインさん来日、戦時中の W さん抑留先訪問に P 研と協力（長野県天龍村では、W さんが原田源燈さんからもらった印半纏を原田馨さん（孫）に返還）
24	8	NHK「映像の世紀 バタフライエフェクト」取材協力 8 月 26 日放送 「太平洋戦争―日米プロパガンダ戦」
26		これまでの調査をまとめた『ウィリアムズの太平洋戦争』（本書）を作成

（注１）池田徳真（一九七九）『日の丸アワー』中央公論社

俘虜たちもそう思ったに違いない――静かな調子で戦争の悲惨について人びとの心に訴えるような話をされた。

たとえば「日本と米英との間に戦争が起きたことは、われわれにとって不幸なことであった。すでに二年たったが、この間のアメリカ将兵の戦死は十万人、負傷者は二十万人を超える。これが今後つづけば、なお膨大な死傷者がでるであろう。また、諸君の個人的な立場を考えても、父母妻子と別れいつ再会できるか分からない状態である」等々と、じゅんじゅんと説得するような調子で約三〇分話された。この日の通訳は、宇野君がした。そして、最後に「われわれも、この戦争は止めなければならないと思っている。そのために、諸君は協力をしてくれるか」と話を結んだ。

この時である。一列の右翼から三人目にいた、英人のウィリアムズが、突然「気を付け」をした。恒石少佐は、鋭い声で「協力はいやか」と問うた。ウィリアムズは「ノー、サー」とはっきり答えた。浜本中尉は、ウィリアムズに「三歩前に出ろ」と命じた。彼は、ポンポンポンと力強く三歩出て、直立不動の姿勢をとった。浜本中尉は、残りの一二人に一人ずつ「お前はどうか。協力するか」と聞いた。ブルブルと震えた人もいたが、みんなすることを承諾した。それで一二人を解散した。

恒石少佐は、一人残ったウィリアムズに近づいて、静かに「お前は死んでもよいのか」と問う

驚き入ったイギリス人

54

た。彼は「死ななければならなければ、仕方がない」と答えた。そのあまりにも傲慢な態度に、恒石少佐も堪忍袋の緒を切って、「腕っちゃうか」といって刀の吊り革をはずし刀に手をかけた。一瞬殺気がみなぎった。浜本中尉はびっくりして二人の中に割って入り、「参謀、ここを汚すのはやめて下さい」と言って止めた。それで、恒石少佐も引かないわけに行かなくなった。そこで、浜本中尉は、ウィリアムズを大山憲兵に渡した。大山憲兵は、彼を東側の建物の壁に向って顔がほとんど壁に付くようにし、手を後ろに組ませて立たせ、二時間ほどして東京憲兵隊本部に連行した。これらのことを、残りの俘虜は、二階の窓から全部見ていた。

私が二階の自分の事務室に上ったとき、二、三人の仲間がいた。みんな考えもしなかった事態に興奮していた。「どうだい、俺たち、ああいう場合にあの態度が取れるかい」と、私が言った。誰も、それに答えることができず黙っていた。勝負はなんと言っても、われわれの負である。先日「協力を拒みたる者は、その生命を保証せず」という命令を受けているのに、対敵協力を公然と拒絶するとは、イギリス人とは驚きいった人間である。戦後ウィリアムズは、この勇敢な行為のために英国政府から勲章をもらった。

彼の行為に感心したのは後々のことで、この事件の直後のわれわれは、興奮と怒りの極であった。私も所長室に乗り込んでいった。そこには恒石参謀、藤村所長、谷山、浜本の両中尉などが集っていて、ウィリアムズの処置について話していた。両中尉は明日東京憲兵隊に行って、ウィ

（注 2）近代セールス社編（一九九〇）『素顔の銀行員』近代セールス社

だれかウィリアムズ氏を知りませんか

何を知っているか　誰を知っているか

以前、英国の銀行で研修を受けていたときに、こんな言葉を耳にしたことを記憶している。「ここ（シチー）では、何を知っているかより、誰を知っているかが重要だ」。最初は抵抗を感じたが、人と情報の結びつきを考える時、なかなか含蓄のある言葉だと思うようになった。その「人と情報」ということに関連して、私には、こんな体験がある。

話は、二年前に遡る。

父が突然入院し、担当医は「長くて半年です」と私に告げた。あらためて見る大正一二年生まれの父は、まだ十分に若く、もちろん私の心に動揺はあったが、なんとか自然に対面できた。兵隊時代のことを含めじっくり話をする機会

152

もなかったが、もうそういう時間ももてないだろう。

浜松から東京へ戻る新幹線のなかで、かつてよんだ『日の丸アワー・対米謀略放送物語／池田徳眞』（中公新書）に出てくるウィリアムズという英国人のことを思い出した。

協力を拒否した捕虜

太平洋戦争中、日本陸軍参謀本部は、捕虜を使って英語によるラジオ放送を実施したのだが、これは、いわゆる謀略放送で、米国国民に、厭戦・反戦気分を起こさせることが狙いだった。一〇数万人の連合国捕虜から選抜された一三人が、昭和一八年一二月、神田駿河台の文化学院に集められ、「協力を拒否した場合生命は保証しない」と宣告された。

そのとき、ただ一人敢然と拒否したのが、彼、ウィリアムズである。本からその部分を抜粋してみよう。

『英人のウィリアムズが、突然「気を付け」をした。少佐は、鋭い声で「協力はいやか」と問うた。ウィリアムズは、「ノー、サー」とはっきり答えた。（中

略）少佐は、一人残ったウィリアムズに近づいて、静かに「お前は死んでもよいのか」と問うた。彼は「死ななければならなければ、仕方がない」と答えた。そのあまりにも傲慢な態度に、少佐も堪忍袋の緒を切って、（中略）刀に手をかけた。』

結局、彼は無傷で東京憲兵隊に送られ、天竜川中流の鉱山で終戦を迎えた。『彼は、オックスフォード、ケンブリッジ両大学を出たような人ではないが、全世界の植民地を統治していたイギリス人の気概、すなわちジョンブル魂を、彼の放送拒否という姿で、われわれは嫌というほど見せつけられたのであった。』

ウィリアムズ氏を尋ねて

同じ中公新書『アーロン収容所・西欧ヒューマニズムの限界／会田雄次』との関連で、私にはこの場面が特に印象に残っていた。同書の、ある英軍伍長の逸話のあとのこういう記述である。

『私たちは自分を日本帝国そのものだと考えるような気概はなかった。忠勇な臣民という自覚は、自分が国そのものという考え方と相容れないものであっ

154

た。（中略）日本軍の、命令には絶対服従というのは、長いものには巻かれろという心理の基礎の上に立っている。その長いものが正義の具体像でないかぎり拒否すべきだというイギリス人のような信念は持てなかったようである』。

死を恐れなかったウィリアムズ氏に、可能なら当時の心境を訊ね、心の支えにしたいと私は切実に思った。運よく紹介してくださる方があって、その著者、池田徳眞氏にお目にかかることができた。いろいろお話を伺えたのだが、池田氏も、放送に協力し反逆罪に問われた米国人プロボー氏の裁判で、同じく証人として渡米していたウィリアムズ氏と、昭和二八年にニューヨークで再会されたのが最後で、現在の消息はご存じなかった。文化学院での拒否事件に立ち合われた他の方々も同様であった。

中目黒の防衛研究所図書館には、昭和一六年日本海軍陸戦隊が、赤道に近い英領マキン島（ブタリタリ島、現在のキリバス共和国）に上陸し、「ウィリアムズ行政長官」を連行したときの記録があった。当時、私が住んでいた社宅近くの都立中央図書館では、『心理作戦の回想』と『おかわいそうに――東京捕虜収容所の英兵記録』のなかに、ウィリアムズ氏に関する記述を見つけたが、そ

れ以上の成果はなかった。公文書館と厚生省援護局へ直接照会してくださった方からは、「どちらにも関連する資料は保管されていなかった」という回答をいただいた。それから朝日新聞の「戦後四二年」欄にも掲載していただき、広く一般に消息を訊ねてみたが、なにも反応はなかった。

一九〇九年生まれ　オックスフォード大学卒

週末、父を見舞った折りに浜松市の図書館で、『天竜川中流の鉱山』を調べたが、とうに閉山しており、所在地の町誌も参考にはならなかった。晩秋の一日、JR飯田線で旧久根鉱山の近くまで足をのばしてみたものの、やはり成果はなく、調査は手詰まりの状態になってしまった。

しかし、「戦後、英国政府から勲章をもらった」という本の記述から道が開け、タイムズ紙の叙勲リストを調べてみることにした。国会図書館で、戦後数年分のマイクロフィルムを、土曜の半日をかけて読んでみたが、見当たらない。そこで、ロンドンのタイムズ本社へ手紙で相談したところ、「ここへ照会してみてはどうか」と、外務・英連邦省人事部の住所を教えていただき、そこでよう

やくウィリアムズ氏の経歴と住所を知ることができたのである。その内容を要約してみよう。

「C・F・ウィリアムズ。一九〇九年生まれ。オックスフォード大学卒。ゴールドコースト（現在のガーナ共和国）勤務がもっとも長い。一九五六年OBE（英帝国勲章）受賞」。つまりウィリアムズ氏は、池田氏の「大学の後輩」で、事件当時三四～三五歳、少佐と同年だった。英国南西部の住所については、「現在居住しているかどうかは不明」と付記してあった。

資料はファイル一九冊

その年の暮れ、勤務中の私のところへ危篤の報が入り、夜中に父は死んだ。父の勤務先のご厚意で社葬が催された。仕事以外まったく無趣味にみえた父としては、おそらく満足だっただろう。式の挨拶のなかで私は、「父とゆっくり話す機会がついにないままとなり残念だが、父の生きた時代のことは自分なりに調べてみたい」と言った。ウィリアムズ氏は、まだ生きておられるのだろうかと、ふと思った。

その後、ウィリアムズ氏宛に送った私の手紙は、宛先不明で英国から返送され、調査は振り出しに戻った。いまだに氏の消息は不明だが、余暇を利用して少しずつ集めてきた資料は、ファイル一九冊になっている。

さまざまな出会い　さまざまな厚意

思い返すと、一個人の関心に対して、日本国内や海外の多くの方々が、親切に対応してくださり、感謝の気持ちでいっぱいである。そして、ワープロや家庭用複写機の現代的な便利さとともに、伝統的な手紙の効用を再認識した。文書での照会には、個人・機関を問わず概して丁寧な回答をいただいた。

前述の叙勲リストは、英国大使館文化部の助言がきっかけだった。日本経済新聞に掲載された、対馬でレタス栽培に取り組む英国人は、私の質問に対し、英軍の軍律やビルマでの対日戦の経験を率直に書き送ってくれた。文化学院で捕虜を監督する立場にあった方からは、当時の状況の実に詳細な分析が寄せられた。「天竜川中流の鉱山」は、「長野県下伊那郡ではないか」という防衛研究所の意見も参考になった。「植民地時代の資料は、当国独立時にすべて新政府

へ引き渡したので、当地の関連機関に照会していて回答が遅れました」という、英国在外公館からの返事には恐縮した。オーストラリア戦争記念館からは、アドバイスとともに同国内の古書店リストが同封されてきた。また、東京という地の利を生かし、いろいろな方から直接お話を伺うこともできた。

戦前、商社員としてマキン島に駐在しておられた方には、キリバス共和国名誉領事室の紹介でお目にかかったのだが、平和で美しい珊瑚礁の島の生活を、まるで昨日のことのようにいきいきと語ってくださった。横浜市広報室で紹介していただいたある初老の英国人は、千葉県外房の海辺に日曜大工で建てた別荘で、草花を相手に孤独で自由な週末を楽しんでおられた。ある友人は、ニューヨーク裁判所でのウィリアムズ氏の証言のコピーを入手しようと骨をおってくれた。

いずれにしても、「人」からもたらされた情報は、私が書物で得たものより多彩で、かつ有益だった。これからもなにかの機会をとらえて、ウィリアムズ氏とその時代を調べてゆきたいと思っている。

（注３）CiNii Books　ケンブリッジ大学図書館

（注４）Stanford University, Hoover Institution Library & Archives

SearchWorks **Catalog**

COLLECTION

Nagura Yuichi papers, 1992-2021

Archive/Manuscript — 2 manuscript boxes, digital media

Finding aid Online Archive of California ↗

See availability

Description

Language Japanese, English. In Japanese and English

Creators/Contributors

Author/Creator Yuichi, Nagura, creator.

Contents/Summary

Summary

The collection features interviews and personal histories, both oral and written, of prisoners of war and Ikeda Norizane, of the English language propaganda radio series, Zero Hour. It also includes educational material on Zentsūji, a World War II POW camp in Japan, as well as a computer printout of Tsuneyoshi Shigetsugu's biography.

Subjects

Subjects

Ikeda, Norizane, 1904-1993.

Tsuneishi, Shigetsugu, 1909-

Rajio Tōkyō.

Zentsūji Camp (Japan : Concentration camp)

World War, 1939-1945 > Japan > Prisoners and prisons.

Show more

Genre	Oral histories.

Bibliographic information

Earliest date	1992
Latest date	2021
Note	Historian and researcher. Researches materials related to Allied Forces' POWs in Japan. Also researches Shigetsugu Tsuneishi, who headed Radio Tokyo

Availability

Hoover Institution Library & Archives ↗
Today's hours: 8:30a - 4:30p

Reservations are required at least seven days in advance. For more information, see Plan a research visit.

Stacks	Request via Finding Aid
2021C1 BOX 1	✓ Available for in-library use
2021C1 BOX 1	✓ Available for in-library use

Librarian view | Catkey: 14289918

索引

B29, 66, 73, 90
BBC, 8, 13, 44
BPC→英国燐鉱石委員会
Bunka Camp Story, 82
　BUNKA CAMP, 51
FBI, 76
JOAK, 31, 33, 35- 37, 39, 40, 41, 44, 47, 51-56, 87, 89
　NHK→31, 38, 41, 141
　第五スタジオ, 37, 52, 89
NARA→米国立公文書記録管理局
アイスクリーム, 68, 74
会田雄次, 49, 83
アイバ・戸栗, 39
芥川龍之介, 45
朝日新聞, 83
朝吹四郎, 26, 48
浅間丸, 24,
厚木飛行場, 69, 74
アナウンサー, 13, 33, 35, 36, 38, 39, 40, 41, 43
　放送員, 38
アフリカ, 1, 76, 141
アメリカ, 34, 38, 40, 43, 85
　アメリカ局→外務省
　アメリカ研究所→立教大学
　アメリカ人, 34, 82
　アメリカ兵, 69
新居町, 71- 74, 84, 85, 90
有末精三, 32, 46
淡路事務所, 44, 46, 54
暗号, 10-12, 14, 15, 48
イギリス→英国
イギリス人→英国人
イギリス帝国→大英帝国
池田徳真, 42-56, 58, 68, 75-77, 79, 80, 82-85, 87, 141
池田仲博, 42, 84
医師, 5, 24, 64- 68, 73, 74
伊勢神宮, 73
板橋並治, 41, 89, 116
イタリア（イタリー）, 3, 34, 40
依知川庸司, 21, 88, 100
市ヶ谷, 75, 84
委任統治領, 5
今切口, 71, 72
インス, 36, 37, 47, 89, 114
インド, 1, 5, 10, 29, 35, 47
ウィリアムズ（チャールズ）, 1-27, 29- 31, 35, 40, 48- 51, 53 - 70, 73-77, 79, 80, 84, 87, 88, 90, 101, 103, 105, 139, 141, 151
ウェーク, 24, 88
ウガンダ, 76
梅棹忠夫, 11, 81, 84
英国（イギリス）, 2, 3, 5-9, 18, 20, 25, 28, 31, 35, 38, 42-44, 47, 49, 51, 65, 74, 75, 81, 83, 85, 141
　英国国教会, 1, 29
　英国植民地省（植民地省）, 1, 2, 3, 7, 10, 22, 25, 26, 49, 68, 76
　英国人（イギリス人）, 4, 16, 20, 23, 25, 26, 29, 30, 35, 45, 48, 55, 62, 67, 68, 70, 75, 84
　英国紳士, 2, 80

英国政府, 3
英国法, 4
英国民, 6
英国燐鉱石委員会（BPC）, 4, 6
英文放送事前監査室, 41
衛兵, 15, 21, 23-25, 27, 28, 48, 55, 60-62, 65, 66-69
英連邦, 2
江戸川乱歩, 47
エリス諸島→ギルバート・エリス諸島（植民地）
ツバル, 3
エリス地区→ギルバート・エリス諸島（植民地）
沿岸監視員, 7, 9, 10, 11, 12, 16, 25
大岡昇平, 45, 83
大蔵省, 22, 32
大麻山, 25, 27, 88
オーシャン島, 3-6, 8, 11, 12, 14, 15, 76
オースチン・リード, 16, 17, 73
オーストラリア, 3, 7, 8, 15, 28, 29, 35, 42, 74
太田天橋, 46, 53, 85
大船, 24, 25, 29, 64, 85
大森（捕虜）収容所→東京俘虜収容所
大屋角造, 40, 82
大山勉, 57-60, 87
沖縄, 67, 74
沖島, 13-16, 74, 81, 88
奥村喜和男, 38
尾崎行雄, 76, 84
オックスフォード大学, 3, 5, 42, 43
オランダ, 2, 28, 29, 31, 51, 53
海軍, 3, 7, 10, 12-15, 17-25, 29, 31, 33, 34, 41, 43, 48, 49, 52, 68, 69, 71, 73, 75, 81, 84
日本海軍, 7, 13-15, 25, 73
日本艦隊, 13, 29
会計, 3-5, 23
外出, 21, 23, 25, 26, 28, 52
ガイズ・ライス・デバイス, 64, 90
外務省, 19, 31, 34, 41, 42, 46, 82
アメリカ局, 41
賭け, 3, 66
下士官, 19, 20, 22-27, 49, 55, 67, 88
下士官・兵, 19, 22, 25- 27, 49, 55, 67
カズンス（チャールズ）, 35-38, 41, 43, 47, 55, 89, 113
風と共に去りぬ, 47, 85
火葬, 65
ガダルカナル, 31, 36-39, 52, 71
学校, 4, 5, 17, 22, 32-34, 46, 50, 51, 55, 58, 81-83
カッター, 15
勝野金政, 46, 47, 83, 85, 89, 119
カトリック, 10, 13, 16, 29
カナダ, 60, 65
カヌー, 9, 12, 13
ガバナー→総督
樺山資英, 42-44, 87
カルプフライシュ, 30, 48, 51-54, 79, 89, 120
河村俊平, 32, 82
看護婦, 23, 24, 88
神崎長次郎, 7, 14, 16
慣習法, 4
環礁, 3, 5, 11, 81
広東省, 4
幹部候補生, 4, 8
官報, 76, 80
艦砲射撃, 71, 84
記者, 1, 20, 21, 27, 72, 74
新聞記者, 20
偽装巡洋艦, 7, 9, 10
北山節郎, 36, 37,82

キップリング, 1
木村伊兵衛, 34
教区, 8, 76
共産党, 47
行政官, 1, 4, 7, 16, 22, 25, 49
機雷, 13, 16, 73, 74, 88
キリバス→ギルバート・エリス諸島（植民地）
ギルバート・エリス諸島（植民地）, 2-4, 7, 8, 15
エリス諸島, 3, 10, 80
ツバル, 3
エリス地区, 4
ギルバート諸島, 3, 5, 7, 10, 13
キリバス, 3, 7, 81
南部ギルバート地区, 4, 14, 15
北部ギルバート地区, 4
ギルバート語, 3, 11
ギルバート支店, 5, 6, 8, 14, 22
きんぴらごぼう→ゴボウ
グアム, 20-24, 85
空襲, 14, 33, 38, 45, 55, 66, 67, 71, 85
クスノキ, 4, 76
九段事務所, 46, 47, 54
朽木綱貞, 49
朽木綱博, 49, 52-54, 89, 119
駆逐艦, 15, 41, 71, 73, 74
久保龍郎, 65-68, 70, 130
熊谷勝美, 72, 73
クリスマス, 16, 29, 61, 65, 89, 90
グリフィス, 17, 24, 88, 102
グリンブル, 8, 81
クルーハウス, 42, 44, 51, 83
桑原（桑原長. 恒石の八課先任）, 83
軍人, 10, 21, 22, 23, 25, 31, 32, 41, 42, 46, 50, 73, 75
軍属, 22, 23, 56
軍令部, 24, 25, 28, 31
米国班長, 24
警察, 4, 5, 8, 13, 14, 24, 57, 71, 72
巡警, 5, 6
刑務（所）, 4, 8, 9, 13
原子爆弾, 67
ケンブリッジ大学, 1-3, 14, 26, 30, 49
憲兵, 21, 52, 55, 57- 62, 65, 72, 73, 75, 76, 83, 89
小岩井光夫, 52, 56, 57, 83, 89, 123
交換船, 24, 25, 36, 42
航空母艦（空母）, 25, 28, 69, 74
講習会, 26, 29, 89
高知, 32, 75, 76, 77
高等弁務官, 3, 8, 9, 10
神戸, 22-24
ゴードン, 27, 29, 30, 64, 67, 68, 70, 73, 74, 76, 81, 87
コーンビーフ, 11, 14, 69
国際赤十字, 19
国際法, 24
ココナッツ, 8, 9, 11
ココヤシ, 3, 10, 11
金刀比羅, 24
金比羅, 21
小林久子, 79, 82
小林秀雄, 45
コプラ, 3- 7, 88
ゴボウ, 64, 74, 85
きんぴらごぼう, 76
コンクリート, 11, 51, 55, 60, 61, 71
裁判, 4, 8, 39, 64, 68, 70, 75, 76, 81, 82
サイパン, 63
酒, 9, 10, 22, 23, 29, 46, 61, 76, 77
佐々木平, 74, 80, 84, 90, 138
サッカー, 8, 65
実松譲, 24, 25, 85

サン・ファン, 71, 90
珊瑚礁, 4, 6, 8, 10, 11, 15
山王ホテル, 36, 41, 42, 44
桟橋, 15-17, 20, 21, 88
参謀本部, 24, 31-38, 40, 41, 43, 46-52, 55, 71, 75, 80, 85, 89
　第二部, 32, 33, 40, 41, 46, 50, 75
　第八課, 32-34, 36, 40-44, 46, 50, 52, 75, 80
ジープ, 39, 72
シェンク, 51, 53
シガレット→タバコ
士気, 28, 39, 60, 61, 63, 65, 66
自転車, 4, 8, 13, 14, 77
事務官（駐在事務官）, 1, 4, 5, 9, 26
ジャワ, 33, 35, 49
上海, 19, 24, 27, 51
収容所, 19, 20-29, 35, 42, 44, 45, 48, 49, 51, 54, 57, 59, 60-70, 72-77, 80-85, 88, 90, 141
酋長, 1, 8, 11, 13
ジュネーブ条約→条約
酒保, 22, 23, 29
巡警→警察官
礁湖, 4- 7, 9-16
将校候補生予備役, 3, 25
将校捕虜, 19, 23, 35, 45, 67
商社, 5, 8, 13, 15, 16
小数点, 64
情報, 13, 14, 20, 23-25, 27, 31, 33-35, 37, 38, 41, 43, 46, 50, 52-54, 66, 69, 75, 80- 82, 141
情報局, 31, 34, 35, 37, 38, 41, 52-54, 82
条約, 19, 21, 28, 32
　ジュネーブ条約, 16
上陸用舟艇, 71-74, 90
ジョーンズ, 9-15, 17, 18, 25, 26, 29, 35, 67, 74, 79, 81, 87
植民地, 1- 5, 7, 8, 10, 14, 16, 20, 22, 25, 26, 31, 35, 36, 49, 68, 76, 80
植民地学, 3
植民地省→英国植民地省
植民地政府, 4, 5, 7
叙勲, 76
女性, 7, 38, 39, 48, 51, 63, 68, 72, 74, 90
署名, 9, 16, 27, 28, 29
印半纏, 70, 76, 80, 90, 141
シンガポール, 26, 32, 35, 42, 47, 55, 61
神社, 20, 21, 25, 27, 85
真珠湾, 13, 33
進藤一, 17, 18, 20, 24, 88, 95
人道, 18, 19, 24, 27, 38
シンプソン, 69, 70, 72, 73, 75, 90, 133
新聞, 1, 8, 20-23, 27, 31, 34, 38, 42, 47, 63-68, 71, 72, 74, 81-85, 141
新聞記者→記者
診療所, 4, 5
スイス, 17, 69
杉浦克巳, 71, 84
杉浦萠子, 71, 84
杉本苑子, 46, 83
杉山元, 33, 52
鈴木（薫二，大森収容所長）, 51
鈴木与平, 71-73
スティーヴンソン, 3
スバ, 10, 88
スペイン, 22
スマトラ島, 61
須山芳枝, 39
駿河台技術研究所, 46, 89
駿河台分室
　分室, 33, 40, 46-49, 51, 53, 55, 68, 75-77, 83-86, 89, 151
スローナム, 73
静海丸, 6, 7

税関, 4, 17, 22
政庁, 4, 5, 7, 8, 11, 14
政庁船, 4, 5
赤十字, 23, 25, 27, 29, 48, 61, 64, 65, 74, 82, 90
瀬島龍三, 33
セメント, 58, 61, 63, 83
ゼロ・アワー, ,31, 37, 38, 39, 43, 44, 47, 55
善通寺（収容所）, 19-29, 35, 48, 64, 66, 67, 70, 74, 76, 79, 80, 81, 84-86, 88, 141
宣教団, 4
戦車揚陸艦, 74
潜水艦, 17, 28, 70
宣誓, 27
前線班, 37, 38
宣伝, 18, 31, 33-38, 40- 47, 50, 52-55, 57, 82, 83, 85
総督, 3, 6, 10, 14, 21, 26, 85
　ガバナー, 77
染木煦, 5, 6, 81
ソ連, 20, 32, 37, 47, 67
ソロモン諸島, 3
ダール, 1, 80
タイ＝ビルマ鉄道, 28
ダイアナ, 76
第一次（世界）大戦, 3, 5, 8, 19, 42, 43
第一ホテル, 36
大英帝国（イギリス帝国）, 1, 2, 81
大使館, 38
大酋長→ブレンタラワ
対敵宣伝放送の原理, 43
大東亜会議, 46, 50
大同丸, 16
第二次世界大戦, 2, 32
大日本帝国陸軍→陸軍
第二の小泉八雲→ブッシュ
第二部→参謀本部
第八課→参謀本部
太平洋, 1-3, 7, 9, 10, 13, 15, 26, 31, 37, 38, 40, 48, 49, 63, 70, 71, 73, 81, 90, 134
　太平洋戦争（戦線）, 19, 32, 34, 40, 45, 47, 48, 66, 70, 81, 82
　　大東亜戦争, 46, 81
台湾, 25, 29, 80, 89
多川精一, 34, 82
佗美浩, 29, 89, 109
脱走, 22, 27, 28, 85
多度津, 20- 22, 24, 48, 88
谷山樹三郎, 51, 52, 57, 80, 89,124
タバコ, 10, 15, 18, 19, 24, 26, 55, 56, 61, 65, 66, 68, 69
　シガレット, 23
ダム, 60, 63, 66, 83, 90
タラワ, 4- 8, 10, 13, 49, 76, 81
ダンス, 8, 11, 17
短波放送, 31, 34, 42, 44, 50
中国, 4, 7, 8, 13, 15-17, 20, 27, 31, 65
　中国人, 60-64
朝鮮, 49, 60, 61, 80
直轄植民地, 3
通信, 8, 12, 14-17, 31, 34, 47, 58, 74, 81, 82, 84
通信士, 8, 14-17
通訳, 16, 21, 24, 26, 27, 30, 45, 48, 49, 52, 56, 60, 71, 72, 75
塚田数平, 76, 84, 90, 140
津軽, 16
恒石重嗣, 31-42, 44, 46-53, 55-59, 75, 76, 79, 82, 84, 87, 141, 151
ツバル→ギルバート・エリス諸島（植民地）
逓信省, 34, 41
寺田寅彦, 32
点呼, 17, 26, 55, 61, 67
電車, 21, 22

伝単, 34-37, 41, 44, 46, 47, 53, 55, 85, 89
天竜川, 57, 60, 66, 67, 70, 90
ドイツ, 3, 5, 7, 9, 10, 26, 31, 34, 38, 66, 67
　ドイツ艦隊, 6
　ドイツ軍, 2, 3, 6, 37, 65
　ドイツ人, 7, 9
　ドイツ兵, 9
東京駅, 48, 60
東京外国語学校, 58
東京憲兵隊（本部）, 57-60, 62, 75, 89
東京帝国大学, 32, 42, 49
東京俘虜収容所, 23, 44, 80
　大森（捕虜）収容所, 23, 42, 45, 48, 57
東京ローズ, 39, 83, 85
東条英機, 27, 35, 40, 46, 85
盗聴器, 50
東方社, 34, 47, 55
徳川慶喜, 42
トラック, 48, 50, 51, 74
トロッコ, 61, 62, 90
トンネル, 60, 61, 66
内火艇, 16, 17
ナウル, 6
永井八津次, 75
長崎, 67
中島敦, 11, 81
中島健蔵, 55, 83
中曾根康弘, 33
名古屋港, 73
那須良輔, 47, 85
並河亮, 35, 37, 41, 82
南部ギルバート地区→ギルバート・エリス諸島
　（植民地）
南洋貿易, 5-8, 13-15, 22, 81
西村伊作, 45, 46, 83
西義章, 36, 37, 41, 42, 47, 89, 113
二世, 34, 37-39, 42, 45, 46, 49, 53, 54, 56, 82
日本, 1, 3, 5-7, 9-17, 19-29, 31-52, 55-57, 60, 61,
　63-70, 72-77, 81- 85, 87, 151
　日本円, 17, 22
　日本海軍→海軍
　日本艦隊→海軍
　日本機, 12, 14
日本軍 7, 10, 13-16, 19, 20, 23, 24, 26-28, 33, 35,
　37, 38, 40, 41, 45, 49, 67, 70, 72, 77, 82, 83
　日本語, 7, 13, 17, 21, 23, 25-27, 47, 66
　日本公使館, 42, 50
　日本時間, 13, 37
　日本酒, 76, 77
　日本商社, 5
　日本女性, 48
　日本人, 6, 13, 22-24, 26, 37, 41, 45, 49, 51,
　55, 57, 60, 61, 63, 65, 67, 68, 70, 83
　日本精工, 84
　日本刀, 46, 75
　日本兵, 14-16, 49, 77
　日本放送協会, 31, 53, 87
　日本料理店, 84
ニューギニア, 52, 83
ニュージーランド, 7- 10, 12, 15-17, 25, 74
ニュース, 8, 13, 23, 31, 35, 37,-41, 43, 141
ニューヨーク, 17, 38, 39, 47, 68, 76, 84, 90, 141
ニューヨーク・タイムズ, 38, 39
根岸競馬場, 17, 84, 88
ネクタイ, 17, 73
ノルマンディー, 63, 65
パイロット, 28, 39
爆撃, 55, 67, 74
白人の責務, 1
バターン死の行進, 23
羽田, 33, 46
パブリック・スクール, 1, 17

浜口雄幸, 32
浜名海兵団, 71, 74, 84
浜名湖, 71, 74, 90
浜松市, 67, 70, 71, 81, 84, 86, 151
浜本純一, 50, 51, 80, 83, 89, 124
パラヴィチーニ, 27
原田源燈, 61, 62, 64, 70, 76, 80, 87, 141
パン, 6, 21, 38, 55, 63, 74
反逆罪, 39, 76
ピアノ, 55
ビール, 7, 10
ビカチ, 7, 9-11, 13-15, 26, 87
飛行艇, 12, 15, 81
ビティ, 10, 11, 88
ヒトラー, 41
火野葦平, 48
日の丸アワー, 42, 49, 50, 52-56, 80, 82, 84, 85
ヒューマニティ・コールズ, 38, 50
病院, 3, 5, 22-24, 51, 66, 68, 69, 71-74, 90
病院船, 3, 68, 69, 71-74, 90
平川唯一, 40, 43, 55, 85, 89, 116
ビルマ, 28, 33, 49
広島, 48, 67
ファース, 2, 3, 88
フィジー, 3, 5- 8, 10, 12, 14, 15
フィリピン, 18, 23, 33, 36, 47, 64, 65, 74
復員, 18, 72
富士山, 13, 17, 50
フジタ, 49, 51, 53, 55, 56, 89, 121
武士道, 41
藤村信雄, 41, 42, 44, 47, 89, 118
仏印, 33, 35, 50, 56, 58
ブッシュ, 23, 48, 49, 81, 89, 120
　第二の小泉八雲, 48
フナフチ, 4, 10
フランス, 2, 3, 47, 55, 58, 63
俘虜情報局, 20, 23, 25, 27, 69, 75, 80, 81, 82
俘虜管理部, 35
ブレンタラワ（大酋長）, 8, 9, 13
風呂, 29, 66
プロボー, 52-54, 56, 76
文化学院, 45, 46, 50, 51, 55, 85, 87, 89
分室→駿河台分室
米国, 10, 17, 26, 31, 33, 35, 38-41, 46, 47, 51, 54-56, 60, 64, 65, 69, 72, 76, 80, 85
　米国議会図書館, 80
　米国立公文書館, 136
　米国立公文書記録管理局（NARA）, 85, 136, 137
　米国人, 21, 25, 29, 30, 34, 40, 45, 52, 68, 70, 75
　米国政府, 22
　米国大使館, 24
　米国大統領→ルーズベルト
　米国班長→軍令部
　米国民, 40
兵士, 7, 10, 12, 13, 15, 17, 18, 20, 28, 36, 39, 69, 72
ベートーヴェン, 19, 60
ベネヴォランス, 69
逸見, 17
ベルー, 4, 14
ヘルマーズ, 22, 24, 88, 101
ヘンショー, 29, 48, 51- 54, 57, 75, 79, 89, 109
弁務官, 3, 4, 8
捕虜, 9, 10, 14,-29, 35-40, 42, 43-45, 47-58, 60-74, 77, 81- 85, 88-90, 141
捕虜棟, 21, 22, 27, 47, 50-52, 54, 55, 57, 61, 64, 88-90
ホイットフィールド, 65, 66, 68, 69
放送員→アナウンサー
謀略, 33, 35-38, 40- 44, 46, 47, 50, 53, 57, 68,

76, 85
謀略放送, 33, 36, 37, 38, 40-44, 46, 53, 57, 68, 76, 85
ボーデン, 26, 28, 88, 105
ボート, 6, 11, 15
ポートモレスビー, 52
ホームレス, 66
牧師, 8, 29
北部ギルバート地区→ギルバート・エリス諸島（植民地）
保護領, 3
細谷雄平, 21, 27
ホテルニューグランド, 69
ポルトガル, 2
香港, 7, 10, 19, 26, 48
マーケティング, 33
マーシャル諸島, 5, 9
舞阪町, 71, 84
マキン, 5- 9, 11-16, 18, 25, 26, 49, 60, 74, 77, 80, 84, 88
マクミラン, 21, 29, 88, 89, 100, 108
増淵真吾, 6, 8, 14, 22, 79
増淵ミツ, 6, 84
マッカーサー, 69
マックノートン, 49-51, 53, 54, 57
マニラ, 74, 75
丸亀, 19, 32, 34
マレー（マラヤ）, 26, 33, 35, 6- 64
満州, 31-33, 67, 82
満島駅, 60, 63, 66, 70, 73, 89
満島収容所, 64, 65, 70, 83
水原義重, 21, 22, 24, 26, 27, 88, 106
満潮英雄, 37-39
宮本吉夫, 38, 82, 85
都レストラン, 76, 90
民間防衛隊, 12
向島収容所, 48
無線, 8-13, 15, 71, 72, 85, 87
メッツェラー, 28, 89, 108
メルボルン, 3, 42, 50
面接, 1, 2, 45, 49, 53
毛布, 16, 17, 20, 60, 66
森野正義, 46, 47, 52, 89, 119
モンロー主義, 54, 55
山霧丸, 17
山下奉文, 32
ヤミ（闇）, 55
ヤルート, 5, 7, 11, 13, 16
郵便, 5, 7, 9, 10, 22, 29, 48, 49
郵便局, 5, 9, 10, 22
郵便貯金, 22, 29
郵便電信局, 7, 9, 10
郵便物, 48
ヨーロッパ, 3, 5, 6, 63
抑留者, 13, 16, 20, 22, 23, 70, 71
横須賀, 17, 22, 24, 68, 74
横浜, 17-20, 24, 69, 74, 79, 81, 84, 86
横浜駅, 18
横浜裁判, 81
横浜市, 81, 84
横浜港, 17, 74
横山隆一, 32
吉田茂, 80
ヨット, 9
予備役, 25
ラジオ, 8, 13, 26, 31, 33, 35-44, 82, 85, 141
蘭印, 29, 35
陸軍, 3, 5, 10, 19, 20, 24, 25, 27, 28, 30-36, 39, 44, 46, 47- 52,55, 56, 69, 75, 76, 79, 80, 82, 83
大日本帝国陸軍, 52
日本陸軍, 19, 32, 49, 50, 75, 82

陸軍教, 75
陸軍士官学校（陸士）, 32, 33, 40, 50, 82, 111, 113, 123
陸軍省, 19, 20, 25, 27, 28, 75
陸軍将校, 44, 76
陸軍宣伝班, 55
陸軍第一一師団, 19
陸軍大学校（陸大）, 30, 50, 82, 83
陸軍大臣, 27
陸軍中野学校, 50, 51, 82, 83
陸軍美術協会, 47
陸軍病院, 24
陸軍幼年学校（陸幼）, 32, 33
陸戦隊, 13- 16
立教大学, 37
アメリカ研究所, 37
リトル・マキン, 9
燐鉱石, 4
ルーズベルト（大統領）, 16, 40, 41, 43
レイズ, 36, 37, 47, 89, 114
レゲ, 64
レスキュー, 71, 90
列車, 18, 20, 48, 49, 60, 63, 66, 70-73, 90
連合軍, 63, 65, 68, 70, 74, 83, 90
ロンドン, 7, 16, 30, 60, 76
ワインスタイン, 64- 66, 68, 74, 84
渡辺睦裕, 49, 65, 67, 68, 85
ワラス, 16

Table of Contents

Williams no Taiheiyō Sensō
(*Williams in the Pacific War: From a South Sea Island to Wartime Japan*)
Nagura Yuichi
2026

Preface i
Table of Contents ii
Notes on Usage v

Chapter One　From Cambridge to the Pacific 1

The Colonial Office 1
The Outbreak of War and Volunteering 2
The Gilbert and Ellice Islands Colony 3
The Work of an Administrative Officer 4
Posting to Tarawa and a Japanese Trading Company 5
Anxiety Enveloping the Islands 6
Assignment to Makin Island 7
Coastwatchers 9
The Radio Facility on Bikati Islet 11

Chapter Two　The Outbreak of War in the Pacific 13

Radio 13
The Japanese Landing 13
Surrounding Islands 15
The Voyage to Japan 16
Yokosuka and Yokohama 17

Chapter Three　The First Prisoner-of-War Camp 19

The Establishment of a POW Camp 19
The First Prisoners 20
Delay in Landing at Tadotsu Port 20
Confusion after Internment 21

Payment of Salaries 22
U.S. Navy Nurses 23
The Navy and Prisoners 24
Receiving Officer Status 25
Training Sessions 26
The Refusal-to-Sign Incident 27
Entertainment Performances 29

Chapter Four The Radio Program That Astonished the World 31

Japanese Shortwave Broadcasting 31
Tsuneishi, Shigetsugu..... 32
The Officer in Charge of Propaganda 33
The Transfer of Major Cousins 35
Colonel Nishi's Return to Japan..... 36
The Launch of the "Zero Hour" Broadcasts 37
A New Program That Captivated American Soldiers ..... .38

Chapter Five Anti-American Propaganda Broadcasting and Williams' Refusal 40

Restraining the Editorial Line of "Radio Tokyo" 40
The Start of Anti-American Propaganda Broadcasting 41
Ikeda, Norizane 42
The Sannō Hotel 44
The Start of Interviews with Prisoners 45
Surugadai and the Bunka Gakuin 45
The Opening Ceremony 46
Williams' Transfer to Tokyo 48
Delayed Internment of Prisoners 50
Arrival and Confusion 51
The Order and the Rehearsal 52
The Start of Anti-American Broadcasts 53
Life in the Prisoners' Barracks 55
The Williams Refusal Incident 56
The Tokyo Kempeitai 57

Chapter Six To a Camp Deep in the Mountains 60

Wartime Dam Construction 60
A Broad-Minded Squad Leader 61

Work at Mitsushima Station 63
Distribution of Meals 64
Christmas 65
Until the End of the War 66

Chapter Seven　Beyond the War 68

The End of the War and the Resulting Chaos 68
Departure from Mitsushima 69
The U.S. Fleet off the Enshū Coast 70
Arai-cho Station 72
Repatriation 73
Pursuit by the U.S. Military 75
Reunion in New York 76

Reference Materials 79
Photographs on the Cover and in the Main Text 87
Photographs Related to the Main Text 88

Chapter One 91
Chapter Two 93
Chapter Three 96
Chapter Four 111
Chapter Five 116
Chapter Six 125
Chapter Seven 132

Afterword 141
Background of the Research 142
Index 157
Table of Contents 167

名倉有一 一九五〇年生まれ。大学卒業後、金融機関に勤務した。現在、NPO 法人インテリジェンス研究所特別研究員。主な編著書に『駿河台分室物語』、『恒石重嗣年譜』、『Japan's first POW Camp in WWII: Zentsuji』などがある。

書　名　ウィリアムズの太平洋戦争
副　題　南の島から大戦下の日本（にほん）へ
著　者　名倉有一（なぐら・ゆういち）
作成地　静岡県浜松市
作成年　二〇二六年

非売品
© Nagura Yuichi 2026

裏表紙写真

ウィリアムズさんとの思い出を語る池田徳真さん
撮影場所：東京都千代田区 霞会館
撮影時期：一九九二年六月一三日
筆者撮影
手前の黄色いファイルは *Bunka Camp Story*
（現在、国立国会図書館憲政資料室蔵）